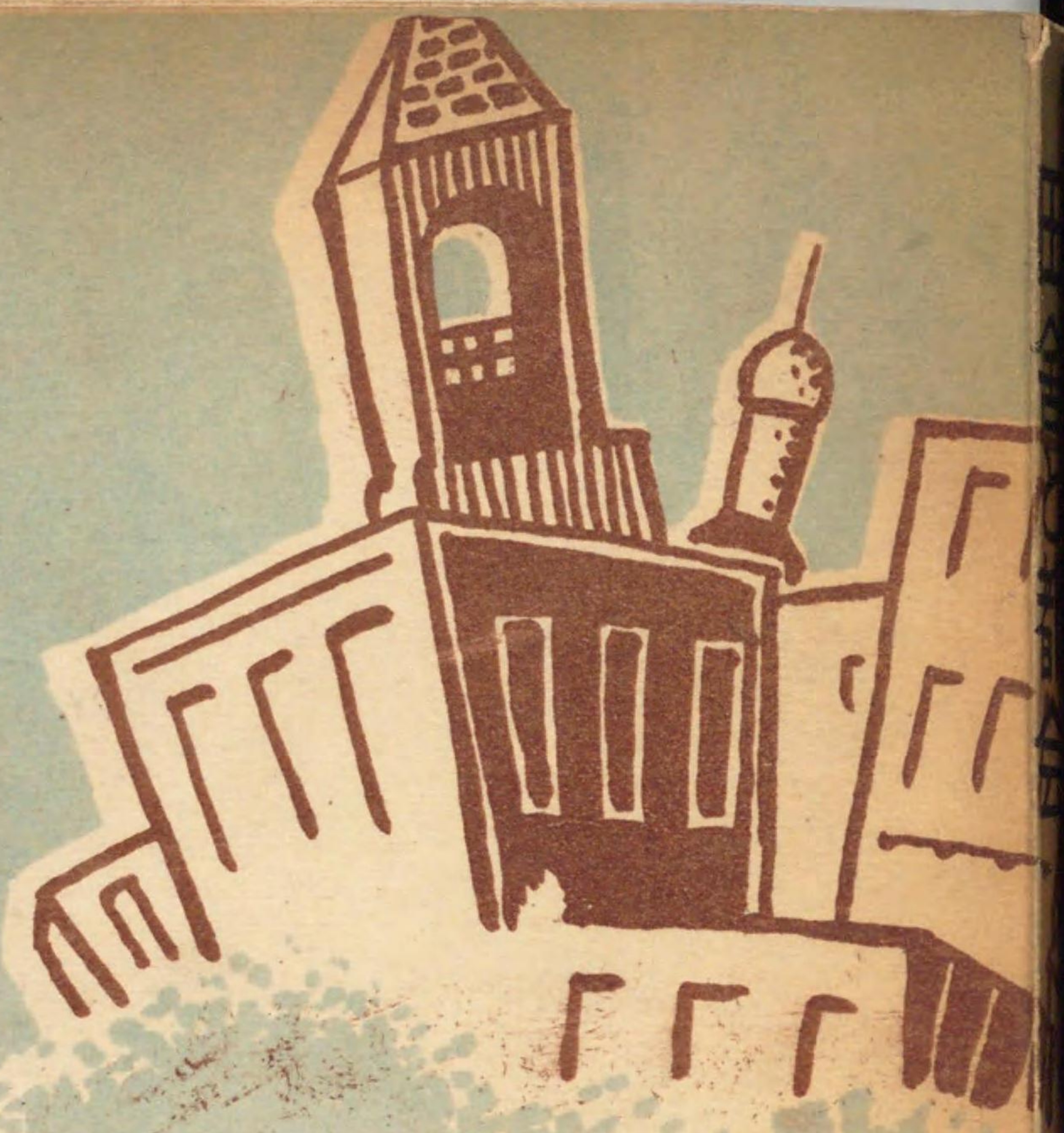
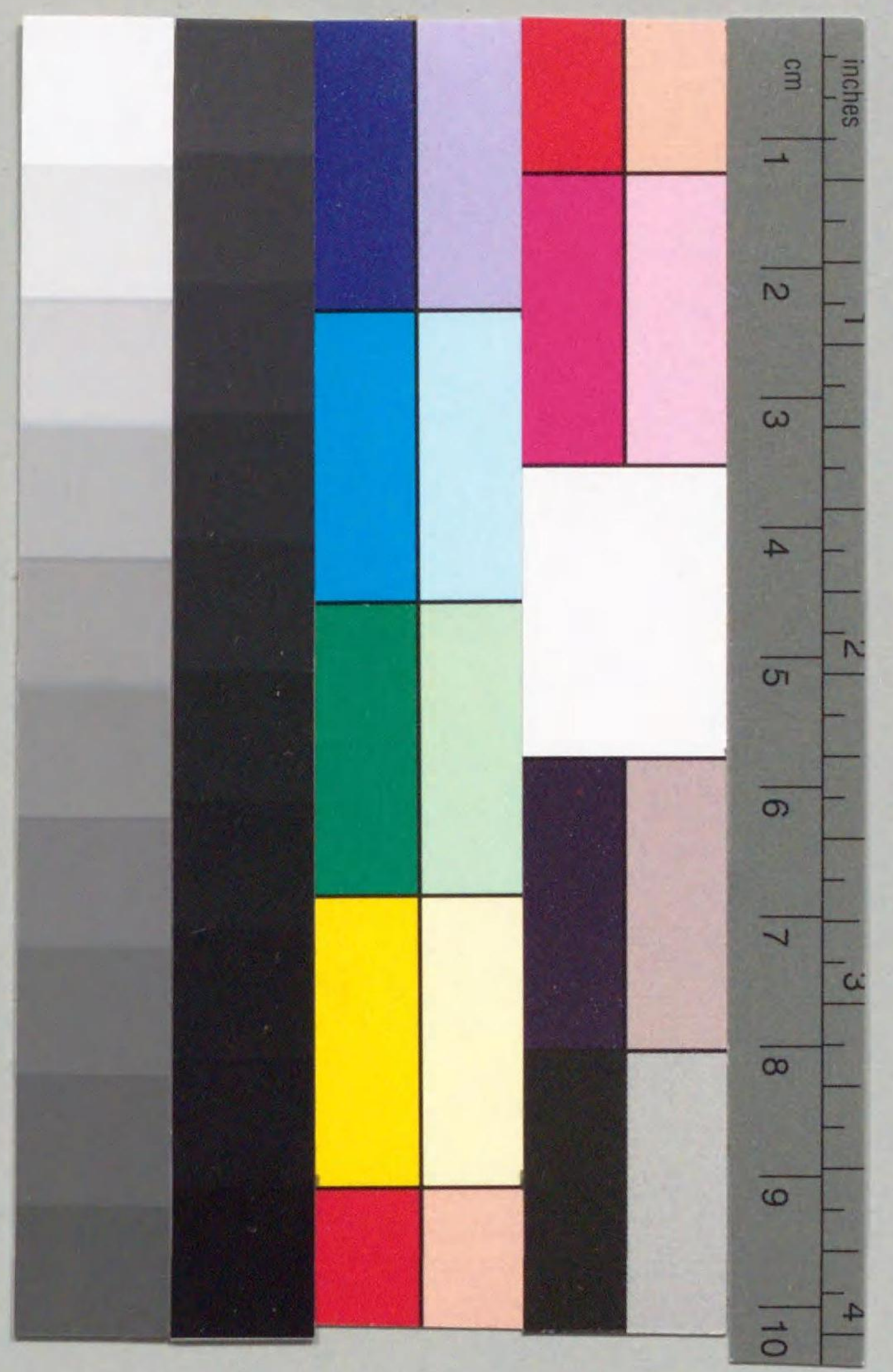


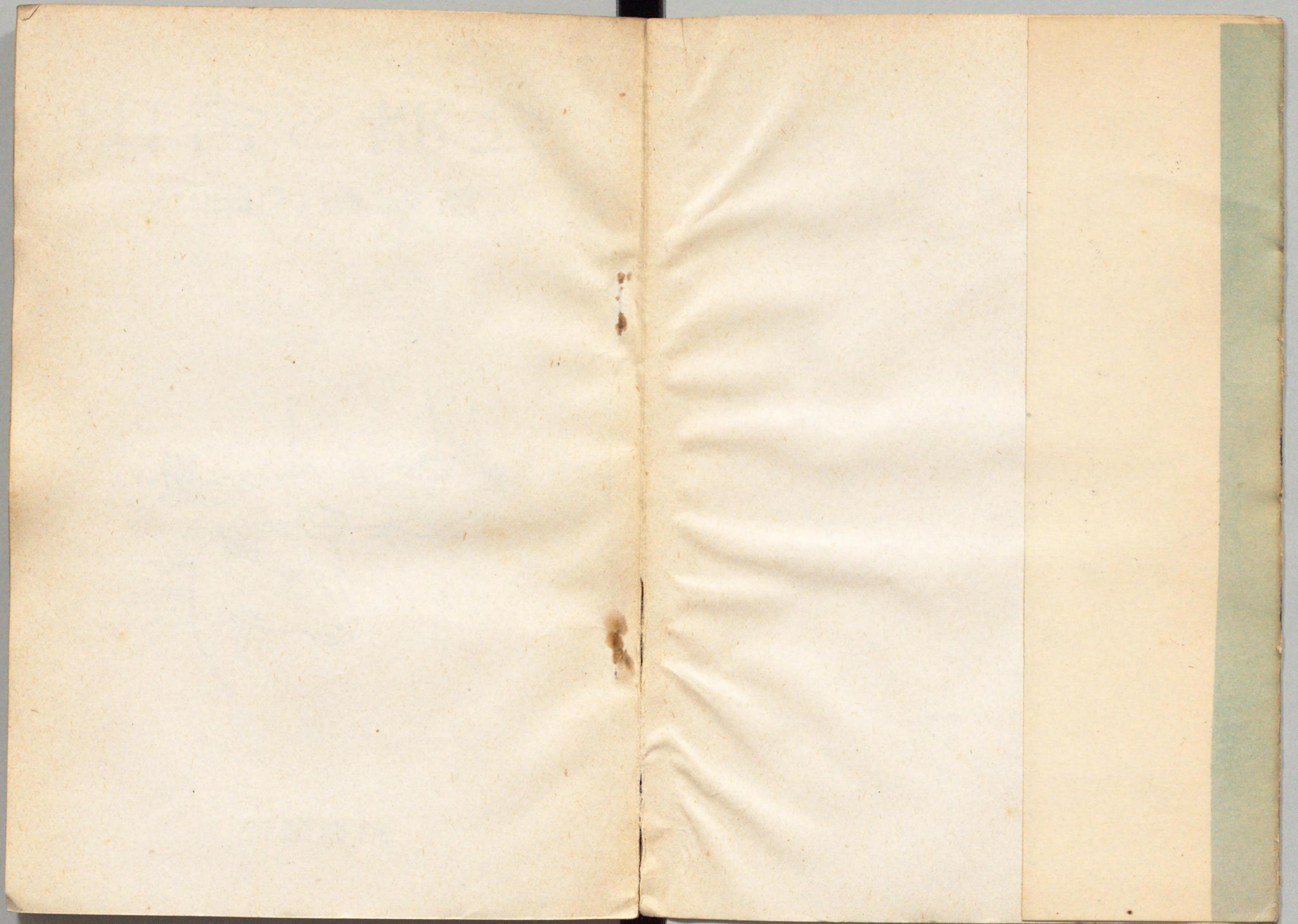
田舎と都会

小田内通敏著



帝國書院





田舎と都会

小田内通敏 著



帝國書院

49
0-1



813682

まえがき

思い出すと、今のみなさんと同じ位の年頃のわたくしが、東北のふるい城下町秋田の庭の一隅に立つている姿が眼に浮んで來ます。それは今から六十五年も前の暗く淋しい冬の風景です。幼いわたくしは、小作人である農民の人たちが吹きつける寒風にも負けず櫛くしを引いて肥料をはこぶ姿に心うたれました。それは宮澤賢治さんの詩にうたわれたような忍苦に満ちた農民の生活でした。また中學校に入つてからは、同窓生でありながら生れた故郷が田舎と都會とで物の考え方に著しい差異があることに気がつきました。わたくしの田舎と都會に對する觀察眼はこんなところから出發して、それが次第に田舎と都會をまじめに學問の對象として考えるように成長したのです。思えば長い歲月でありました。その間に日本の田舎と都會は世界の動きにつれていろいろな變化をして來ました。そういう田舎と都會がどのような生き方をして來たかということを年少の人たちに理解して頂きたいと思つて書いたのがこの本の前身である

『都會と田舎』(昭和五年刊)でした。

このたびそれを『田舎と都會』に名を改め、内容も新しく筆を加えてみなさんの前にお贈りしようと考えたのは、二十年後の今日、なおわたくしの書きあらわした前著の内容が、「社會科」が新しい教科として生れたにもかゝらず充分に生かされて居らずに、少しむずかしい言葉で言いますと、分析と綜合そうごうということが忘れられて徒に複雑な社會の分析だけに終つてゐることを残念に感じたからであります。最近文部省で社會科の創設に骨折られた圖書監修官松尾俊郎氏にお會ひした折、舊著である『都會と田舎』をわたくしに示されて、「漸くこの本が年少の人たちの教育に役立つようになりました」と言われたことが更にわたくしを勇気づけてくれました。

みなさんの御存知のように、日本の田舎と都會も今や世界とつながりのあるものとして新しい歴史を創り上げようとして居ります。そのような時期に、わたくしの貧しい本が不完全ではありますが、やがて解放された社會に建設されてゆく新しい「田舎と都會」を知るためのかぎになることを祈りつゝ筆をすゝめました。

この新著を機に「田舎と都會」に書名を改めたのは、今日全國に發達してゐる數々の都會も、もとは何れも附近の田舎が長い年月を経る間に、この本に書いてあるよう

な順序で、田舎の中核として都會が自然に生れたものであるということをお明かにするためであります。

しかし今日、田舎に住んでゐる人たちもまた都會に住んでゐる人たちも、朝夕見慣れている風物に馴なれて新しい觀察眼を開くことが出來ず、それに都會が田舎から發達したものであるという本來の姿を忘れ勝ちになつてゐますから、この本の順序にとらわれず、田舎に住んでゐる讀者は反つて都會の部分を中心に読み、また都會に住んでゐる讀者は逆に田舎の方を読み、見慣れた風物と比較することが大切な読み方であることを知つて頂きたいと思ひます。わたくしは將來、讀者であるみなさんの中から、更に新しい「田舎と都會」を書き加えて頂けることを愉たのしみにして居ります。

父兄や先生の方々に

成人してからの物の考え方の基盤が常に年少な時代の體驗に基いてゐることは、「田舎と都會」についての經驗からも實證されることは前に述べた通りでありますから、新しい「社會科」の誘導についても伸びてゆく若い人たちの觀察する眼を、日常生活

の中から引き出して「田舎と都會」を総合的に理解させることに力を添えて頂きたい
 と思います。

終にのぞみ、新しい東京都の構造を國際的な大都市に仕上げることに苦心されたプ
 ランを本書に挿入することを快諾された畏友東京都建設局長石川榮耀氏に、また同志
 である東京大學教授飯塚浩二氏が本書を帝國書院から出版する様に援助された厚意に
 對して特に謝意を表します。なお私事になりますが、二十年前の舊著を著わす折に幼
 い話相手であつた三男通弘が成長して、本書の改編に當つて年少の讀者のために協力
 してくれたことは著者として思出深いものがあります。

一九四九・一・一〇

小田内通敏

目次

田舎と都會の起り	一	田舎の春	三五
寂しい一軒家	一	田舎の夏	三五
田舎の自然と生活とを書いた『百姓傳記』	四	田舎の秋	三七
郷土のお話	一〇	田舎の冬	三九
城下町秋田の思い出	一〇	田舎道	四一
港町土崎の思い出	二〇	村のいろいろ	三三
郷土の村々	三三	山村——野村——漁村——郊村	
村の舊家の話	三六	田舎の風景	六
祖先の郷土水戸の話	三〇	田——用水路——畑——裾野——橋	
		渡し場——水車場——並木——道標	
田舎の生活と風景	三五	都會の成立	六

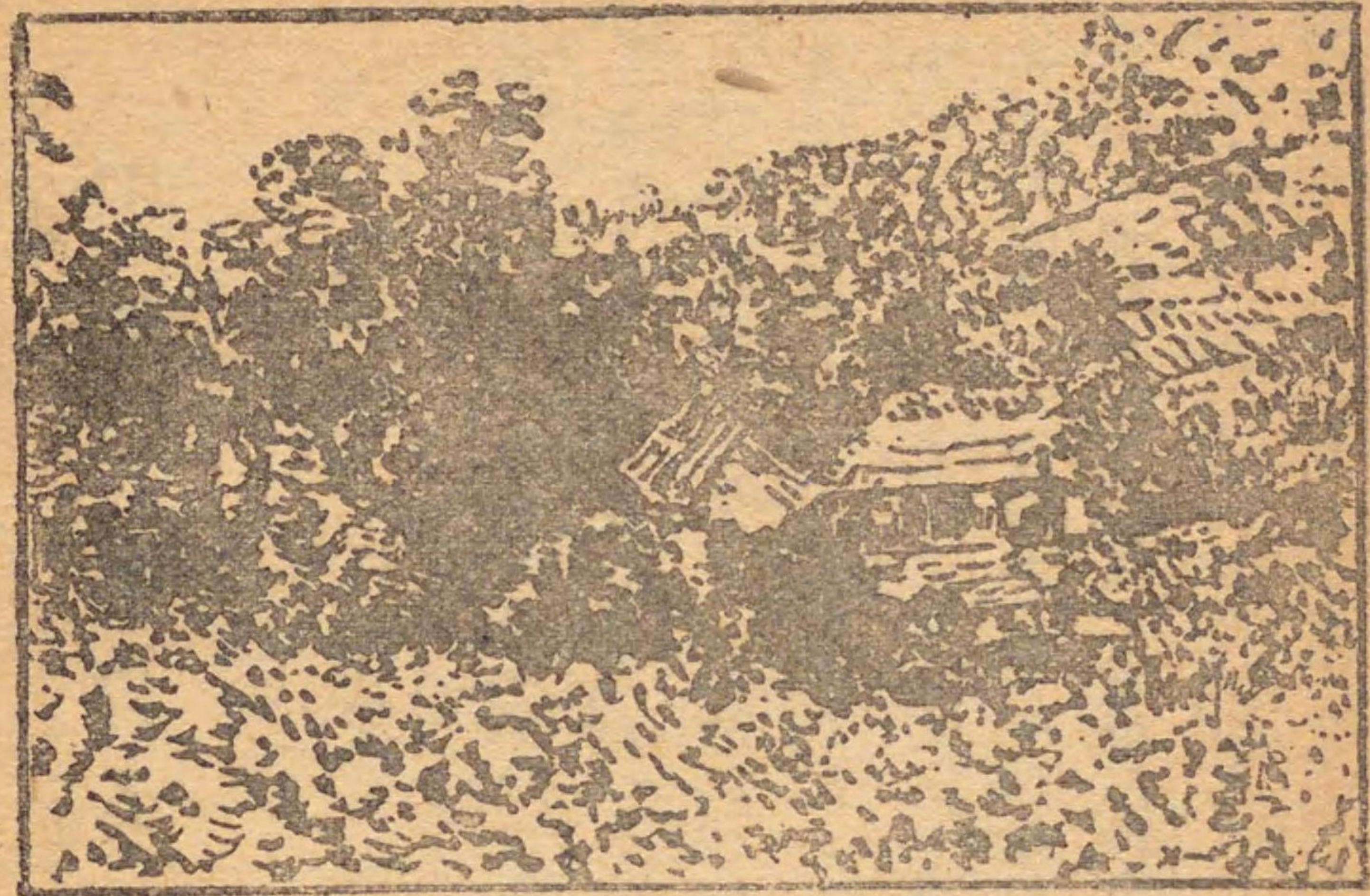
都會の芽	……	六	都市計畫	……	一四
都會の生い立ち	……	一〇三	地方計畫	……	一四
都會とまわりの田舎	……	一〇五	新しい東京	……	一五
都會の型	……	一一三	建設の目標	……	一五
都會の位置	……	一二五	地域と地區	……	一五
都會の生活と風景	……	一二三	主要都會と戰災	……	一六
都會の古さ	……	一二五			二
大都會における人の動き	……	一二五			

田舎と都會の起り

寂しい一軒家

わたしたちは、旅行の先々で、山のふもとや谷の底、野の中や岬みさきの先などで、思いがけないところに、寂しげにたつている一軒家を見出すことがあります。都會に住んでいる人たちはもちろん、田舎に住つている人たちでも、こんな一軒家を見ると、よくもこんな寂しいところに暮しているものだと思うでしょう。

けれども、こんな寂しいところにある一軒家も、けつして獨ぼつちで暮しているのではなく、この一軒家から何町か離れたところには、必ず二三軒か、または五六軒集つている部落か、または十數軒か數十軒かの部落があつて、その一軒家からこの部落に、しじゅう用達しに往來するようになっていゝのです。その間にきまつて細い小路が通じているのが見えます。



武蔵野の狭山丘陵の一軒家



湧き水を求めて構えた住居 (秋田の上新城村)

このような一軒家は、その家のたて方は極めて粗末そまつですけれども、まわりには、せまくても農作物を干す場所も、日々の副食物にする野菜を作る畑もあります。また年中強い風の吹いてくる方角には、これを防ぐため、宅地のまわりに生け垣とか竹やぶとか、作られています。清い谷川の近いところでは、これを飲み水としているので井戸もなく、主人たちは、毎日田畑に、また海に近いところでは時々漁にも出かけ、着物のほかはすべて自分たちの手で作り、年中安らかな生活が営まれゆくのです。子供も小さいうちから、母親におんぶして野良仕事のらしごとに連れてゆかれ、いつかしらに、大きな自然の、生きた姿がわかるようになります。

人の波や渦うずまきともいうような大都會に生れた人たちから見ると、なんともいわれない寂しい一軒家でも、そこに住んでいる家族の人たちにとつてはなつかしい郷土であり、そのまわりの静かな自然には、限りない愛着を感じているのです。

わたしたちは、郷土といえはすぐ村とか町とか市とか、今日行政上でまとめられている場所を思い出しますが、まだ村も出来ず、町も市もなかつた大昔は、わたしたちの祖先も、また世界の他の國々の人たちも、みなこのような寂しい幾軒かの集りが、

その國のもとになり、そこを郷土とする人たちが村をつくり、町や市を築いて來たのです。數人の親子兄弟が、新に家を建て、その周圍の土地をひらき、それが子々孫々に傳わり、そこに幾つかの家族が、村を作り、町や市になりました。ですからわたしたちが今日まとまつた村、にぎやかな町、大きな市を郷土としてはいても、その起りである祖先が、大昔、寂しいところに家族とともに農業や林業、或は漁業を營んでいたことがもととなつていゝることも考えてみる必要があります。

わたしたちの祖先が、農をもつて國をたてはじめ、しかもそれが天地人のつながりによつて今日の國の基を築いたことは『百姓傳記』という本によく描かれていゝます。

皆さんは二宮尊徳翁のことを知つておいでしようが、二宮尊徳翁は、この『百姓傳記』に書いてあることを身をもつて行われた方といつてよいのです。わたしは、田舎のことや田舎のおおもとになつていゝ一軒家のことをよく知つて頂くために、この『百姓傳記』に書いてあることを、少しばかりこゝに書き綴つてみることにします。

田舎の自然と生活とを書いた『百姓傳記』

年のうちに春は來にけり一歳を

去年とやいはんことしとやいはん

この古歌のように、季節は一月から十二月、十二月からまたすぐ翌年の一月と、春から夏、夏から秋、秋から冬、冬から春と、一年十二カ月、今年から來年へとじゆんかんするのです。

春になると、東風がふき、うぐいすがなき、虫も魚も元氣に動きはじめて、二月から三月にかけては、降る春雨も暖かく、梅や櫻や桃も咲きだし、桑の葉も大きくなります。

四月になると、もう夏で山にも里にも若葉がしげつて見渡すかぎり青く、麥も大きくなり、ひばりの聲ものどかに、ことに日が長くなつたような氣がすると田植えも始まり、やがて五月にはさみだれが降りだして、しめつぽい日が續きますが此の雨は草木の生い立ち、ことに早苗の生い立ちには特に必要なのです。この時季にひでりが續くと、田にひく水争が起ることもあり、蚊が出るので蚊帳も入用になつて來ます。六月は大暑で、庭や裏の太木で鳴く蟬の聲がかくべつ耳に立つと思つと六月の末にはも

うどことなく秋めいて来て七月立秋になると、もうすつかり天が高くなり、山や野にいつて見ても、露が秋草に宿り、七月の末には稻刈りが始まり、八月になると野山の小鳥を追う鷺の姿が目につくようになります。

農家のまわりの畑には、菜や大根が實り、山のふもとのそば畑には、白い花が雪のように咲きこぼれて、月の冴えた夜にはかりがねが列をなして澄みわたつた空に鳴きわたるのも秋らしい感じですが。九月には、霜が降り、草木の葉は黄ばみ、菊花の香りも高く、栗の實が出はじめの頃には來夏のじゅんびにと麥まきも急がれます。

心なき身にもあはれは知られけり

鳴立澤の秋の夕暮れ

十月には、紅葉した草木も冬枯れとなつて、厚い霜が野にも山にも降りて、十二月になると、霜柱が立ち、田にもいつしか氷が光るようになります。

日本は長い國柄なので、到るところ氣候も違い、田畑の中でも、日向のところと日陰の多いところと、土質のよいところとわるいところと、ねばりの強いところと砂地のところと、小石の多いところとではたがやすのに難易があり、また作物の出來不出

來にもたいへんなかんけいがあります。大川にそうしているところでも、また海邊でも、山田でもまた山畑でも、地味が違つたとしゅうかくもまた異なります。

百姓が屋敷をかまえ、家を建てるには、第一その田畑の近くに屋敷取りをしなければなりません。屋敷がまえは、北西の方角が高く、東南の方が低い日當りのよいところを選びます。百姓の家は年中干し物が多いから、東南の方が広く開いていなければいけません。家作りは、武家や町人などのように材木を細くきれいにするよりも、大風や地震にもたえるように丈夫につくることが必要なのです。

屋敷まわりの植え込みは、西北の方に冬木を植えて置くと、風を防ぐたよりにもなれば暖かくもあり、東南には冬木を植えると、日かげが多くなるからよくないのです。また屋敷がまえに西北は高く、東南を低くするのは、屋敷に日があたらぬと、日射しがおそく住居が寒くすべてかかりが多いからです。百姓は耕作につかう農具が多く、手入れが悪いと自然に腐つたりするようになるから、内庭にかけどころや、上げどころをこしらえておくがよいと言われます。

大きな川に近いところや谷の口に近いところでは、どうかすると思いのほかの押し水があるから、屋敷がまえに氣をつけなければなりません。

水木の乏しい村里は、たとえ先祖代々の居屋敷でも住みかえるほうがよいのです。百姓の屋敷には、身分相應に堀をほつて、そこに春夏の草やごみなどを入れてくさらせ、田畑の肥にする方がよく、また井戸は日當りのよいところに掘つて、水を使うのに手まわしのよいようにするのが常です。馬屋は一匹立てでも、九尺四方か二間四方にし、地形よりも馬の立つところを三尺も四尺も掘つて、常にわらや草を多く入れてふますようにするのがよいのです。

これによつて田舎にいるひとびとの骨折りがどれだけ大きなものであるかをわたしたちもしみじみと考えさせられます。

この田舎に住っているひとびとの生活の苦心と、それがもとなつて育まれる郷土という考えの芽ばえを感じるのと同時に、田舎で、今日家はなくなつていても、屋敷とか屋敷あととかいういい傳えのある場所に立てば、今日目の前に住っているひとびと

があらなくとも、そこに住つてそのまわりをひらいた苦心をしのとると思ひます。

古歌にも、

引きよせて結べば柴の庵にて

とくればもとの野原なりけり

そこで日々朝はやくから夜おそくまで働いているひとびとの力や、また山のふもとや野の中に散ばつている田舎の村々に、祖先以來、何代も住つているひとびとの努力がこの日本を新しく復興させてゆくのですが、また寂しい一軒家に住つているひとびと、また今は住み家がなくなつていても、もと寂しい一軒家や部落の中に住つていて、そのまわりを拓いたひとたちの勞苦が見えない力になつていることも忘れてはなりません。

註 この文章は太陰曆によつて書かれています。

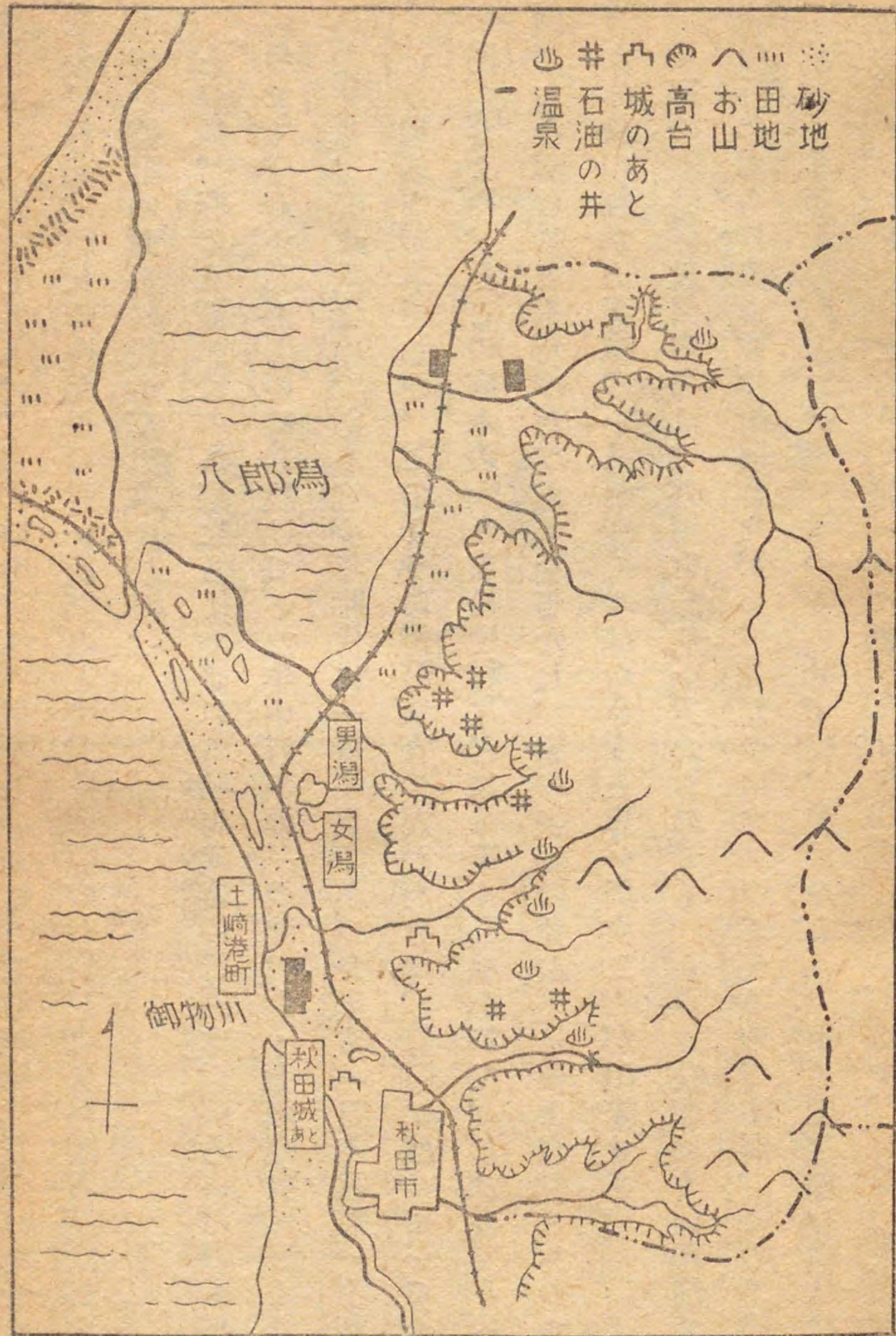
太陰曆は舊曆、陰曆とも言い、月が新月から満月になり、又新月になるまでの間二十九日、又は三十日を一月として一年十二月を作つた昔のこよみのことです。

郷土の思い出

城下町秋田の思い出

わたしは、秋田の城下町に生れたのですけれども、おい立つ頃には、もうちよんまげも見られず、帯刀もしない時代でした。わたしの少年時代まで生きておられた祖父は、藩の勘定奉行をされていただけに、冬の夜長には、よく遠い江戸や大阪に旅した事などを話して聞かしてくれました。今日のように自動車もなく、電車もなく、汽車もなかつた昔の旅はすべて徒歩だつたのです。當時秋田から山形に出るのには、必ず羽後と羽前の國境である院内峠を越さねばならなかつたので、そこを越した知らせが家に着くと留守居の家族は赤飯を炊いたり酒盛りをしてはお祝いするのが例であつたそうです。

家の表門から西南の方角に、二の丸の大きな松の古木の數々が目標に眺められる舊



南秋田郡略圖

城には、わたくしたちの子供の時分はもう昔をしのぶような建築物は見られませんでしたけれど、祖父母や父母の思い出話などで、その頃のわたしにもおぼろげながら、お城や侍町の面影の想像が出来るました。

それ故、春の八幡神社のお祭にもよおされる騎馬武者きばむしやの行列は、いろいろのお祭りの中でも、わたしたちの待ち設けていた年中行事の一つで、六・七歳の頃に好んで描いた繪も、必ず武者繪であり、少年時代に一番好きであつた本も『日本武將一夕話』という繪入りの本でした。このように侍町に育つたわたしは、侍町に残っている大きな門がまえや、その庭木の大きな松や杉などにも深く心ひかれて、しばらくその周囲にたたずむこともたびたびありましたし、家の表庭のまわりに植えられてあつた大きな赤松の細かい葉末のいろを今でもはつきりと思ひ出すことが出来ます。

北國の雪深い秋田の冬は、外出をしない人たちにでも、かなり凌ぎにくい季節で、窓の外のあられのふるのを聞きながら、こたつにはいつているのですが、この季節によく吹く北西からの寒い吹雪をもともせず、農民たちは、田に肥を積む爲には宅地のまわりの積み肥をそりで遠い田に運ばなければならぬのです。わたしは吹雪の



中を厚い外套やくび巻きで身ごしらえをして外出する時に、向うの田の中に積み肥を運ぶために、往來する農民たちの姿を見ては、いつももつたいないような感じがして心をうたれました。

また歳の暮れに、五六里もある村里から、そりに小作米をつけて運んで來る農民たちが、裏口にまわつてそぼくな言葉であいさつする様子や、裏口の縁に腰掛けて、玄米の大きな握り飯をたべながら、自分たちの村の話をする口ぶりや、昨日のことのように耳に残

つています。

しかし何事も知らない子供たちには、この冬、大雪のはれた朝、雪だるまを作つて遊ぶのがまた一つの楽しみでもありました。

物心づいてからの記憶をたどつてみると、侍町のおもかげはさびれてゆき勝ちで、たゞでさえ広い屋敷割りの侍町は、一軒々と舊家のれいらくするにつれて、ところどころに空き屋敷が出来るようになり、また大きな家がまえや門がまえも昔のように手入れが出来なくなつたりして、なんとなく火の消えてゆくような感じだけがただよつていました。そして侍町から出ていつた人たちのなかには、城下におつて居食いするよりもといつて、小作人のいる村にひつこんだひともあり、また遠い北海道に移住したのも少くありません。

こんなふうな空き屋敷が出来たり、家がまえがおぼつかなくなつて来たので、侍町の姿は日に増しさびれていきました。またそれにもまして一際侍町の人々の心をさびしくしたものは、農民たちが侍町の人たちに對しての素振りそぶりで、男だけに祖父や父か

らは、そんな話は聞きませんでしたけれど、祖母や母や姉などは、農民の言葉づかいがぞんざいになつたといつて、口惜しがつて話したこともしばしばでした。

わたしたちの通學した小學校は、侍町にあつたので、そこに通學する人たちは、いづれも侍の家庭に育つていましたから、侍と農民とのちがひについて、はつきりした考えは起りませんでした。中學校にはいると、地元の侍町から通學する人たちは、侍の子弟が多いのに、田舎から入學してきた人たちは、ほとんど全部村々の子弟であつたので、いろいろの點で侍町のわれわれと村々の子弟である同級生との間に、違つてゐることが多かつたので、それがもとになつて口論こうろんの末は大事になることも時あり起つたりしました。

一度はこんなふうなさびれていつた侍町も新に兵營が置かれたことと、舊城に公園が設けられ、また奥羽線が通じたことなどでまた芽を吹き返したように活氣づいて來ました。

今まで寂しかつた侍町から舊城への一部は、兵營としての用地となり、わたしの生家

のあつたところなどは練兵場の敷き地として收用しゅうようされることになつて、今まではほとんど狐狸のすみ家のようになつていた舊城も、公園になつてからは、市民行樂の場所としてすつかり面目を新にしました。公園の中には、昔の城かくとしての偉大さをしのぶものは、二の丸から本丸に上つて行く石段と、二の丸や本丸の周圍に多く立ち並んでいるもみや松の大木の他は、何一つ残つていませんけれど、しかし本丸の北西の一角にある天主のあつたところからの廣い眺めは、北西に向つて遠く土崎港を眺め、そこに横わつている日本海のかなたには、男鹿おがの山々さえ見渡されるので封建時代の城としての形勝けいしょうの地であつたことがうなずかれます。

市の東端にある秋田驛から西へ、市の中心に出る道路の右側に、外ぼりを隔てている土手の上には、今でも數十株の老松が、古い城下町の風格をしのばせて残つています。

侍町に住んでいるわたしたちの宅地は、住居と庭園にあてられた一部を除いては、大部分は日日の副食物とする野菜をつくるための廣い畑で、雪が消えて草や木の芽ぐ

む頃からは、毎朝裏の畑に出て、種まきから萬事菜園の世話をするのが父の日課でした。畑の整地をする時には、三四人の日雇ひやどいが幾日となく使われていました。きうりやなすやえんどうが實る頃になると、母は姉たちとつゆの多い畑地にいつて、新鮮な實りを取るのが何よりの楽しみらしく見えました。

わたしたちの家ではこうして宅地から年中使う野菜を作ることができましたけれども、また五月頃になつて田舎の人たちの賣りに來るわらびをはじめ、山から出る數々の山菜さんさいは、わたしたちの楽しみに待つている副食物の一つでした。山菜の中で、わらびはわりあいに近い山からでも少しは採れるので、友達とわらび取りにいつたこともたびたびありました。深山みやまから出るものは、いつそ山やまの香りが高いので、朝市あさいちにいつて百姓の持つて出るものを買うのが習わしとなつていました。

この朝市は、城下町の中でも商人などばかりが住んでいる、俗に『町』といわれた商業地區の一部の路の傍に開かれるので、農民の女たちが、新鮮な數々の山菜をみちばたにならべている有様は、物を互に交換し合つた大昔の時代を目のあたりに見るような心地がしました。

春の山菜に次いで、わたしたちの食膳を賑すものは、秋のきのこで、きのこの中でも初だけは、秋晴れの日曜などには、小さな竹かごを腰にしなから、鎌を手にして十町足らずの羽黒山の松林にこれを探りにいつたものです。秋になつて雨の多かつた年には、わたしたちにも相當にとれるほど生えてはいませんが、天氣の續いた年には生え方が少いので、少しもとれずに戻ることも少くありませんでした。それにしても松風を耳にしなから、高い秋の青空に飛び交う白雲を眺めるのは、きのこ狩りにいつての大きなしゆうかくの一つでした。

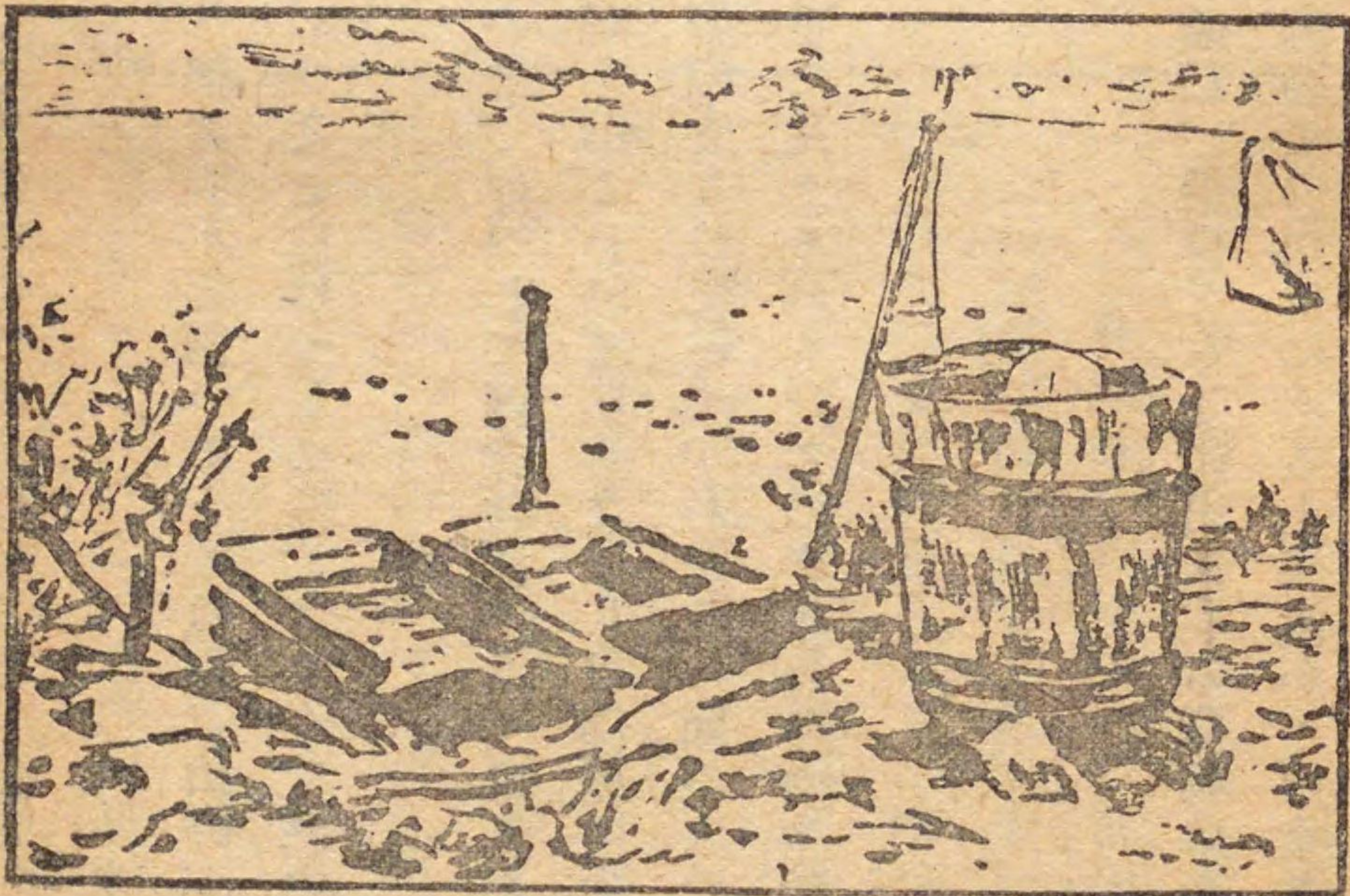
野菜に次いで副食物は魚で、魚は日本海に近いわたしたちの郷里では、朝市にいつて買うこともありますが、港（土崎）とか新屋濱あらやなどから、漁師の女たちが、大きな竹籠を背負いながら、賣りにくるのを待つのが習わしとなつていました。

この海の魚に次いで、八郎潟からとれる魚の風味も、わたしたちの食膳をにぎわしますが、秋寒になつてくるころに出る鮭と、冬近い秋荒れの空に雷の鳴る頃に、たくさんとれるはたはたは、季節が季節として、ことに郷土の風味の高いものです。

半年に近い雪國の生活には、これらの副食物については相當の貯ぞう法が工夫され



八 郎 潟 の 漁



水 邊 の 生 活

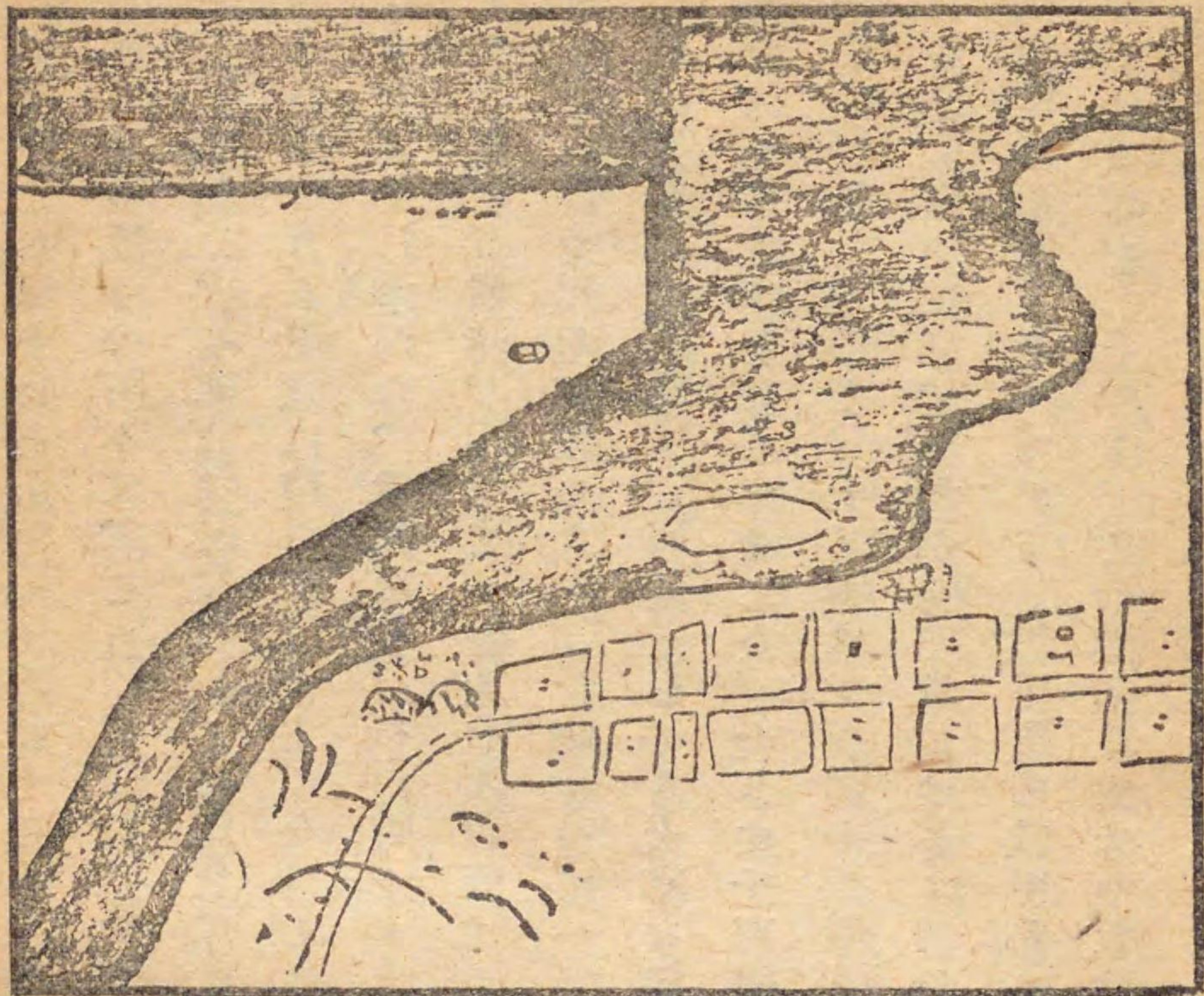
ていて、野菜としては大根やごぼうをわらやこもに包んで畑に埋めるし、魚としてははたはたを大きな桶にしち漬けにします。

また副食物の少ない雪國の冬の生活には、八郎潟の氷を割つてとる魚や、山野からの山兔や雉や山鳥などの獲物が、食膳をにぎわすことはけつして稀ではなく、寒中の雀などもとくに珍重されています。

半年にも近いこの冬の生活に不自由なものは、けつして副食物ばかりではなく、家のまわりは風雪を防ぐために、枝やよしで高くかこねばならないし、部屋の中では保温のために毎日こたつにはいりこむのが習慣となつていて、わたしの國の人たちに限らず東北地方の人たちの性質が一般に鈍重に見えるのも、この半年の冬の生活が一つの主な原因であるともいわれています。

港町土崎の思い出

わたしの生れた秋田は、今でこそ鐵道が通じ、従つてそこに出入する貨物はたいがいそれによるようになりましたが、以前は御物川の川口にある土崎港がその集散地と



土崎港と御物川の古圖

なつていました。この土崎港も、秋田市が城市にならなかつた前には、秋田氏が住つていた城下町でしたが、佐竹氏が、秋田市を城下町として經營するようになつてからは、城下町である秋田の港として發達したのです。

廣い仙北平野を流れて日本海にはいる御物川の川口にあるこの土崎港は、この大きな川に沿うている村々から出るたくさんのお米を積んで下つてくる河船の集るところであり、またこれらの河船が歸りには、川にそらうている村々で入用

な瀬戸物とか織り物とかを積み込むところとなつていました。土崎港の中でも、川に
そうしているほうの町々は、これらの役目をする大事なところで、今から五六十年の
昔、わたしたちの少年時代には、この河岸に大きな河船がたくさん着いていたことが、
今なおはつきり記憶に残っています。今日では鐵道が通じたので、大きな河船も通ら
なくなりましたから、當時にぎわつた町々も火の消えたように寂しくなつてしまいま
したけれど、當時、用いていた大きな倉庫は、今でこそがらんとしていますが、昔の
盛んであつた川運びのおもかげを物語っています。

このように土崎港は、河港としても大事な役目を勤めていきましたが、海港としても
また大きな仕事をしていました。大きな千石船は、越前、越中、加賀、越後あたりか
らよく出入したので、土崎港は、新潟や酒田と並び稱せられていて、従つて、海の方
にちかい町々には、藩主から、港にはいる貨物について特別の権利を與えられてある
廻船問屋が軒を並べており、城下町の秋田からは時々町奉行が出張してそれを取り締
つていました。その頃、この港からは米や木材などが運び出され、木綿、砂糖、茶、
紙、たたみ表などが多く運び入れられていました。

明治になつて汽船が着くようになつたことと、河床の淺くなつたこととで、この港
のわんの修築をしなければならなくなり、町の人達も、また縣の人達も、今から五十
年ばかり前からその必要を唱えるようになりました。

けれども土崎に限らず、酒田にしる新潟にしる、日本海岸の河港の修築はなかなか
容易な事業ではないので、従つて五十年の間、幾たびかそれが唱えられながらも、十
分な修築が出来なかつたのですが、いまはもう國庫の費用で修築が出来て郷土のため
にも日本海の海運のためにも喜ばしいことと思つています。

秋から冬にかけて風雪の荒い日本海に臨んでいるこの港も、今後は海港として十分
な役目をはたすことが出来るでしょう。

郷土の村々

わたしは、城下町に生まれましたが、そこから三四町ゆくと町端れの東の方に
田が一面に見渡され、十町あまりも續いた田の向うには小高い山が續いていて、山の
ふもとには、ところどころに農家が二三軒づつ一列にならんでいました。これらの農

家では、たいがい一頭か二頭の馬を飼つていて、寒い北國の常として馬小屋は、住み家の一部であり、ことにそれが入り口のすぐ右側にくつついてるので、子供の時分に農家の入り口をはいるのがわたしたちには恐かつたけれども、また夏の夕方この農家を訪れて、野良から歸つた馬が、うまそうに青草を食う姿を見るのは、一つの楽しみでもありました。

夏休みになると、二三人の友達とこの村近くのあぜ道を渡りながら、小魚をとるのが楽しみで、青だたみのような田の中にかよつている小路を、母親の馬について來る子馬が行き遇つたわたしたちの姿に驚いて途方もない方面に逃げて行く様子は、實にかわいらしいものです。

今でこそ農家で飼う馬の數も少くなりましたが、わたしたちの子供の頃には、馬は耕作にも荷をはこぶのにも農家に缺くことの出來ないもので、従つてこれを養うためには農家の骨折りは實に一通りではありませんでした。

夏の朝はやく、農家の子弟が露深い山野に馬の飼料にする草を刈りにゆくことは、朝飯前の一つの仕事となつていました。ことに秋から冬にかけて、長い間冬ごもりす

る馬の飼料を貯える骨折りは、自分達の食物をじゅんびするのと同じように農家での大きな仕事で、これらの農家では、馬小屋の上の物置き二階にその飼料をたくさん貯えるのが常であつて、そこにゆくと、枯れ草の香りの高いことがわたしたちには珍しく感じられるのでした。

日の長い夏の日の労働を馬とともにした農家の人達は、暗くなつてから馬と一しよにわが家に歸り、前の小川で馬とともに一日働いた汗を流し、小さなランプの下で家族揃うて晩飯をとることは、農家でなければ味うことの出來ない情味であります。

このように忙しい農家の生活の中でも、村の鎮守のお祭りや、夏のお盆は一年中で書き入れの休息日で、私達の住つている町から東の方の村にゆくなわて道には、大きな自然石で造られたこんびら神社というのがありました。一年に一度しかないので、神社のお祭りは、夏の西瓜や瓜などの出盛りの頃なので、附近の農家の子女は、社こそ小さいけれど、この夜祭りに參詣の道すがら、日本海に近い濱邊の砂丘の畑から出る西瓜や瓜を喰べるのをたいへん楽しみにしていました。毎日、野良で働いている

農家の子女も、この日ばかりは日にやけた逞しいからだを、珍しくも白地のゆかたに包んでくるのでした。

夏のお盆の頃は、わたしたちの國では、もう秋風がたつといわれていて、草むらになく虫の音さえもなんとなくあわれに聞えて、月の澄んだ夜、門に立っていると、近くの村々から盆踊りの太鼓の音の流れて来るのがなんともいわれない田舎らしい感じでした。踊る子女の姿は見えなくても、一年の勞苦をこの夜の踊りに忘れていくかと思ふと、子供心にも、わたしたちはしみじみと農家のあり難さを感じるのでした。

村の舊家の話

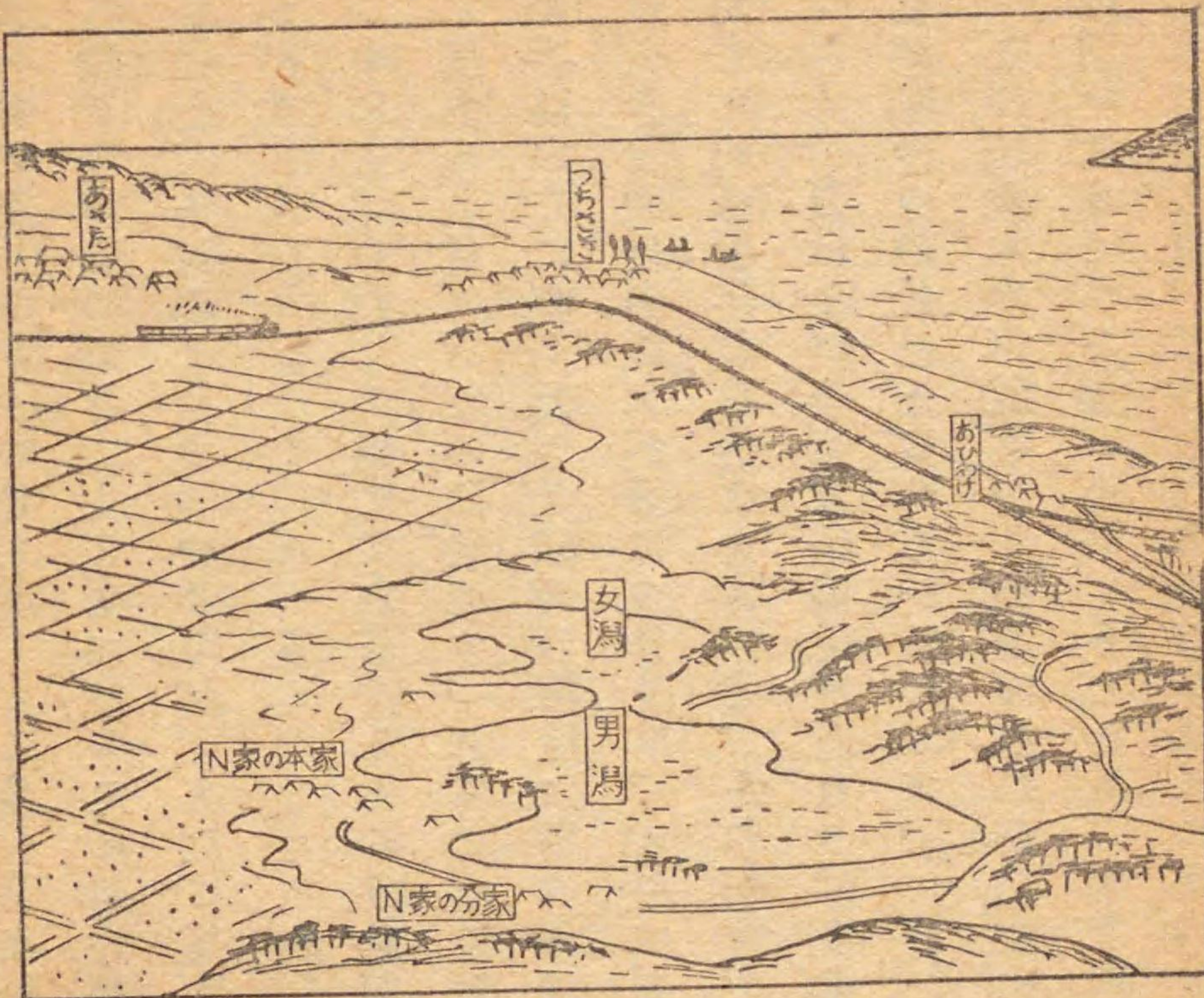
わたしは、子供の時から中學時代まで郷里にいましたから、侍町に生れたとはいつても、小作人のおつた村や、友人のおつた村、有名な神社や寺院のある村にたびたび行つたので、時おりその村の舊家を訪れたことがあります。大きなけやきの大木が門柱のかわりになつていた家、大きな高いかやぶきの母家、小作米をたくさん入れて置くための大きな白壁の土藏、裏山から清水をかけひいでひいて飲み水にしている装

置、庭の真中にあつて鯉の養しよく場にしてある大きな池、廣い庭や屋敷の掃除にたち働く小作人の女達、——これはどこの村の舊家であるとはつきりいうことは出来な

いほど、とにかくきまつたように、どこでもがそうした家構えであつたことが頭にうかびます。

中にも、わたしの記憶にあざやかなのは秋田市から四里、土崎港からは更に近くて二里あるK村のN家の印象です。N家にゆくには、奥羽線の追分驛おひわけえきをおりて、すぐ男鹿半島の方にゆく大きな砂地の街道に出ると、この街道の兩側からおおいかかるような大きな黒松の並木が目につきます。これはN家の祖先がこの邊の風砂や吹雪を防ぐために約百十年前に植えたもので、それが今では防風、防砂の役にたつているばかりでなく、夏はこの上もない陽よけとなり、冬は吹雪よけともなり、またこの附近での立派な一つの景色となつていゝのです。

この松並木の街道を少し通り、それから右に折れると五六町ばかり松原が續き、その間をぬうている細い小路、そこを通りすぎると一段低いところに出て、そこには、田が見渡され、田の中には相當な廣さの道がかよつています。



家 舊 の 近 附 の 湯 男

この道を出て東の方に行くと、右に土藏を前にした相當な田舎家はN家の分家で、住宅の他には土藏を始め牛舎や鶏舎があり、宅地のまわりには野菜畑が續いていて、この家の後はすぐ男湯といふまわり一里ばかりの沼があつて、春から秋にかけての二階からの眺めがよく、冬になつて氷がはると、それが村の子供達にはスケートや凧あげのよい場所となるのです。この湯の水は、附近の田のかんがい用水ともなれば、また鯉の養

よくも助け、夏のはじめからは水菜である特殊の風味のあるじゆんさいやまた菱などがとれます。この様に湯は面積こそ小さいけれど、村の重寶となつています。これによつて、その自然の地形が土臺となつて、その土地の利用なり産物なりがさまるばかりでなく、その景色もまたその土地の自然の成り立ちから生れているのを知ることが出来るでしょう。

この村は、今でこそこの湯のまわりに成り立つてはいますが、その大昔は低い濕つぽいところで、今日田になつているところは、男湯續きの湯であり、従つて石器時代の人たちは當時、一番住みよい今の松林のある小高い砂丘の根におつたらしく、現に砂丘の下の方からは、石器時代に使つた土器の破片を掘り出すことが出来ます。

舊家のN家は、この分家から三四町東の方にはなれた、やはり男湯のほとりにあるのですが、その大きな家構えは、まるで豪族の住居のようで、こゝに住んでから三百年にもなり、徳川時代からの大きな地主でありますから、藩主佐竹公のときどきの用命を果したことに對しての賞状や、また藩主が男湯に獵に來られた時の記録などが残つています。

このような舊家は、皆さんの郷土のふるい村々にも、ところ／＼に残っていること
と思いますが、村にはいつてその舊家を見ることは、その村人でなくとも光を見、誇
りを感じるような気がします。しかし舊家が舊家としての光と誇りとを永く保つてゆ
くには、その家族は常にすまっている村人の理解者であり、またその愛護者でなけれ
ばなりません。

祖先の郷土水戸の話

常陸の太田は、そこに城主としておられた佐竹公に仕えていたわたしの家の祖先の
故郷です。従つて、太田への旅は、私の久しいあいだのあこがれでありました。この
太田は、水戸の北方數里にある山のふもとの細ながい臺地の上の町であつて、佐竹公
の城あとは今は中學校になつています。

城あとの南方數町のところには、今も秋田にある中城町なかじょうまちといふなつかしい町名さえ
残つてあり、また城あとの北方數町のところには、佐竹氏の氏神として祀つておつた
といわれている八幡神社があつて、二抱えもあるかと思われる大きな黒松が、鳥居の

両側に天上高く聳そびえているので、なつかしい気がしてわたしがはいつてゆくと、正門
には秋田の儒臣大窪おほくぼ氏の巧な書で『八幡宮』と書いた額が掲げてありました。この社
にぬかづきながら、四五百年の昔には、わたしたちの祖先もこの社にぬかづいたであ
らうと思ふと、おごそかな祭典まつりの有り様や、その時にこの社頭に上下かみしもを着て恭々しく
敬禮したあまたの武士が參列する姿もありありと見るような気がしました。

佐竹公が秋田にうつり、徳川氏が代つて水戸に封ぜられてから、この太田附近の佐
竹公の遺蹟いせきはいつの間にかわからなくなつたといわれていますが、もしや私の舊姓田
所ところと同じ姓の人達が残つていないかと聞いてみましたら、今でも太田から東方一里餘
をはなれている高貫たかぬきという部落に、歸農きのうしておられると聞いて非常に嬉しい感じがし
ました。

太田への往復の汽車の中から見られる、太田のすぐ手前の佐竹村の後に續いている
一帯のだいたいは、天神林といつて佐竹公の居城のあつたところで、太田の町家のつく
りかたがなんとなく秋田の町家と似かよつたところのあるのも、偶然のことではない
のでしよう。

しかし今の太田での名所は、なんといつても徳川家の遺蹟です。ことに太田の町から北の方一里ばかりにある瑞龍山すいりゅうざんは徳川家の墓所で、初代から今日まで、代々の殿様がほうむられています。一代毎にみかげ石の十二間四方の大きな墓所のつくられてあるのを見ると、當時の威勢が思い出されます。お墓の形はことごとく儒道じゆどうの格式かふしきにしたがつたもので、他ではあまり見られぬものです。『大日本史』のへんさんを思い立つたことで名高い義公光圀は二代めで、そしてその師事された支那の學者で明朝みんちやうの遺臣である朱瞬水しゆしゆんすいの墓も、この瑞龍山にあるのは床ゆかしい感じがします。

瑞龍山の墓地とともに、知られている義公のいんきよされた西山莊は、太田の西郊十町ばかりはなれたところにあつて、この別莊のものしずかなまわりの風景は、いうまでもなくすがたい風情ふうぜいがありますが、それよりも十一年ばかりすまわれたというその住み家のいかにも質素で、どこの部屋もへりなしのたたみで、日々庭越しに書見をされたという小さな間、また野菜などをもつてきた農民に會われたという間など、これを目のあたりに見ると、百姓人形をつくつて農家の勞苦をしのばれたという義公の心がまえがいかにもうなずかれます。

義公が太田から十町足らずしかないこの庵いんから、夏の夜などは、太田の夜市よいちをみにおいでになつて、ならず者たちなどを見つけてはさとされた話など、今でも太田の一つばなしとなつて残つています。

義公が隠居いんきよされてから領内を巡られたことは、有名な水戸みと黄門記こうもんきで知られています。が、當時着用されたという服装は、瑞龍山の義公の墓地より一段低いところに自らたてられた梅里ばいり先生せんせい之墓のほかというところに埋められたといわれています。その梅里先生のじゆぞう、ひのひ文は、義公が自ら作られたもので、義公が西山莊にいんきよされてから、なくなれるまで前後十年間になります。佐竹氏初代からの居城のあつた太田の近くの、この西山をえらばれたのは、永く佐竹氏の恩を受けた、この土地の人民の心をやわらげるためであつたといわれています。義公がなくなられた時、江戸市中の落書きに

天が下、二つのたから、盡きはてぬ

佐渡の金山かみやま、水戸の黄門

とうたわれて、その遺蹟はこの太田を始め、水戸にも多く、ことに彰考館しょうこうかんという圖

書館には、『大日本史』へんさん當時を物語るあまたの圖書が秘藏ひかくされており、またその地續とぎわきの常盤公園こうえんには、義公が、日夕愛しようされた風物が、そのすま居とともに今なお昔のちもかけをとどめています。

田舎の生活と風景

田舎の春

春になると、日は長くなり、土も温まり、草木の芽は一雨毎に少しずつずつと伸びて、春は天地萬物のよみがえる季節です。ことに農業をその生業せいぎょうとしてゐる田舎の人達は、この春の季節に一年の仕事が始まるのですから、日曜や月曜の差別もなく、春の日長ひながを朝から晩まで野良仕事に餘念がありません。

わたしたちが、春の麗かな日光を浴びながら、いきいきした野邊の景色を眺めて楽しい日曜を田舎ですごすときにも、麥畑の草取りや田打ちに、田舎の人達の働いてゐる姿を見ないことはなく、家から遠い田畑では、晝の食事でも、用意してきた辨當を日のあがり方によつて、田畑の傍ですますのが常で、乳呑み兒などの世話もこの晝の食事のときに行っているのをよく見かけます。

田舎の夏

春の野良仕事の忙しい時には、お爺さんやお婆さんは、たいがい留守番をすることになつてはいますが、そうでない家では、家をしめきつて野良に出かけるのです。

夏になると、日は長くなるし、気温も高くなりますから、田の稲も畑の作物も際立つて成育します。それにつれて田や畑の雑草もこの時季に一番生え茂るので、田舎の人達はこのかんかん照りつける陽の光にさらされながら、朝から晩まで田や畑の草とりに、その日その日を暮すのです。田舎の人たちがこんなに骨を折るのも、秋のしゅうかくの少しでも多いことを祈るからです。

このように忙しい夏の野良仕事のうちにも、なすやきうりや西瓜などが、實つてくることは、どんなにか農民たちを喜ばすことでしょう。

私は、田舎にいる人たちに頼んで、一カ年間の気温と主な農作物をつくる作業の種類を書きあげてもらつたことがあります。その表を見ると、どこでも六七月は實に忙しく、ことにその土地が、畑の作物として普通である麦類やなすやきうりを植える

他に西瓜とかまくわうりとか、また梨とか桃とかを特別に多くにつくるところでは、その忙しさは、都會の人たちの及びもつかぬあり様です。農業の方ではこれを集約農法と言つています。

しかしこのような夏の田舎の生活にも、朝に夕にその勞苦を忘れるような都會の人たちには味われぬ気分もあり、われわれの祖先のよんだ「浴みして夕顔棚の下涼み」の句は、田舎の人たちの生活の中にも趣味のゆたかな一面のあることを示しています。

田舎の秋

秋になると、朝夕の空によく見た入道雲も、どこかに姿をかくして、そのかわり、綿を飛ばしたような雲が、ちぎれちぎれに澄んだ青空のところどころに浮んで、まつたく天が高いような氣がします。

家の窓から空を眺めただけでも、秋になつた感じがしますが、町はずれに出てみると野良のあり様がすっかり變つて驚かされます。見渡すかぎり緑のただよつ

ていた畑が、芋とか大根とかがとりいれされるにつれて、ところどころに墨を流したように黒土が掘り出されているのが目につき、一面に黄色であつた田も、苧り取られた跡に冷い秋の水が寂しい空の色を宿しています。

とりいれた物を運ぶ田舎道は、秋晴れの日日は日が短くなつても、車の滑りもよいけれども冷い秋雨の後、まだ道面の十分に乾いていない時などは、夫婦や親子が、重いとりのいれの荷を積んで荷車を運ぶ骨折りは、見る目にも氣の毒に思われるほどです。

もう日が暮れかかつて、人の顔もわからなくなつた頃、冷いせきにそうて作られてある洗い場で、數人の男や女達が、大根やごぼうなどを洗つているのを見た時、秋のしゆうかくも、春から夏にかけての田畑の世話に劣らぬ勞苦であるとしみじみ思われます。

こう地からとり入れた作物をわが家に運び、作物の種類によつて、そのちよう整から販賣や貯ぞうの方法について、家族の働さがむだにならぬように毎日の順序をたてて働いてゆく田舎の人達の日々の働きは、役所や會社や學校に勤めている人たちとは違つてこんなに一年の氣候と密接なかんけいを持つているのです。

一年の氣候のへん化にうまく應じながら、春から夏、夏から秋と、その働きの最善をつくしてゆく農民の人たちは、このようにして、今年のけいけんを今年に、今年のけいけんをまた來年に役立ててゆき、そして年中の生活につかうものでも、買うものは着物や雜貨ぐらいで他はたいがい自分たちの作つたものでまにあわせませす。ことに食りようは、近くの都會から遠い都會まで賣り出すので、このかんけいは、作物のとりいれの時にそれが一番よくあらわれています。

田舎の冬

秋になつて、田や畑からとり入れた作物は、たいがいは、田舎の人たちの手をはなれて近くの町に、また遠い都會に賣り出されますが、それをつくりあげた田舎の人たちは、作のよい年にはそのとりいれによつて、よい正月を迎えることも出來ますが、作の悪い年には、歳の暮になつてからすませすことになつていろいろの仕拂いや、來春の農事の支度に悩まされることもけつして少くはないのです。

わたしたちの食べる米や麥のちよう整とか、またその他のこく物の貯ぞうなども、

一年のうちでも比かく的に閑なこの時季に始末され、來春の野良仕事に使う農具の手入れとかわらぶとか、ぞうりとかの製造もこの時季になされるのです。

副業のある田舎では、この農かん期にいろいろ營まれるのですが、副業のないところでは、ことに積雪の多い日本海岸の國々では、この冬季はまつたく休かん期となつてしまうので、日本海岸でありながら、人口も多く、また關東地方に近い越後の人たちは、この雪の多い冬季をば、土地の産物を持つて東京に行商きやうしやうに來たり、またいろいろの仕事に雇われたりするために出かせぎするものが多いのです。越前の牛首うしくびという山村では、冬になると、男は他國に出稼でかせぎに、また女は女中に出るといふ話です。

このように田舎の人たちは、大きな地主をのぞいては、男でも女でも自ら野良仕事をしなければならず、しかもそれが春夏秋冬の氣候という天然の力にかなうようになければならないので、その苦心はなみ大ていのことではありません。

そしてそのつくつたものは、自分たちの家族はもちろん、都會の人たちをも養う食物ともなるし、また工業の原料となるのです。

このようにして田舎からつくり出されたものは、都會の人たちから見れば、食物とする米も麥も豆も粟あわも、衣服にする木綿や絹や麻の原料も、それは金で買える商品ですけれども、田舎の人たちから見れば、そのどれもが一年かゝつてつくりあげたものですから、このつくりあげたものに對しての田舎の人たちのいつくしみの心は、都會の人の味われないもので、この「つくりあげたもの」によつて、日々の主食物はもちろん副食物の原料が出來、またそれが料理されているのです。

田舎の人達によつてつくり出されるものは、食物になる農作物ばかりではなく、その住宅でも、また納屋なやでも牛舎でも鶏舎けいしやでも、ある程度まで必要にかなうようにつくりかえられます。庭の植え木も宅地まわりの生け垣いけがきも、その生活にかなうように植えかえられ、田でも畑でも、土地の氣候にかなうように、また農業の技術ぎじゆつの進むにしたがつて、そのつくり方が變えられてゆくのです。

このように天然の力と結びつきながらつくり上げ、つくり出す努力は、田舎の人たちでなければ味い得ないことであり、それが田舎の人たちのがつしりした性質をも形づくつてゆきます。

「健全なる精神は健全なる身體に宿る」ということわざがありますが、年々土の香の
高いものをつくつてゐる田舎の人たちは、その中に強い身體と精神をも作りあげ、そ
れで田舎をつくと共にまた都會をも築き上げる大きな力となつて、年々都會へも來
て住むのです。田舎の人たちは、田舎にあつて田舎を築き上げてゆくと共に、また都
會をも築き上げる大きな力であるといふこのかんけいは、わたしたちも忘れてはなら
ない大切な事です。

田 舎 道

田舎道は、田舎に住んでゐる人たちが、朝夕わが家から田畑にも鎮守にもぼだい寺、
にも學校にも、また隣村にも往復する道筋です。

田場所にある村々では、それが廣い田の間をうねりうねつてゐるので、梅雨期の長
雨などには、田からあふれてくる水で、學校へ往復する村の子供達がなんぎをするよう
なところがあつたり、廣い畑場所にある村々では、畑や雜木林のなかをぬい、そこを
出たかと思つと、まだ耕地になつてゐない雜草の葉の繁つてゐる廣場を通らないと、

隣村にゆかれないやうなところがあつたりします。

しかし、田舎道のうちでも一番田舎道らしいのは、山村にある道です。山村の田舎
道は山のふもとから谷の水に沿うてゆく山道で、急ながけの根をはうようにして通つ
てゆかねばならぬところがあるかと思つと、谷川が深く切りこんでゐるので、危げな
一本橋を渡らねばならぬところもあります。しかし、深い谷の上にかかつてゐる山路
の橋の上に立ちながら下の方から吹いてくる冷い風を腋の下に受けるのは、なんとも
いわれぬ涼しさで、ことに下の谷川の流れの音がうぐいすの聲とともに聞えたりする
といつそう涼しさが増すやうに感じられるものです。

谷に沿うてゐる田舎道が、新に開こんされた山の中の新家にゆくために、だんだん
高い山の方に上りかけてゆく道では、大きな赤松やもみ杉やなどの根をふみながら、
しかもそれが自然の階段のやうになつてゐる小路を通つてゆくのが習わしで、ちよつ
と眼界が開けたかと思つと、そこから思いがけなくも、さきに通つたふもとの村や、
いま通つてきた山路に沿うてゐるうね／＼した河筋が見下されて、われに歸つたよう
な嬉しさを感じることがあります。

山のこちらのふもとの村から、山を越してあちらのふもとの村に通うために開かれた一本道が、木もない禿げ山のふもとから頂きへとうね／＼通つていて、それが山を上りきつて下ろうとするところに、小さな祠が立つているのを見ると、山路をあるく人達の心からの手向け心から自然にわいた床しさがしみ／＼と感じられます。

山路にも劣らないほど寂しい田舎道は、砂丘の長く續いている濱邊のあちらこちらに散ばつてゐる漁村から漁村へと辿る道で、このような道になれた漁村の人たちは、ゆくてに家が見えなくても、大した心細さは感じませんけれども、初めて旅するものには、それが道ときまつていないような濱邊の道を通るのは、いかにも心もとなく思われるものです。

しかし、山路に比べると、廣い海原が一方にひらけているので、自からゆく手の方が明かであり、従つて目安もきまつてくるので、山路ほどではなく、ことに岬の一角にくつきりと白く見える燈臺が、一歩ごとにいつそう大きくなつて來るのは、濱路を辿るものにとつて、何より心強く感じられます。

田舎道についての私の思い出を辿つてみると、一番寂しかつたのは、ちかい外國では樺太での田舎道です。

わたしは今からかなり前のある夏、一カ月ばかり樺太の田舎や都會を旅したことがありましたが、その時には、東岸の富内村の富内から富内湖口を横ぎり、富内湖岸の蘆のしげつた低い濕つた土地から喜美内驛に出て、更にそれからさびしい針葉樹林のなかを、古牧まで獨りで徒歩の旅をつづけました。このような極めて寂しい田舎道を通つての感じは、人家のあるところに着くまでは、田舎道を通つてゐるといふよりも、山のあいだを通つてゐるといふ感じであつて、まわりの大きな自然から押しつけられるような強い感じに襲われて、富内でもらつた熊の肉の小さな罐をさげながら、とぼとぼひとりでこの人氣のない山路を通つた時のさびしさは、今なお忘れられないほどです。

また同じ年の冬の夜、奉天から西方八里ばかり地先の西公太堡という部落に泊つた時の夜の静けさは、まつたくわたしたちの話し聲の他にはなんの音もなく、夜そのものがわたしたちに迫つてくるような感じでした。

また田舎道をかこんでいる自然の大きな静けさと美しさ懐かしさも、わたしたちが田舎道を通つてはじめて感じえられるもので、常に田舎道を往來している田舎の人たちよりも、かえつて常に都會に住んでいるわれわれがそこを通る時に、いつそうそれがよくわかるものです。それですから、わたしは田舎を理解するためには、田舎道をぶら／＼しながら、そのまわりの田舎の風物——自然の景色でもまた田舎の人達の生活でも——をよく観察することが最も必要であると思ひます。

次に田場所での田舎道としての思ひ出は、東京の東の郊外にあたる東葛飾の水郷の道で、この水郷での田舎道のふるいものは、水郷にそううね／＼曲つたものが多く、一帯に低くしめつたこの地方のことであり、それに川筋が多いので、いつたんだ雨が降り初めると、洪水となつては、はんらんするのでこのような川筋に沿うた数多い田舎道を堤防の上に通してしまつたところが少くありません。このように堤防でかこまれた低くしめつた土地を水田にするためには、排水しなければならぬので、細いながら眞直な排水路が網のように多く作られ、それに沿うて村から村へと田舎道がつくられています。だからこゝでは、うねりうねつた田舎道から眞直な堤防の上に、また

排水路に沿うた小路に出るのが常です。このような田舎道は東葛飾ばかりではなく、大阪近くの淀川筋とか、名古屋近くの本曾川筋とかの川ぞいの低くしめつた土地にも、こうした田舎道が多く見られます。

また山路についての私の思ひ出は、日光から中禪寺湖にゆく途中のけわしい路です。今はそこに廣いよい縣道が通じ、自動車が自由に上下するようになっていゝから、そこを通つただけでは、昔の田舎道としての山路の困難な味がよくわかりませんが、今日旅人が樂をして通る曲折しているこの新道の中を、下から上へと通じているけわしい、そして今ではみぞのようになつてゐる舊道をすこしでもあるいてみると山路を上り下りした昔の人たちの苦心が察せられます。汽車や電車や自動車の便利がよくなつて、富士山や淺間山や、比叡山や温泉嶽などが、昔のような苦勞をせずに上れる今日でも、ほんとうに山國であるというこの日本の國柄を知るためには、やはり山路の田舎道を少しでも歩いてみる方がよいのです。そうすると山國である國柄がわかるとともに、われ／＼の祖先の骨折りもわかるようになり、眞に國を愛する心も、また同胞を愛する心もみなこゝから湧いて來ます。

山國にある古い神社やお寺などに參詣すると、そこへの山路をきりひらくのに骨折つた神主や、僧侶や、村の庄屋などの逸話をよく聞くことがあります。わたしたちは、今日山地への汽車や電車を通すのに骨折つてゐる人たちの苦勞を感謝すると同じように昔、山路をひらいた骨折りも思いうかべなければなりません。

峠のふもとの小さな茶屋に、今では名だけ残つてゐる力餅も、けわしい山路を辿る昔の人達には非常な力になつたことのしるしです。

このようなけわしい山路をのぼる骨折りもなか／＼ですが、いつたん上つてからそれを下る楽しさはまた格別です。

その一例は箱根から湯河原温泉への山路で、下る山路としては實に眺めの廣い心地のよい山路です。

箱根宿から南の方へと山路を辿りながら行くのですが、火山のこととて芝生ばかりの山々をながめながら、十國峠に出る途中の、相模なだを見下す廣い眺めは、まつたく十カ國を見下す名にそむかず、山路とはいいながら樹木のないために見通しがきくので、眺めがいつそう廣く感ぜられます。山々の廣い景色を目の下に見下しながら、

一步一步山路を下つてゆく心地はなんともいわれないほどです。峠からふもとの道を半分ほど下ると、樹木もしげり、下るにしたがつて谷川の音も聞えるようになり、それに澄みきつたうぐいすの聲さえ時には聞かれます。

廣い野中の田舎道も、山路とは違つてかわつたおもむきがあるので、わたしは三十年ばかり前に秋から夏まで一年のあいだ、武藏野の村々を調べてあるいたことがありましたが、日本のうちでも平野として廣いこの武藏野も、今日では東京都にちかい場所は東京と變らないほど開けてしまつて、住宅はこみあらし、昔の田舎道は、眞直な市街の通路とかわらぬようになつてしまつたところが多いようですけれども、しかも武藏野の眞中にある茶の産地として知られてゐる狭山の丘陵の近くには、まだ昔のまゝのうねりうねつたふるい野道が残つてゐます。昔、國分寺を置かれた國分寺町から北の方へ狭山の東の端に出る路は、武藏野を南から北によこぎるふるい野路として名高く、俗に鎌倉道という名でよばれてゐますが、それが廣い今様の眞直な道路と合つたり離れたりしてゐて、このふるい道を歩くことは、ふるい道と新しい道との違い

を知る上から興味深いことです。

廣いこの武藏野のあいだには、ところ／＼細い小川が流れていて、その小川に沿うて氷田が開かれています。多くの村々は、だいたいの地になつていて畑の方から低い田の方になだらかになつていて南向きの日當りのよいところに多く成り立つて、だいたいの地根にあるこれらの村々を、それからそれとぬうてゆく野道は、昔から、通るようになってきた武藏野の田舎道で、これらの村々の開けたと同じふるさをもつてゐるものです。武藏野で特に見られる林といつてよくぬぎ林が、秋になつて、すつかり葉が落ちて見通しのきく頃、だいたいの地の根にある村々をぬつて通つてゐるこれらのふるい野道を歩きながら、波のように起伏してゐる武藏野の景色を見渡すことは、武藏野でなければ味われない野道の眺めです。

昔から濱路といわれている濱邊の砂の上をなぎさづたいにゆく道も、また島國としてのわが國では、だいたいの田舎道です。

わたしの郷土である秋田の御物川口の左岸にうずたかくなつてゐる、勝平山から、

新屋濱あらやばにかけての砂丘を通つて濱邊を通る濱路は、わたしたちの一番思ひ出の深い濱路でした。濱に出てみると、あちらこちらに散ばつてたつてゐる漁師の納屋なやは、なぎさから一定のさよりに建てられているので、砂丘の後にある漁村からこの納屋への濱路は、砂の上に一足一足鳥の足跡のように描かれています。しかし、雨がふり、ことに風が強くと、砂地に描かれたこの田舎道は、まつたくあと方もなく荒されてしまふのです。こうして砂丘の上の濱路は、ふるいけれどもいつも新しい路です。しかし、しめつてゐるなぎさづたいの濱路を辿る旅は、砂がしまつてゐるだけ心地のよいものです。

われわれの祖先にしても、まだ海岸に原始的な生活を營んでおつた頃には、このなぎさづたいの道が、その唯一の交通路であつたでしょう。

わたしの異國の思ひ出の中にも、樺太にいつて小さな船着き場の内路から、ポロナイ河口へのなぎさづたいの濱路を旅したときのこと浮びます。鉛色なまりの海をながめながら、名も知らぬ大きな流木りゅうぼくがたくさん横たわつてゐる側を、アイヌの婦人が子供を

背負いながら一匹の犬を伴^つれてくるのに會つて、大昔のかれ等の祖先の原始時代の漁獵^{りよう}生活をそのまゝ見る心地がしました。

田舎の生活の特色は、山地であつたり野中であつたり濱邊であつたりするところがあり、その變り變る田舎のあり様は、そこを通つてゐる田舎道と、そのまわりの眺めに一番よくあらわれています。

村のいろいろ

山村

わが國は山國だけに、本州でも四國でも九州でも、平地にくらべると山地はその十倍にもあつてゐるので、山の麓から山腹に近いところにも、村をつくつてゐるところが少くなく、そんな山村では、よい水が比かく的に得易いので、それをかけひでひいて飲料にしたり、傾斜^{けいしゃ}の急なところを流れる水で、たやすく水車を設けてこく類をついたり、絲くりをやつたりしますが、今日ではこの水力を利用して電氣を起し、そ

れで製材をやつたり、電燈をつけたりすることが甚だ盛んになつて來ました。

しかし、平たい地面の少い山村では、水田を作り得るところも少いし、畑地でさえも、傾しやの急な僅の平地に、粟^{あわ}とかひえとかそばとかを栽培^{さいはい}するだけですから、あらこちらに三軒か四軒の農家が散ばつてゐるに過ぎません。

ことに山の奥へゆくと、山林を焼き拂つては、その灰を肥料として畑を作ります。畑という字が、火と田とを組み合せてつくられてゐるのは、もとは畑をつくるのに、みな森林を焼いて作つたことから來てゐます。

こんな山村では、僅ばかりの田や畑をつくる他に、炭も焼けば薪^{まき}もさきり、また鳥や獸の狩りもします。私の郷里の雪の多い山村では、冬になると、村中が獵師^{りようし}になつて生活するところさえあります。

信州の北部で、いわゆる北部日本アルプスのふもとの神城村^{こうじろむら}という山村では、冬には雪が二尺から四尺も降るところから、屋根の勾配^{こうはい}も急につくられています。この邊の田は一毛^{いちもウ}作^{さく}で、五月中旬田植をし、蠶^{かいこ}も春は出來ません。村の後に連つてゐる白馬岳^{しらくだけ}や杓子岳^{しやくしだけ}や、が岳のこの白い姿を見ただけでも、この邊の山村の風土と産業の

かんけい、がわかると思います。

私がかつて旅した三澤という山村は、隅田川の上流、秩父から流れ出る小さな谷川に沿うた心持ちのよいほど開けたところで、村は上、中、下の三つにわかれています。昔が、それが南の河上からだん／＼北に、上、中、下となつていてところをみると、昔の交通上、河上の方から開けたところらしく、早く開けたらしい上三澤の青砂などは、山の頂きに近いところでは、寸地を餘さないほど畑が開かれています。くつきりと白い壁の農家が、山の頂きまで段々になつて列んでいる様子は、まるで山陽道の村々を見るようなふうで、この村で白壁を多く用いているのは、雨風の強いためだといわれていますが、秩父の山から出る石灰石で、石灰をつくりやすいこともその主な原因であると思われれます。

三澤の峠をこえて四五町ばかり下つて來ると、そこに栗吉田という村があります。上三澤にくらべると餘程高いところですが、もう畑が開けて、南だけに上三澤に見なかつたしゆるの木が畑のところ／＼に繁つており、ずつと下の方にあるお寺の境内には、大きな櫻の木が二三本立っています。この栗吉田は北に山を負うている南向きの

場所だから柚や蜜柑などもよく出来るし、麥なども、三澤の方よりは一週間ぐらい遅くまいても、春になつて一週間ぐらいは早く芽を出します。同じ山地でも、僅はなれた北と南とでこんなに違うのですから、わが國の山村が地形や氣候によつて、また交通の便不便によつて、その發達にずいぶん遅い速いのあることがわかるでしょう。

常陸の北方の多賀郡といへば、常陸での山地ですが、なかにも高岡村の若栗という部落は、百數十年前に、炭やきがもとで開けたところで、西どなりの小里村の里川という部落のものが、山越しをして來て開いたといひ傳えています。親戚かんけい、が今でもその地方に多いところを見ても、いかにもと思われれます。四方山にかこまれた谷川に沿うているこの小さな部落では、僅に二十四戸よりなりたつていますが、そのうち九戸は『炭小屋』といわれているくらい、炭焼きを主業として僅ばかりの小作をやつています。

この部落の農民は、一戸の耕地は、田は七反歩、畑は三反歩だから、その収入も少く炭やきからの収入できわめて質素な生活をしてはいますが、炭やきをする材木もだ

ん／＼少くはなるし、二三男の分家する餘地もないし、他から新にきて炭やきする餘地もないくらいです。二三男の多くは、大工や自動車の運轉手などを望んでみな他處へ出てゆくので、この部落の人口は殖えません。

同じ山村であつても、越後の長岡市の東方三里ばかりの東谷村の朽堀という部落は、昔から養さんの行われたところで、近くの守門岳という山には、今でも大きな自然生の桑があつて、昔はこれで養さんしたといういい傳えがあります。

私はこの部落にいつてみましたが、朽尾町からこの村にはいつて、村役場のあるところから、刈谷田川の上流に沿うてゆくと、兩側の山が中腹まで開こんされている様子、いかにも中國邊の農村を見るような氣がしました。數年前に大洪水のあつたのも、傾斜の急な山腹まで開こんされていることがその主なる原因らしいと言われています。

このように、ふるくから養さんをしていたところだけに、機業も發達しその産物であるつむぎは、近くの朽尾町から朽尾つむぎという名で賣り出されて、それが品質が

よいので、相當に賣れていたから朽堀の部落の農家の主婦や娘達は、この静かな山村につむぎ織りを副業とし、そのために安らかに一家の生活をも助けることが出來たのでした。今から四十年ほど前朽尾町に機械で織る機業場が出來たために、この部落のつむぎ織りはそれに押されて、今まで一家の間で機織りをしていた娘達は、女工として他に出稼ぎしなければならなくなつてしまいました。

このようにこの朽堀は、その上不幸なことに大きな洪水にあつたので、村の若い人たちは、そのまゝでは、みな出かせぎでもしなければならぬことになりましたが、村長を始め、有志の人達は、なんとかして、この苦しい立場から免れようとして、小さいながらも製絲と機織りを共に營む工場をたてることに成功しました。

わたしは、この部落を見た時、ことに洪水で荒されたあとがだんだん回復されてゆくあり様と、新に設けられた工場に、事務員を始め工女たちが元氣で働いているあり様を村長の案内で見せてもらつて、ふるい山村が新しい産業に目ざめてゆくあり様を涙ぐましく感じたことをおぼえています。部落を出てみると川上の栗岳と守門岳とが、東の方に高く聳えていました。

またわたしは信州の上田の先の南條という山村の入横尾という三方山に圍まれて西の方は開いている部落にもいつてみましたが、山の根のところにある一つの農家は、たいていは、母屋から野菜畑、それから桃や柿などを植えてある半はやぶになつている畑、その後はくぬぎの雑木林で、そのちかくに大きな薪小屋が建つています。このような山村では、米も麥も作りますけれども、一番大きな収入は養さんからで、従つて桑畑は畑地の六割を占めていて、このような所だから、鎌にはとくに桑切りや、鋤にも根切りなどが備えつけられています。

私達は、この二つの山村をくらべてみただけでも、その間に著しい違いのあることを見出すのですが、読者の中でも自分はこのような山村に住つていなくとも、その郷里のちかくに、これによく似た山村の生活を見出すでしょう。

いつたい山村は、よそからの出入りに山が障害となるので、河の上流に位置し、四方山に圍まれていて人里から遠いところなどは、避難するのにつごうがよいので、昔から戦争に負けた武士などは、よくこんな山奥に逃げかくれて、遂には歸農したもの

も多いようです。九州の肥後の五家莊とか、四國の祖谷谷とかは、昔から平家の落ち武者が隠れたところだともいい傳えられています。その他、同じようないい傳えのある山村は、ずいぶんあります。このような山村は、まわりの交通が少かつたので、自然と昔からの言語や、風俗や、習慣などが保存されて、今日に及んだところがすくなくありません。

私はかつて、日本の模範村といわれている村々の位置を、圖上で調べてみたことがありましたが、不思議にも、その十中の七八は山間か山ろくの村で、當時これを山崎延吉氏に話して、その理由をたずねたところ、同氏は左の二つの理由をあげられたことを今でも記憶しています。

一、山村は田場所や畑場所にくらべると、山林があるから、平野にある純農村よりも、經濟上によゆうがあること。

二、山村の人達は、平野の交通の便利な農村の人達よりも、よそから離れているから、自然落ちつきがあること。

今日になつてみると、當時のもは、ん村であつた山村でも、けいざい事情の變つたところも多いでしょうし、また交通きかんの便利になつたところもありましようが、山村としてのこの特色の残つているところが、まだたくさんあることと思つています。

野村

野村という言葉は、山村という言葉にくらべると、きなれないでしょうが、山地の村になつているものを山村といい、海濱の村になつているものを漁村というのになし、平野に位している村を野村というのです。これはちか頃農學者たちも用いてい

ます。
わが國は山地が多いけれども、また大きな川沿いには相當に廣い平野もあります。すなわち利根川に沿うている關東平野、木曾川にそうているのうび平野、淀川にそうているささい平野、しなの川に沿うている越後平野などはその主なるものですが、なお他に、東北地方の北上川とか最上川とか御物川とか、また九州のちくご川とかに沿うているところには相當な平野があります。このように大きな河の兩岸に廣く開けて

いる平野は、河の運んだ泥や砂が積つて出來たものです。

なおこの他、わが國は山國であるだけに、四方が山で圍まれていながら、その間に相當に廣い平野のあるところがあります。例えば京都附近、奈良附近、甲府附近、會津の若松附近などはその例であつて、このような平野は、盆地とよばれています。これは昔山間の大きな湖水だつたところが、地變のためにその水がまわりの山間を切りぬけて流れ出し、そのためにだんだん湖水の水も、底であつた泥もかれ上つてそこに平野が開け、その上そのまわりの谷川から流れた土砂が積つて、その平野が更に廣くなつたものです。だから、今でも、昔の湖水のあとが残つているところ、例えば京都の南方巨椋の池のようなところがあり、盆地の平野にまわりの谷川から流れた土砂が多く積つたところとしては、例えばぶどうの産地として名高い甲州の勝沼附近のようなところがあります。

しかしわたしたちは、大きな川の兩岸にある平野や、昔の大きな湖沼がかれ上つたあとに出來た他に、なお一段と高くなつている平野、例えば關東平野の大部分を占めているだ、地のあることも忘れてはなりません。このだ、地も、一般の地理書には、

前に述べた二つの平野とともに、平野の一部として取り扱われています。

關東平野の大部分をなしているこのだ、地は、以前は、火山からふき出した火山灰が、陸上に積つて出来たものと考えられていましたが、近年その中に小さな丸石のあふることが発見され、それがもとなつて、いろいろ研究された結果、やはり、大きな川がその兩岸に土砂を流すようにして、火山灰を流し出したものだということになりました。東京都の西部を占めている山の手は、すなわち、このだ、地の續きです。

島國であるわが國としては、海岸にもまた細かいおびのような平野があります。これは小さな多くの川から流れ出た土砂とその一部がいつたん海にはいつたものが、再び波浪のために押し返されて出来た平野で、海から押し返す波のために積つた土砂が、陸地とのあいだに浅い瀉を作り、それが長い年月のあいだに小さな平野に變つてゆくのです。これらの平野はとくに沿海平野と呼ばれていて、沿海平野は到るところの海岸に見出されるのですが、瀉の多くが日本海岸にあることは、新潟、秋田、島根、青森の諸縣の海岸に明かです。

河ぞいや盆地や海ぞいの平野の、水がかりがよいところは、われわれの常食とする

米を穫るため、水田に利用するに一番つごうのよいところで、いわゆる野村は、そのまわりに一面に青だたみのような水田を控えながら、少くとも十數戸、多くは數十戸から數百戸づゝ散ばつています。しかし、それらの村々の出来はじめは、けつして、樂々と出来たものではなく、昔は今のようには排水の方法も進んでいなかつたので、村をつくりはじめたところは、まわりに水田を作ることが出来て、そして水害の少い小高い地點を選んだに違いありません。すなわち、大きな川沿いでは、低い所は川がたてよこに流れていきますから、一段と高く土砂の積つたところか、盆地ならば、山のふもとにちかいたところに、ふるい野村の位置がきめられたものでしょう。

このようにして平野は開かれ、そこに無数の野村が出来ましたが、その村々は年がたつに従つて、人口もふえ、家々の次男や三男は、分家して新たな耕地を求めて、そこにわが家を建てねばならなくなつて、それが百年も二百年もたつと、更にふえた人たちは、新しい土地を求めて耕作しなければならなくなり、そうなつてくると今まで捨て、あいたじくくしてある低いしめつた土地の水はきをよくして、田を開くようになります。このようなところは、いわゆる新田で、前に述べた大きな平野の河口ちか

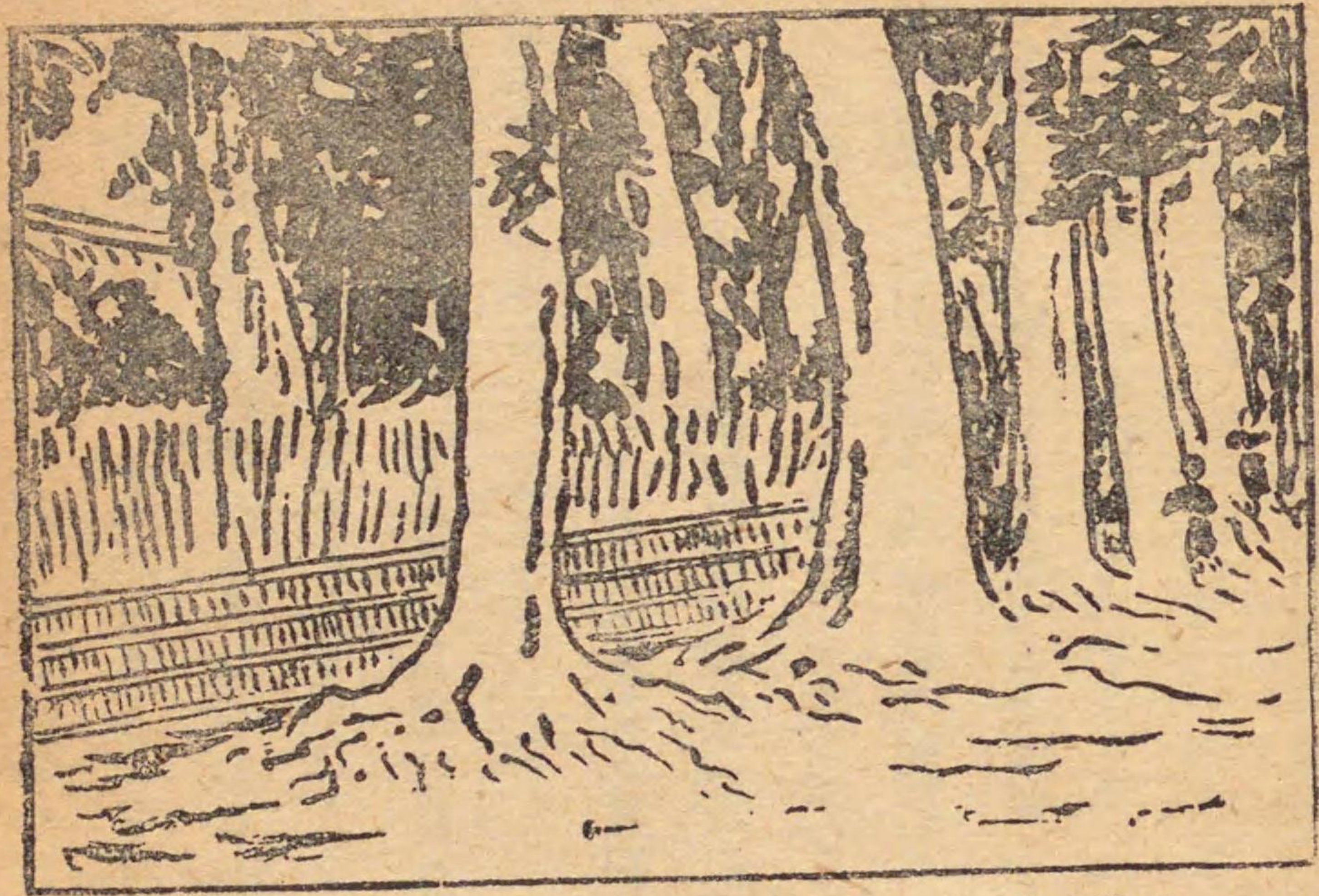
くや沿海平野や潟ぞいなどに、何々新田という地名の多いのはこのためです。

わたしの記憶にある野村の中で、一番あざやかに残っているのは、三十年近く前のことですが一年ばかり、毎日歩きまわつた武藏野の村々の姿です。

田舎道のところでも、ちよつと話したように、武藏野の地形は、波のうねくくしているように、小高いところは、赤松の林やくぬぎの雑木林などに取り囲まれている畑で、低いところは小川に沿うて細長く水田が開けています。どこの村にしても、村人は常食とする米をつくらねばならないので、武藏野のふるい村々は、たいがい南向きになつて、前には水田をつくり、後には畑をつくり得るようになっています。

このようなるいところでは、その部落を開いた舊家が中心となり、その舊家のちかくには、部落の氏神やぼだい寺などがあり、また舊家の分家も部落の大きさにつれて、十数戸から二三十戸あります。分家の多くは地主や自作ですが、また小作人もいます。

舊家の格をまだ崩さずにいる家では、百年や二百年もたつたけやきの屋敷林を、今



武藏野の舊家S家の屋敷林

でも宅地のまわりに持つています。今では東京都内になつていますが杉並區の舊家S家の屋敷林は、私の知つている限りでは、武藏野での一番大きなけやきの屋敷林を持つているので、けやき大じんと呼ばれていました。二抱えもあるかと思われるけやきの大木が、門前から庭前に繁つているので、遠くから眺めてもまたちかくへ行つてみてもそれが大きな家がまえにもまして、由緒ある舊家の目じるしです。ですから、いくらふるい部落でも、舊家のまわりの屋敷林がすつかりきり拂われたり、また屋敷林だけが残つていても、その中身の舊家が取り拂われて、ふるい井戸ばかりが残つて

いる様子を見ると、實に寂しい氣がします。

いかめしい舊家の家がまえと、それをほごするような大きな屋敷林の他に、なお舊家らしい感銘を與えるものは、ふるい部落の發達を知るための系圖や舊記、また地圖などが保存されてあることです。ふるい長持ちの中から、これらのふるい書類がとりだされた時には、私達は、目には見えぬ村の生い立ちを知っている故老に目のあたり會つたような氣がします。

このS家にもいろ／＼のふるい書類が残つてはいますが、ことに井の頭池に近い吉祥寺公園のある三鷹町の牟禮のT氏の家には、ふるい書類が、それを研究しようとする人たちによく見せるように整えてありました。同氏の祖先は、天正年間に小田原北條の麾下にあつた人で、牟禮の部落の後にある武藏野の中でも、わりあい高いので遠見のさく大番山に陣地をかまえたのが縁となり、この部落に居住するようになったといひ傳えられています。

他に、わたしのみた野村の二つは、いずれも利根川口に近いところにあるもので、

その一つは、見にいつたのはもう既に三十年も前のことですが、干潟八萬石といわれている新田の村々です。東京から銚子にゆく途中、銚子にちかくなつてからの成東という驛の附近で、すこし氣をつけると、窓の外には砂地の小松原が開け、軌道にそうて沼があちこちに散ばつており、ことに松尾驛の附近には、鳥喰い沼というのが今でもかもやしぎのよいりよう場となつているところです。つまりこの邊は昔の大海原でも太平洋からうち寄せる風浪に築き上げられた砂丘は、積りつもつて、海の姿は今の大沼小沼にそのおもかげを留めています。わたしの見た干潟は、その名残りの一番大きなもので、もとはその周圍が十里餘もあつたので『椿の海』とよばれていたさうですが、それを徳川時代の寛文年間に排水し、昔の水底に新田十八カ村を見るようになつたと言われます。南北にせまく東西にひろがつているこの干潟八萬石のなかを南流している新川の岸を、ぶら／＼あるいてみると、おぼろげながら昔の大沼のおもかげがしのばれます。

わたしは新田の鎌數村から新川岸の橋本に出てみましたが、路の兩側の畑地は、たがいがい落花生で、かわい／＼黄色な小さな花が、朝つゆを帯びている葉蔭にちよい／＼

うかがわれて、眞白な貝がらが砂地の中から顔を出しています。落花生は、この新田場に起つた特産物で、貝がらの多い地質が燐さんを多くふくんでいるので、落花生には最も適した地味です。だから落花生の本場といわれている谷町場附近は、明治初年には二十戸ばかりの寒村であつたのが、その頃には、百戸近くの村となつており、明治三十九年版の五萬分の一圖には、その附近は、針葉樹林のふごうで記されているのにそれのほとんどが開こんされて落花生畑となつていました。その後わたしは、再びこの干潟を訪れたいと思ひながら、今に昔の望みを果さずにいますが、さだめし、新しい村人が増したことであろうと思ひます。このように落花生が村の特産となるようになったのは、明治十一年頃に、鎌數の金谷という人が私財を投じて、この栽培をしようとしたからで、氏の家産はそのために傾くにいたつたといわれていますが、しかし氏の勞苦を記念する碑が、橋本というところにある伊勢大神宮の境内にたてられています。この大神宮は干潟の水をする時に、鐵牛和尚という偉い坊さんが、水の流れゆく方向をしるために、潟ぞいの多くの農家から大神宮の御札を集め、これを路に流したところが、それが今の境内の方に多く流れてきたので、今の新川岸をその流

水の方向に掘り、そして橋本にはこの神社をたてたといわれています。

またその一つは、利根川口の左に沿うている常陸の鹿島郡の矢田部村の川尻という部落で、利根川から北に五六町も離れずに川に並んだ縣道にそうて、南に向いて列んでいます。たいがいの家は、間口二十六間に奥行四五間という細長い屋敷を持つていますが、その大部分は、果樹の栽培に用いられています。砂丘に出來たこの村のことですから、夏の暑さを相當に防がなければならぬし、また風を防ぐためには松の防風林を農場のまわりにつくらなければならぬのです。

わたしのみた家は、〇農園というこの部落でも一番果樹栽培に熱心な人で、昔からこの邊で栽培している桃はもちろん、柿もりんごもぶどうもつくり、またきゅうりやなすの促成栽培をもやつています。その農園にはいつてみると、眞直な農道を左右にしての果樹園から野菜畑は、素人目から見ても、組織的にやつておられるのがわかります。居宅の土間にはテーブルを据えつけてあつて、平常は應接室となし、忙しい時には食卓にも兼用するようにしてあります。また住宅との間に廣い干し場を隔てて精米

場がありますが、そこには動力としてモーターをすえつけ、同じ部落の人達にも貸して、賃錢の代りに忙しいときに労働をしてもらうなど、すべてが工夫してあるところに、この家の主人の努力が見られました。

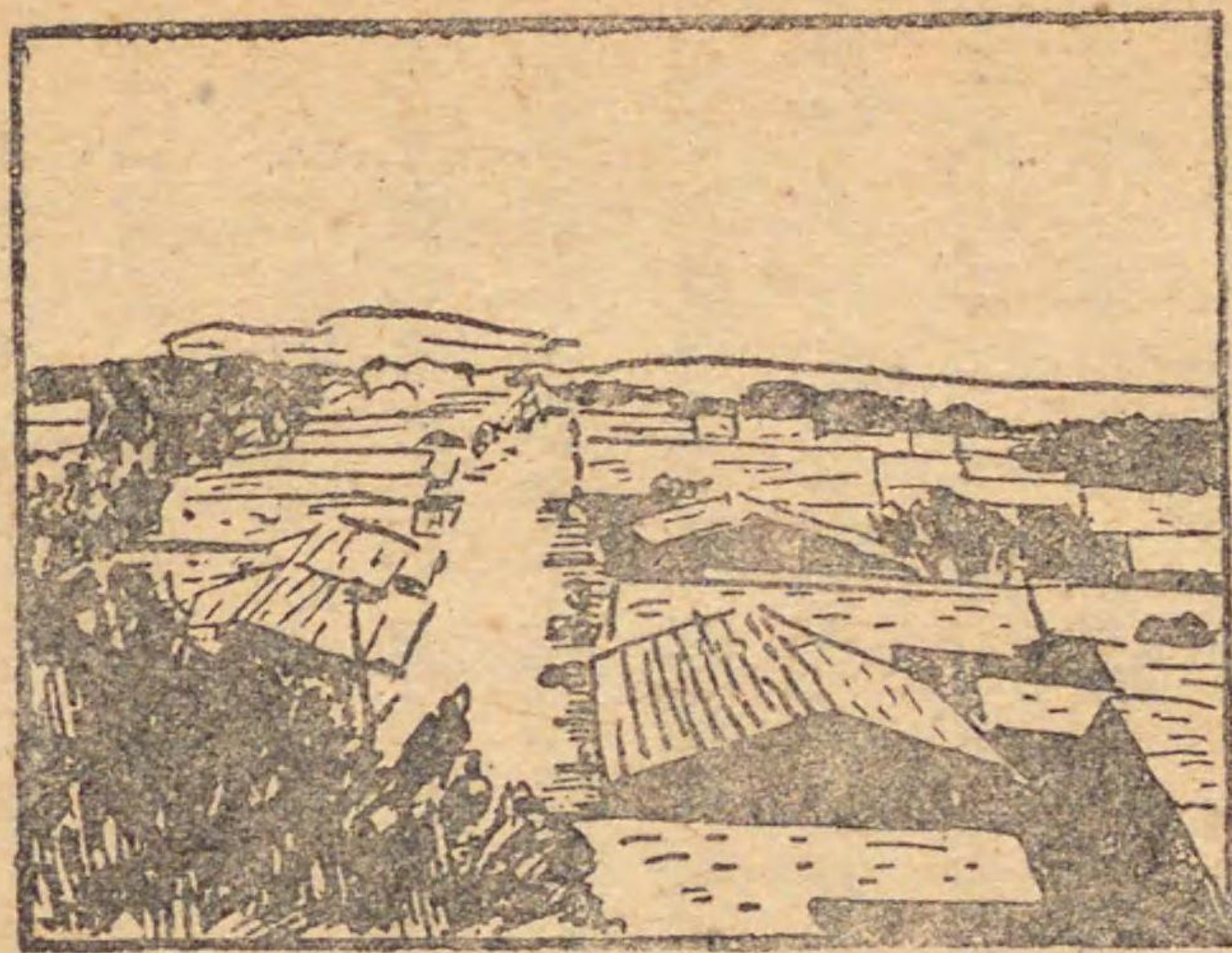
わたしは、月夜にこの家を訪れ、広い干し場に置いたテーブルをかこみながらその苦心談を聞きました。が、縣の農事試験場の委託を受けているのも當然だと思いました。O氏のように、よくその風土に適應した農事の經營に骨を折つておられる方々は、皆さんの郷土にも相當に多かろうと思います。

わたしたちは、生きた地理——その風土と生活とのかんけい——例えば氣候と作物、作物と労働、作物と收穫というようなことを、農事の方面から目のあたり學ぶことが生きた地理の勉強に最も大切なことだと思ひます。ヨーロッパやアメリカなどでは、このようなことを農業地理という名で、新に研究されるようになって來ています。だから皆さんの目の前にあらわれている田舎の生活は、これを順序だてて學べば、それが立派な學問であることを忘れないで下さい。

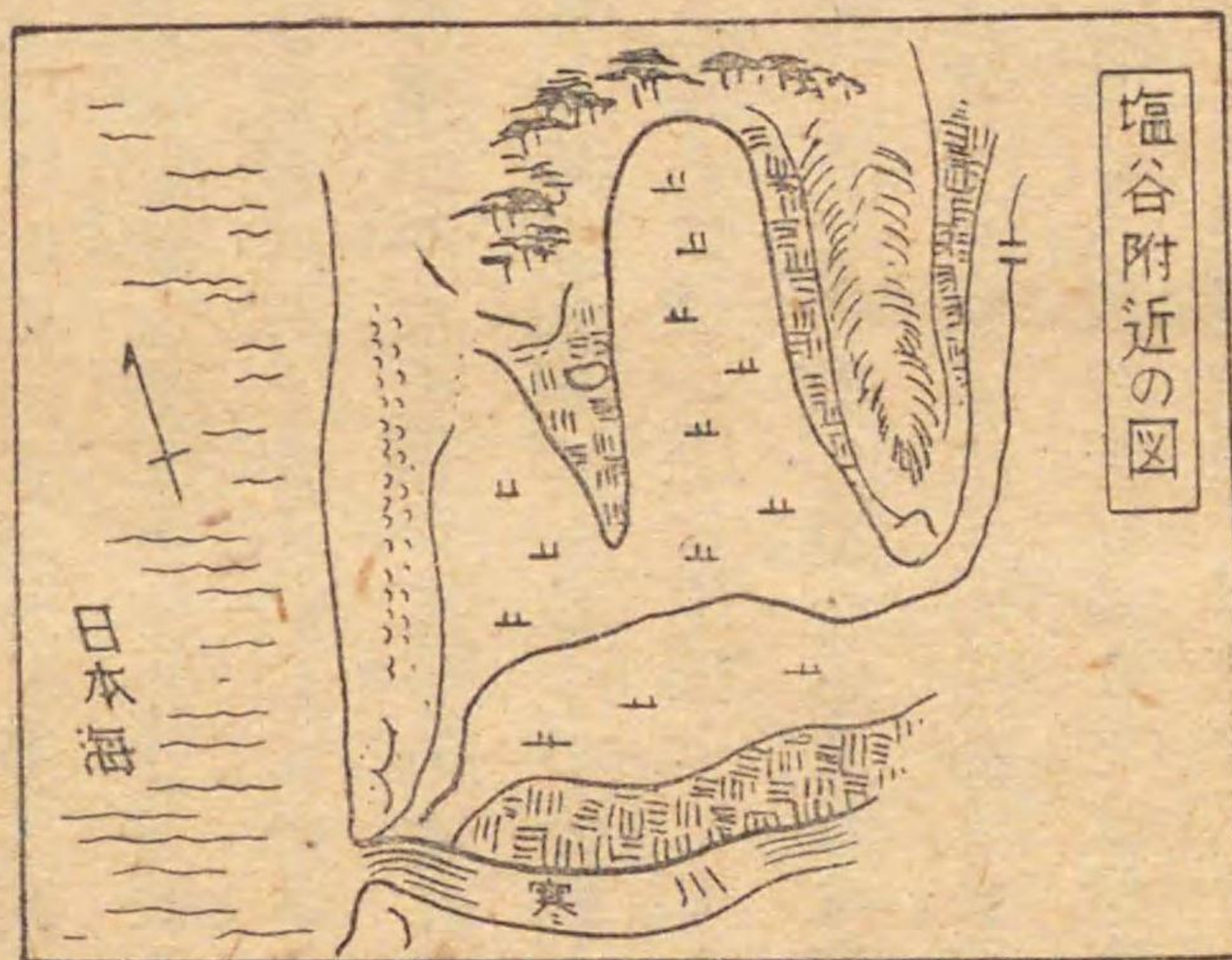
漁 村

島國であるわが國では、海にそらているところが、長く廣いだけに、その状態がさまざまで、親不知のように、がけが屏風をたて列べたようにきりたつていたりところもあれば、大磯のように大小の岩が波間に見えがくれているところもあり、また九里濱のように、見わたす限り砂濱が平たく續いているところもあれば、東京わんや大阪わんや伊勢の海のように、いわゆる泥海で、はいると泥が膝や腹までもぬかるところもあります。砂濱や泥濱のところは浅い上に入りもすくないから、舟がかりも出來にくいところが多いけれども、がけや磯の多いところは海も深く、また風波を避けるにつごうのよい小さなわんになつていたりところもあります。このように海わんの様子が違つたと、漁村のある場所も自から異つてゐることは、海わんに遊びにいつた人達にはよく合點のゆくことでしよう。海濱の様子が違つたと、そこからとれる魚介の種類も異り、従つて漁をする方法も違つてゐるようになります。がけや磯の多いところには、海の底に岩が多いから、磯づきのする魚や藻が多く、砂濱の續いている海には貝が多

く、また川口で、眞水まみずのはいるところには、海苔のりのよく出来るところや、かきなどの繁しよくに適するところもあります。



漁村 (越後の鹽谷)



鹽谷附近の圖

磯が多く、その上、山が海岸近くまで迫っているところでは、そこに住んでいる人達は、農業をしたいと思つても、土地がせまいために漁業を主とするようになり、また土地

が廣くてもそこが砂丘などで農業に適しないところでは、自然に漁業を主とするようにもなります。

こうして海岸の村々には漁業を主とするところ、半農半漁のところが出来ると、どこかすると、もとの漁村が舟着きのかんけいから、小さな港にまで發達するところなども出来てきます。こんなところは、村といつても港町の芽が生え出しているものとも見られましょう。

わたしが最近見た漁村は、越後の北部の平林ひのばやしという村の鹽谷しおやという部落ですが、村といつても、荒川という川の川口の右岸の砂丘の上に来た所で、もと漁が盛んであり、北海道通いの船の着いた頃は、ずいぶん繁昌はんじやうしたところでした。

村とはいうものの、その家並が町らしくなつてあり、また相當な酒造家のあるところから、盛んであつた當時がしのべれます。その目抜きめぬきの場所から海岸に沿うての一町を北へ北へといつてみると、北の端には、生々しい砂丘の上に、出来たばかりと思われるような二三の新屋しんやを見出ししました。

わたしは、この部落を郷土とするK君と半日ここを見て、そして砂丘の三段さんだんの成因とその上に發達した村の成り立つた順序とに、非常な興味を感じましたが、しかし、

なんとなく寂しげな村の姿を見るにつけ、もはや過去となつた村という感じを強くしました。

漁村は山村や、野村と違い、陸地よりも海によつて生活することが多いので、従つて漁がすくなくなつたり、またもとあつた船通いがなくなつたりすると、この鹽谷のように火の消えてしまふようになることを免れないのです。

しかし、最近きいた駿河わん岸の漁村では、明治初年頃までは不漁でさびれていたのが、發動汽船を購入し、黒潮に乗つてかつを漁に出掛けるようになったから、漁獲もだんだん多くなり、村の有様は活気づき、附近の農村が戸口の減るのに、この村の戸口は八割も増加し、下水はよくなり、瓦ぶきもふえ、傳染病もなくなつて、村の青年も暇のある時には勉強して、船長や機關士の免状をもとるようになったといわれています。

わたしたちは以上の二つの漁村の實例によつて、日本の今日の漁村のよい對照をみ

るような氣がします。

郊村

郊村は、山村とか野村とか漁村とかにくらべると、大きな都會の周圍にある點において著しくこれらの村々と違つています。山村とか野村とか漁村とかには、なかには工業が副業として相當に營まれているところもありますけれども、その多くは、農業や林業や漁業によつて生活しています。すなわち、その村々の土地の自然が生み出す植物や動物をもとにしてその生業を營んで生活している人達が多いのです。

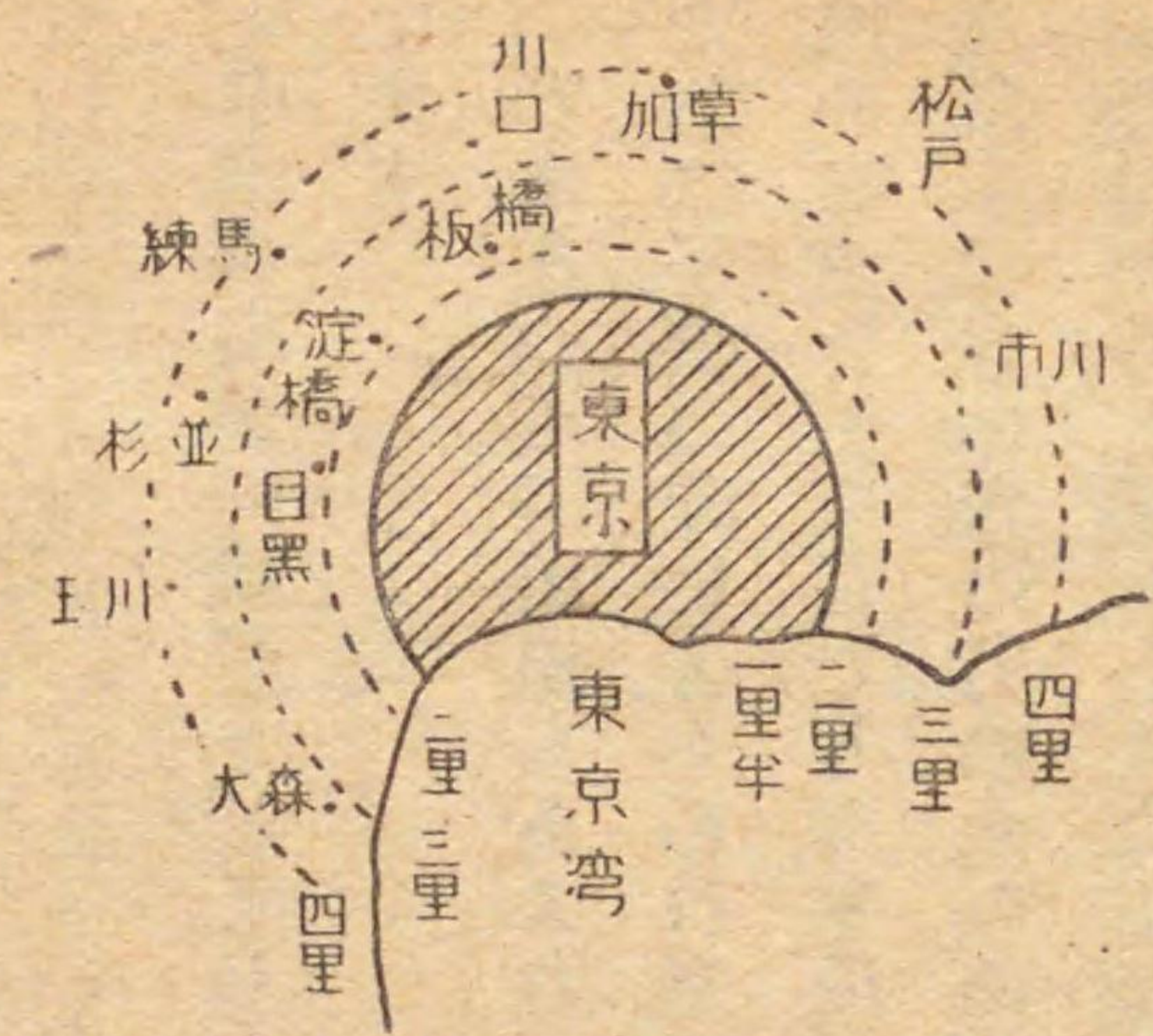
しかし郊村は、大きな都會をとり圍んでいますから、すべてその都會のぼうちょうしてゆく大きな力に支配されることが大きいのです。

この點は、山村とか野村とか漁村とかに見られない特色です。もちろん鑛山に近い山村、大工場のある野村や漁村は、これらの工業によつて、いろいろのえいきようを受けるところもありますけれども、郊村の數に比べてみると、極めてすくない村々に限られています。

大きな都會をとり圍んでいる郊村は都會のぼうちょう、するにつれて、都會に集る人たちは多くなり、その人たちは、都會のなかだけに住むことが出来なくなるし、また人口のつまつた都會のなかに住むよりも、電車とか自動車とかの便があれば、静かな郊外の空氣のよいところに住みたい望みも起つてくるので、都會の人達が、そのまわりの郊村に居住するのが年々多くなります。そのために、郊村では今まで一軒しかなかつた宅地に、畑地をつぶしてまで多くの住宅が出来るようになり、今までの宅地だけでは間に合わずに、更に畑や田までつぶして宅地にするようになってきました。

わたしは三十年ばかり前に東京市と言つていた頃の西郊、武藏野の村々を、日々調べまわつたことがあります。その頃でも、東京市のぼうちょうは、それらの郊村の田や畑をどしどし宅地にかえてゆくのでした。これらの郊村は、都會の人たちの住宅地となるばかりでなく、それにつれて都會の人たちに必要ないろいろな品物を製造する工場がふえてゆくのはやむを得ません。

そして、郊村に住む人たちが、今までの何倍何十倍になるにつれて、今まで寂しかった村々も、都會に變らぬほどににぎやかにになると商店も多くなり、郊村はこのよう



東京近郊圖

に大きな都會のために、住宅地、工場地、商業地を提供するようになったばかりでなく、いろいろの必要から都會に合併されるようになったところも少くありません。

なお郊村としての特色は、その農業が集約しゅやくになつたことです。それは都會の人たちの日々食用とする野菜や、また觀賞かんしょうする庭木や切り花を供給するために、急に促成栽培や觀賞植物の栽培が盛んに行われることになり、また牛乳や鶏豚の需要じゅようが多いためこれらを多く飼うことになつて來たことです。

だから、郊村は村とはいいながら、半ば都會的であるという考えで見なければならぬ一面も持つてゐるのです。

田舎の風景

田

日本の田舎の風景としてわたしたちに最もなつかしみのあるものは、田であると思
います。

春になつて、田からあふれる水が、小高い方からだん／＼と流れて来る力強さ、わ
たしは子供の時によくそれをだまつてたたずんで見入つたものです。小魚が勢いよく
田のなかをあちらこちらと泳いだり、蛙が水面に顔を出したかと思うとすぐもぐりこ
んだり、實に春の田の水のゆたかさは田舎のゆたかさをよく現わしています。

農民たちが馬とともに田掻きをする様子、馬の後になつて、泥まみれになるのを
のともせず朝から晩まで働く姿、これを「農民の働いている田舎の風景」の代表と
して、わたしたちは眺めたいと思ひます。

田植えがすみ、苗はだん／＼伸びてゆく、あの小さな花の盛りの頃に田の中を通る

となんともいわれない香りが青だ／＼みのような田の面を吹く風に送られて來ます。花
が落ちて實りかけてくるとあちらこちらに小屋が架けられ、それから引かれる鳴る子
で雀を追うことが始まります。

秋になつて見渡すかぎり一面にこがねの波が田の面にみなぎる景色は、廣い田場所
ほどその眺めが壯大で、ことにそれが夕日にはえる色彩はむしろ壯嚴な感じがすると
言えます。しかし、小さな山田が、谷間の入り口から奥の方へだん／＼と列んで
いるおもむきも、農民たちがそこを次ぎ／＼と拓いていつたあとが辿られるような氣
がしてゆかしいものです。

耕地整理をすまして、眞直に仕切られた田を見るのも心地はよいものですが、ふる
く開けたといわれている村のまわりに、不規則な小さな田が網の目のようになつてい
るのも、なんとなくひらかれた昔がしのばれるような氣がします。昔の田でも、いま
の耕地整理をすました几帳面な田と同じように、眞直に仕切られた姿を、大化の時に
行われた井田の跡方として見出すこともまた懐かしいことです。

用水路

田に必要な水がかりをするための用水路は、小さな山田ばかりのところでは、細いだけにそれほど目立ちませんが、広い田場所になると、それに必要なだけの水量を供給するために、大きなせきをつくつて、餘程遠い川上から水をひいてこなければなりません。このような必要のために、山の根にそうて作られた幅一間か二間もある用水せきは、わたしたちの小學校時代には、寧ろ水をあびたり漁をしたりする場所としたものでした。

しかし中學時代になつて、それが用水として由縁のあることを、父や學校の先生から聞かされてから、今までは娛樂場所としか思われなかつたところを、他の意味でみるようになりました。そして、夏など山登りや川狩りをする時に、その縁にそうて上つたり下つたりする道すがら、それが田舎としてのなくてならぬ風景だと考ふるようになりました。

ことに隅田川から江戸川までの間の低くしめつた葛飾の田場所や、越後の信濃川と

阿賀野川の間、の広い田場所の用水路のゆつたりしたあり様は、田舎の特有な風景です。

このような広い用水路にそうて、稻を干すために植えられてある並木も、用水路とともに田場所での一つの風景となつています。

畑

畑の風景は、田ほどゆたかなうるおいはありませんけれども、それが平かに広がっているのと、急に斜になつていゝのとでそれぞれの異つたおもむきがあります。わたしの見たところの中で、広い武藏野の畑には前者の風景が味わえますし、瀬戸内海の島々や中國の山國や、ことに甲州や信州の山畑は後者です。

しかし山のふもとで、一方には急な山畑を眺めながら、一方に狭くはあるが平たくなつていゝ畑のあいだを通つていゝ古道を通るところには、また變つた風景が眺められます。このような古道を通つてゆくと、畑のなかの一本杉の下に、名も知られぬ小さな祠が立つていたり、向うの遠い山影が、この古道を通る人達の昔からの目じるし

であつたりするのが、またこの道筋の田舎の特色ある風景であることがわかります。畑の風景はその眺めが一直線にひろがつていたり、それが斜になつていたりするとでかわりもしますが、また作物の種類によつて、それが著しく變つてみえます。よく麥波むぎなみという言葉がつかわれますが、生温なまぬるい春風が、廣い麥畑の上を吹いている時には麥の穂が上つたり下つたりするので、それがまるで大海原のような感じがするのと言います。こんもりした茶畑、まばらな枝の桑畑、南國の日光に輝く葉と黄色の實のついている蜜柑や橙だいごの畑など、作物によつてその風景もいろいろな變化があります。

關東から關西に旅するもので、美濃から近江にはいると、一番目立つて氣のつくものは、山のふもとの村里近くに、ところどころにある竹林の畑の風景でしょう。また春の日に、近江から伊勢、近江から攝津あたりまでの旅をする時に、こがねをまさちらしたような菜たねの畑も、關西でなければ見られない畑の風景の一つです。

裾野

裾野という言葉をきくとすぐわたしたちの頭にうかぶのは、あの富士の裾野の眺めです。富士の秀でた姿の美しさは、その頂が高く雲のそとに聳そびえているからであるのはもちろんですが、そのふもとである裾野が、ゆるやかに廣くひらけていることが、ますますその姿を雄大ゆうだいに感じさせるからです。

東海道線の汽車が、海岸の國府津驛こふづから、山間の山北、駿河すまがの二驛を経て御殿場ごてんばに來ると、この富士の姿は、私たちの乗っている汽車の右窓に見上るように迫せまつて來ますが、その時に汽車の通つているところはその裾野なのです。

車窓から先ずその頂を仰ぎ、それからゆるやかに、そして廣くひらけている裾野に目を轉ずると、頂から裾野までの傾斜をあらわしている美しい曲線が、空と地表との間にはつきりと描かれています。まず私たちの眼を驚かせます。

頂きは遠く青黒く、それがだんだん裾野に近くなるにつれて、綠色に變つてくるとともに耕地などが開けていることが目につき、汽車から近いところでは、大きな熔岩ようがんのあちらこちらにころがっているのが、噴火した當時のもうれつな有様を思わせます。きれいな清水が小川となつて勢いよく流れているその間には、地狹ぢまですが田がひ

られ、また麥畑などもすこしはひらかれています。耕地の散ばつてみられるところには、また一軒か二軒の民家もあります。私は、富士の裾野のなかを歩いて旅したことはありませんが、十幾度となく汽車で通るたびに、車窓からそこを眺めては、その眺めの廣やかなのに見入るのが常でした。

富士のことを書いたある本に、

「裾野の須走附近には芝生ばかりの荒地もあるが、また潤葉樹かつようじゆの林もあり、ことに一合目附近までのあいだは鬱蒼うつそうたる針葉樹林で、植物採集家のよくゆくところである。一合目から二合目くらいまでは灌木かんぼくが生え、それから四合目くらいまでは草木や苔こけばかりになる。」とありますが、これでほぼ裾野の風景が思いあたるでしょう。

裾野についての私の思い出は、鹽原温泉しおほらにゆく途中の那須野カ原なすのと、日光の中ぜん寺湖畔から湯本温泉にゆく途中の男體山なんたいざんの裾である戦場カ原です。

西那須野驛かののむらから、狩野村かののむらというところを通ると、その部落の井然きんぜんたる區かくは、いかにも新しい開こん地としての特色をあらわしてはいますが、そのうちの大きな林地が防風林であると聞いて、まだ開こんされなかつた當時の風の強さが思い合わされま



裾野の放牧 (秋田の寒風山)

す。裾野の常として、用水のため
にひかれた新堀川の岸には、とこ
ろどころに、水車が設けられてあ
り、この川が出来てからは、濕氣
のために地味もよくなつたとい
われています。西那須野驛の南方
に、湧き水が出て、そのために水
田の開発が多く見られるようにな
つたのもこの新堀川の賜で、いか
にも裾野らしい感じがしました。
廣い那須野カ原のなかを、眞一
文字に通つている道路と、その兩
側の雜木林も、また裾野としての
廣い風景の特色です。

那須野カ原にくらべると、戦場カ原は、山間にできた裾野だけに、狭いけれども山々に囲まれている高原で、その風景はまづたく異つています。ことにその特色ともいわれるのは、平地ですが、冷湿であるために耕地にも利用されず、地表には苔桃などの高山植物が生えていてそのなかのところどころに、落葉松や白樺の立つている高山地らしい風景が、かえつてこの特色のある風情を増しています。

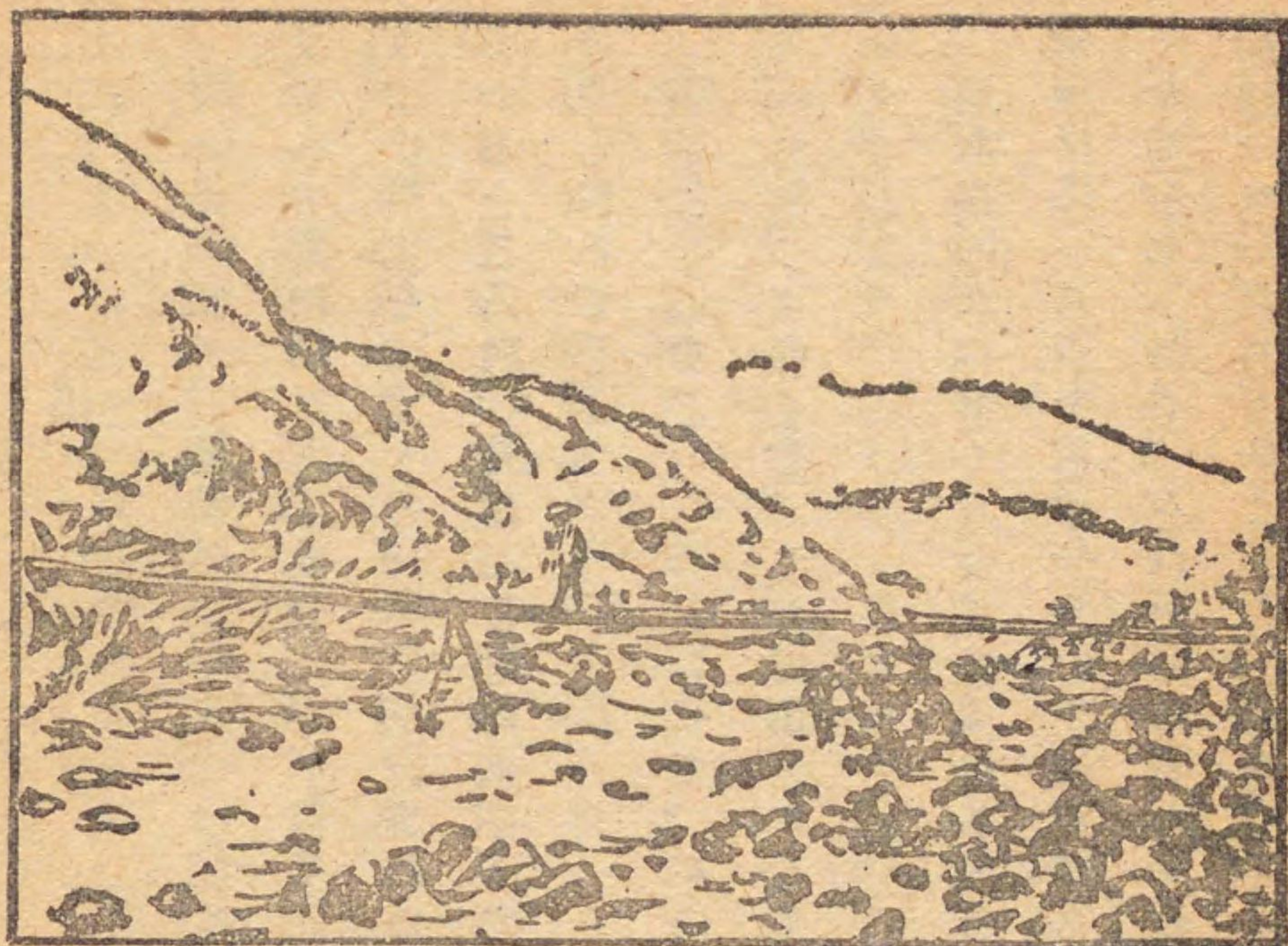
裾野という言葉は、いつ頃からわれわれの祖先が用い始めたものであるか、私はそれを明かにしませんが、火山の多いわが國の風景としては、それが大きな特色であるだけに、わが國に観光にくる外國人なども、裾野の風景は、観光の一つであるといっています。またそのという言葉も譯さずに、そのまゝ用いられていると聞いては、火山國に生れたわたしたちは、古來噴火のために地震その他の被害を受けていることも甚しいけれども、それによつて特殊な風景が恵まれ、ことにそのふもとに廣くひろがつている裾野は、風景としてもまた田舎としても、わたしたちに特別な場所として與えられていることを記憶すべきだと思ひます。

橋

狭い谷川で、一足飛びに向う岸に渡ることが出来るところでは、兩岸に小路があつてもその間に橋はありませんが、さもないところでは、大昔の橋の姿がしのばれるような自然木そのまゝの一本橋が渡されてあるところが多くあります。あさい川が流れているところに、自然石を庭の飛び石のように置いてあるのも、橋といえは一種の橋と見られるでしょう。

簡単に柴枝などをしきならべて、その上に土を盛つた土橋の上を、農民が馬をひきながら通つてゆく姿、これは田舎ならではの見られぬ橋でもあり、また風景でもあるといえましょう。

用水堀の水の多くなつてあふれるのを、調節するためにつくられた水門の上の橋、水車に用いる水を落すせきの上にかけられた橋、少し雨でもふると、急に水が出て流木などが多いので、それを避けるために、橋の足場になる杭をつけないように工夫した橋、深い谷の上をこちらから向う岸に架けた橋。私の記憶を辿つただけでも橋の種



田舎の橋 (箱根の早川)

類はたくさんあります。

相當に川幅が廣くても、急に水量の増すところでは、やはり橋の作り方を工夫しなければならぬので、信州の千曲川の右岸にそうしている北國街道の戸倉から對岸の温泉にゆくためにかけられてある橋や、また山城の笠置山附近で木津川にかかつている橋なども、特別な作り方で、それが附近の一つの風景となつています。私はまだ見てはいませんが、舟橋もまた特色ある風景の一つと言われています。

山國で谷川の多いわが國、田場所の多いわが國には、橋の種類もずいぶん多

く、そしてそれが田舎の一つの風景となつていゝるのです。

渡し場

渡し場は、橋のかけにくいところにつくられています。ふだんは川幅がせまく、また淺くて徒歩で涉れるようなところや、水が出ると急に河原一面が川になるようなところでは、長い橋をかけるのに經費が多くかゝるので、舟で渡しをすることにしているところがあります。

舟底を瀬の石にごしごしすりながら渡つてゆく舟の上から、川底をのぞくと、きれいな水底の小石は、一つづつ數えられるくらいで、その兩岸の廣い河原に生えている柳の小株や、河原などでしこなどが川風になびく景色は、河原にこしかけながら舟を待つ間の眺めです。このような急に水の出るところでは、渡し守の家は、遠く河岸をはなれたところにあるのが常です。

川が大きく廣く、そしてそれが平野のなかを流れるようになると、それをよこぎつてゐる大きな道路のつぎめには、必ず丈夫な橋が架けられています。しかし、橋のな

い両側の村々への往來のためには、渡し場の必要が起つて來ます。このような大きな川になると、増水を防ぐためにつくられた兩岸の高い堤防の上に、小さな渡し守の一軒家が建てられていて、そのそばには増水を計る木標が立つています。奥の村々から、この渡し場を指して集つてくる道路が多いだけ往來のひとの数も多いわけで、渡し守の家は、渡し場を扱つている他に、駄菓子を買つて往來するひとたちの休憩所きゆうけいじよをかねたり、また雑貨ざつかなどを商つたりします。大きな川の兩岸の舟宿を主とする町なども、もとはこうした渡し場がその原因となつたものです。

大きな川の兩岸に、一面に生えているだけの高い柳の木蔭を、春から夏、夏から秋、秋から冬と、一年中、この渡し場にくるひとたちが、渡し舟の通る方向へと一筋に、いくたびとなく往來するために出來た小路が、柳原のあいだに眞一文字につくられてあるのをみると、すべての道路のはじめともいわれる「ふみ分け道」の出來あがる順序が思い出されて興味深く思われます。

水 車 場

水車場は、田舎の人たちの労力を幾分でも、他の力ではぶこうとする必要から工夫されたものですが、それはただ必要な物としてばかりでなく、同時に一つの風景としてもまた田舎の特色となつています。

水車場の位置は、それが大きな舊家とか、水車を営業としてゐる農家とか、また部落の組合とかで經營されている關係によつて、自から異なります。

大きな舊家では、自分の家の小作米だけを處理するため宅地の片隅に、用水の餘り水をひいて、恰好かっこうな水車場を作つておくので、自分の家の必要なときだけまわしたり、また村のひとたちに賃貸ちんがしをしたりします。

けれども、それを營業としてゐる家では、自然に水車場を主とし、住み家はその附ぞくのように作られてあり、その位置も部落の端などに多く建てられています。水車でつく米や麥の運ばんなどまでも、その家族のひとたちがやつたりします。また部落の組合で設けられた水車場では、世話する人の家族がいるところもあります。番人があらずに部落のひとたちが代り來てそれを用いる所もあります。そんな所では番人がいないから、朝、米なり麥なりを水車場の臼うすに入れておき、つけたころを見

計らつてはそれを取りに行くようになっていす。

大きな水車が、水の勢いで上から下へと運轉する様子も、おもむきあるものですが、杵きねの一方が水溜りみづたまとなつて、それにいつばい水が溜ると、その重さで下つては上り、上つては下る調子で、搗くように工夫してある簡単な仕掛けしかの水車も、かえつておもむきがあります。

このように、昔は田舎ではなくてはならなかつた水車場も、電力を利用する仕掛けの大きな精米所が出来るにつれて、水車がだんだん無用になつてゆきます。これは田舎の進歩ではありますが、田舎の特有の一つの風景としての水車場が、今から幾十年かの後には、極めて少いものになつてゆくことは、田舎の風景を愛するひとたちにとつてはいいがたい寂しさです。

並 木

並木も、水車場と同じように、風や雪をふせぐために、あるいは暑さをしのぐために、道路ぞいに植えられたものですが、長い年月がたつて、その丈も枝振りも、大き

くなるにつれて一種のおもむきが出てきて、田舎での一つの風景をつくります。

植物學者は、丈や枝振りからの姿を樹景じゆけいという言葉でよんでいますが、並木は、風や雪のはげしくないところでは、それが素直すなおに育ちますけれども、廣い田場所とか畑場所とかのなかを、一本筋に通つている道路では、風當りが烈しく、そこに植えられてある並木は、一年のうちで、きまつた方角から強く吹く風のために、自然にたわめられて、風の吹く方角と反對の方に曲るようになり、それが樹景としても一つのおもむきを添えるようになります。ですからわたしたちが並木の曲つている方向で、その地方できまつて吹く風の方角を知る手掛りにもなるのです。

しかし、また杉のように眞直に育つ樹木は、日光や箱根の街道の並木のように、道の兩側に鎗やりを並べ立てたように育つて、立派な風景となつていす。

越後の上杉謙信公かすがの春日山の城あとの東方には、越前から越中の海岸を通り、更に越後から信濃を経て江戸に向ふ街道がありますが、その兩側の大きな赤松の並木は、百幾十年という古さのものです。従つて夏にはよい木蔭をなして陽よけになるばかりでなく、雪深い冬にも、積つた雪のなかから出ている幹の上半は、この上もない道し

るべになります。

道 する べ

田舎の道路のうちでも、停車場から役場へとか、役場から学校へとか、またちん守とかぼた、寺とかへの道路は、村の道路としても一番主なる道すぢだから、一度きけば間違うわけありませんが、部落から部落へ、ことに見通しのきく田場所ならともかく、田場所に通つてゐる古道などでは、ちよつと間違うと、なか／＼わかりにくいものですから、ことに今日のように詳しい地圖などのまだ出来ていない昔には、道のわかれめには相當のちゆうい、が拂われたものです。

わたしたちは、田舎道を歩いていて、道が二筋にわかれたり、また四辻になつたりしてゐるところには、自然石か、または小さな石碑せきひのような道するべが、建てられてあるのをすぐみかけます。

このような道するべには、道路安全とか、また庚申塚こうしんづかとかの文字が、刻まれてありますが、昔の人たちは、どんなにかこの道するべに感謝を捧げたことでしょう。



道 標 (秋田の土崎港)

同じ田舎であつても、大和とか山城とか河内かはちとか、和泉いづみとか、せつ津とか近江とかの古い國には、ことにこの道するべの立派なものが立つています。道するべも、その始めは、旅人への道のしるしとして建てられたものが、年経るに従つて、それがその周囲の風物と共に、田舎での一つの風景とみられるようになってゐることは、田舎を旅し、田舎の風景を愛するひとたちの誰でもよくうなずけるところでしょう。

都會の成立

都會の芽

一般に、田舎といわれる村々の中でも、ふるい神社やお寺の前とか、昔の館やかたのあつたふもととか、小さな温泉のあるところとか、また田舎道と田舎道との、かち合つてゐる辻のところとか、また河舟の出入りするところとかは、同じ村の中でも出入りする人たちが多いからそれらの人たちのために、農業ばかりしている農家の他に、わらじや食物を賣る茶店や、日用品を賣る雜貨店などが、一軒二軒と出來て來ます。それが出入りする人達が多くなるにつれ、二軒のものが三軒、三軒のものが四軒となつて、店の種類も従つてふえてくるので、そうになると、小さいながら、三人や五人の旅人を泊らす宿屋なども出來るようになって來ます。このようなところは、たとえ、そこが村の中であつても、都會らしいところがあります。

今日、大きな市や町になつてゐる所でも、そのはじめは、このようなところがだんだんに大きくなつたものです。だからこのようににぎわつてゐる所は、たとえそれが村々の中であつても、田舎の中の都會であり、また都會の出來る芽だともいえます。『和名抄』わななしょうという昔の書物にも、「店家俗に町みやという」とありますから、商店のあるようになつた所を、町まちといひならわしたことが明かです。村の中心でも農家の他に商店の集つてゐるところは、町であり、そこから都會になる芽がふきだしてゐます。現在村といつてゐる中にも、このような小さな都會の芽、すなわち町らしい所、都會らしい所が、ところどころにあらはれてゐるのに氣がつかます。

私の見た都會の芽についての思い出を辿つてみますと、村でありながら、いかにも都會らしいと思つた所は、舟着きの小さな港々に一番それが色濃く出ていたように思ひます。常陸ひたちの潮來うしほといへば、霞ガ浦から北浦にぬける利根川の水流に面した水郷で江戸時代には川舟でこの水郷の勝景を賞あでるために、江戸からたくさんの人たちがおとずれたことで知られてゐた場所ですが、水の豊かな初夏の頃、穂先のそろつた眞まこももの青々としてゐる景色を眺めながら、その間をぬうて、鏡のような静かな水流に棹さしさ

すおもむきは、江戸人には又とない楽しみであつたでしょう。殊にこの水郷潮來にゆくには、小さな水道の両側にある農家の通路として架けられてあるそぼくな木橋『十二橋』の下をくぐりながらゆくのですから、風流味の勝つていた江戸人は、どんなにそれを喜んだことでしょう。

この十二橋の傍をすぎて、潮來に着く前に舟を寄せるところは、牛堀という舟着き場です。ここは今日香澄村の中に含まれていますが、舟の着く所は、小さいながら河岸が出来ており、河岸にそつて宿屋もあり、こゝから上り下りする人達も、こゝで上げ下しする雑貨その他の荷物も少くありません。わたしは鹿島神宮に參詣の途中、汽船で霞ガ浦の東岸の高濱から北浦の大船津にいつた時、日の暮れかゝる頃、この牛堀に舟で寄りましたが、河岸や宿屋のある工合、またそこに出入りする人達の多い様子、電氣さえまばゆくついているにぎやかさは少しも田舎の村らしく感じませんでした。

この牛堀に比べると、更にさゝやかではありますが、武藏野のだいた地から、隅田川の上流である荒川河岸にそつて、だいた地から低地に出る所々には、舟着き場であることがもとなつて出来た多くの都會の芽があります。

その中で、一番町らしい所は志木です。今では市になつている川越も、もとはそんなふうにして生い立つた所の一つです。それですから武藏野の北縁にそつている、小さなこの舟着き場である河港の数々を見ると、わずか十里足らずの間に、わたしたちは、そこに『田舎から都會』への姿を見出し得るでしょう。皆さんの郷土に近いところでも、これと同じような實例は、少し氣をつけるとさがしあてることが出来ると思ひます。

田舎道と田舎道とが合つてゐる辻に、小さな町の芽が生えることは、辻とか追分という地名の所を見ると、一番それがよくわかります。私は、郷里秋田で、男鹿半島の方へ行く道と本道と合ふ追分という所で、大へんよい實例を見ました。この二つの街道の合ふ所は、今でこそ町家が立ち並んでいてにぎやかなところであり、停車場も出来、大きな農業倉庫なども出来てはいますが、百数十年の昔には、たゞ一本の道しるべの立つていたさびしい田舎の分れ路に過ぎませんでした。當時菅江眞澄という有名な學者は、秋田の田舎や都會をまわつて、詳しい繪入りの『遊覽記』を書いてゐます。

信州の淺間山の西麓の追分も、宿場町として徳川時代に知られた所ですが、昔は恐らく、秋田の追分と同じような、さびしい分れ路にすぎなかつたでしょう。

農業をその生業としている村々の人たちは、米と麥とか豆とか食りよう品は、自分達の家族の手で作ることが出来すけれども、家具とか衣類とかは、たいがい村の外から買わなければならぬのですが、しかし、毎日朝から晩まで野良仕事に追われている農家の人たちは、その日用品を買うために度々遠方まで用達にゆくことはむずかしいのです。

そこで村々の商店は、小さいながらもこれらの村人の用達に開かれたもので、村々の人の数がふえると、入り用な品物もだんだん多くなつて、今まで小さかつた商店も、仕入れする品物が前より多くなるにつれて商賣も盛んになります。不足な品物なるべく不自由のないようにするためには、月に三回か六回の市が立つようになり、市の立つ所は、まわりの村々から日歸りの出来る程よきよりのところで、今日でも、一日市とか三日市とか、五日市とか七日市などという地名が残っているのは、昔、その日だけに市が開かれておづたことをしよう、こ立っています。

しかし昔の市のあつたところが、必ず市という名があるというのではなく、武藏野と秩父山地との附き合つている所にある、青梅という町から、北に數町はなれているところの中山という部落があります。これは青梅のまだ賑かにならなかつた頃に、商業の中心地、すなわち市場の立つておつた所でした。今日中山に行つてみると、いずれも養さんなどをやつている農家ばかりであつて、商業などのけはいは少しも感じられません。昔は市場でにぎやかだつたことは、その道の幅が普通の村よりはずつと廣いのもわかります。

このように村々の中に、船着き場にしろ、辻にしろ、市場にしろ、そこに都會の芽が生え出しました。その芽がもうしおれてしまつている市場町のあのような所もあり、これから町にでもなるらしい活氣のある所もあります。わたしたちがもう出来上つた大きな都會をよく知るためには、まずその芽である小さなもとから見はじめなければならぬのです。

都會と田舎とは、まるで別々に異つたものではなく、田舎の中にも都會らしい姿が見られるように、また都會の中にも田舎らしい所があるものです。

都會の生い立ち

わたしたちは、現在村々の中に、都會らしいところがあるところから考えても、ふ
るい歴史をもつているわが國の都會は、いずれも長い年月を経て、今日のように生い
立つたものであることもよくわかるでしょう。しかし今日の都會は、目のあたり、村落
の中で見られるような『都會の芽』が、どれもこれもみな、都會として生い立つて、
今日の都會になつたものではありません。例えば木の芽の中にでも、ずんずん伸びて
それが小枝ともなり大枝ともなつたものもありますが、中には芽生えのまゝ枯れてし
まつたものもあり、また小枝となつて枯れたものもあるように、『都會の芽』としての
村々が、都會となりおおせず、そのまゝになつてしまつたものも少くないのです。

私の知つている松岡靜雄さんは、わが國の都會の生い立ちを、地名から左の四種に
分け説明されています。

一、村落のぼうちょうしたのもの。肥前の國彼杵郡には大村町というのがあるが、こ
れは村が大きくなつたものだから大村といつたのを、だんだん町にまで發達したも

のです。

二、市がもとなつたもの。辻などになつてゐる道路の要の場所には、村人達が日
を定めて集つて、互に有無の物々を交換し合つた市がもとなつたもので、それが

今日、古市、三日市、四日市、十日市などの地名になつて残つてゐます。

三、津がもとなつたもの。昔道路のまだ完備しなかつた頃には、陸路の交通より
も水路の交通が主でした。従つて船の集る津、すなわち港町は、早く開けて繁華の
地となつた伊勢の津や、近江の大津や、今の大阪（難波津）や今の福岡の中での博
多（那の津）などは、中でも著名なものです。

四、皇居とか首長のおつたところ。これはみやこで、みやは天皇の御在所ばかりを
いうのではなく、貴人や豪族などの邸宅をもまたみやといつた。みやこは御家處で
す。だから皇居は正しくは大御家であり、帝都は大宮處であります。

私達は、現に住つてゐる土地に生い立つてゐる都會にも、これらの四種のいずれか
を見出し得るでしょう。

しかし今日の都會の多くは、これらの四種の都會の外に、戰國時代から徳川時代に

かけて發達した城下町もあり、更に、そのもととは宗教の盛んであつた中世時代に神社や寺院の門前に發達した門前町もんぜんまちも多いといわれます。

このように都會の生い立つた原因は、いろいろですけれども、生い立ちの原因が、ずれであるにしても、都會をはつきり理解し、殊にそれに親しみ深くなるためには、自分達の住っている土地に生い立つた都會の中でも、市とか、市ほど大きくなくても、比かくの大きな町を調べてみるよりも、先ず一番小さな町について、その町の生い立ちの原因から、現在の人口の主なる職業、産物の種類などを調べ、それを明かにした上、田舎での都會らしい所、すなわち、都會の芽ともいうべき所と比べてみれば、都會として型なまの出來上つている町と、都會らしいがまだ村である所との違つてゐる姿を見出し得るでしょう。

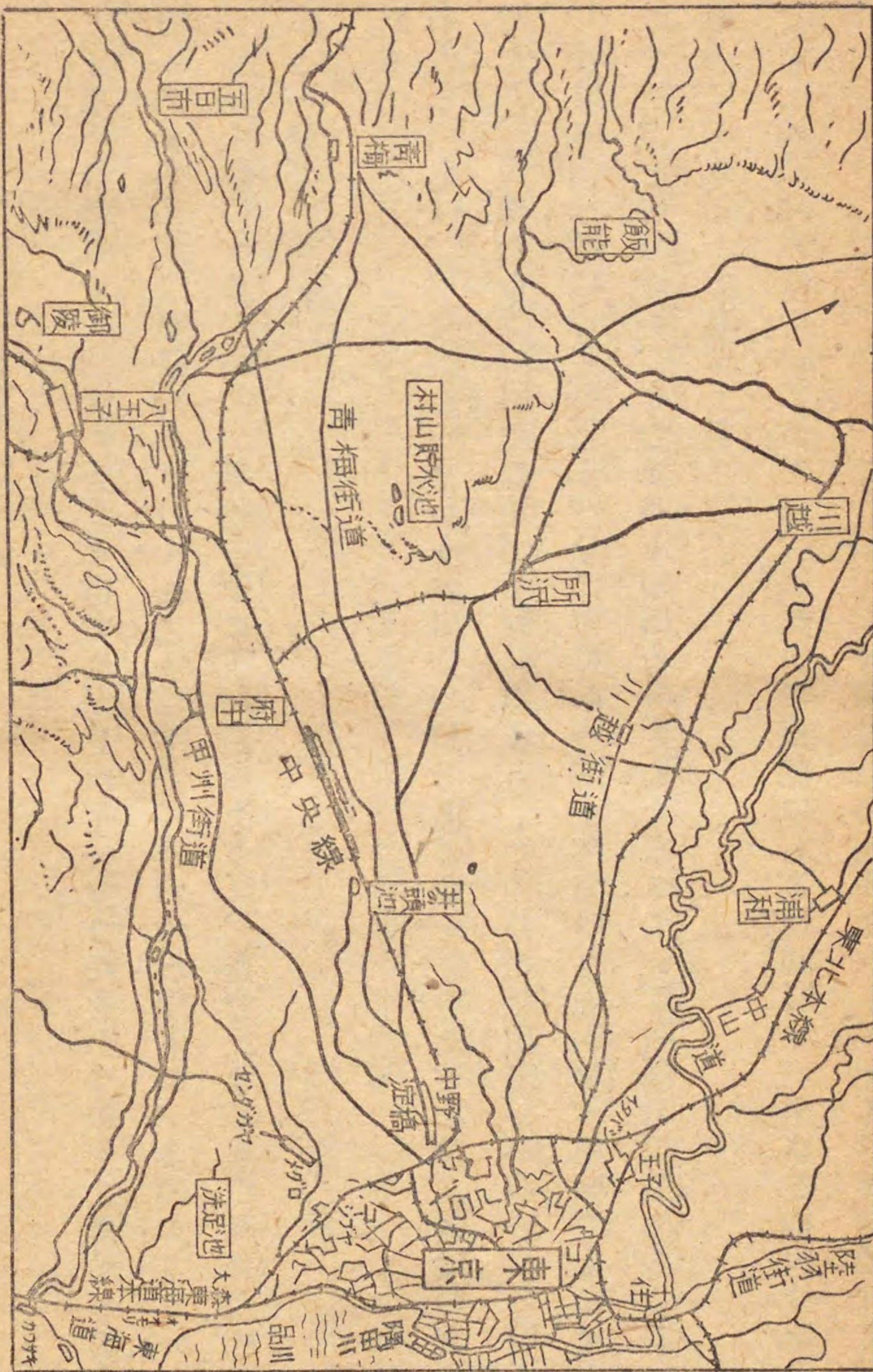
都會と田舎とは、名稱は異つてはいるが、けつして別のものではなく、都會は田舎から生い立つたものであり、幹みきから生え出た枝であり、枝にさいた花であり、花の結んだ實でもあることは前に述べたとおりです。

都會とまわりの田舎

どんな小さな町でも、また大きな市でも、その生い立つたまわりの土地である田舎とはいろいろの點で密接みっせつなかんけいがあります。外國の地理學者は、このかんけいをわかり易く説明するために、果物の中に核があるように、都會はまわりの田舎の核であるといつています。

わたしたちは、都會がそのまわりの田舎の核であるかんけいを、小さな盆地の眞中の町とか、山地から流れ出た谷川が平野に出ようとすする所に出來ている谷口の町とか、小さな瀉かたや湖の岸の町とか、また平野の中の十字路の町とかを、地圖の上に見ただけでも、その町々が、そのまわりの田舎の中心となつている關係を、手にとるように明かにすることが出來ます。

これを關東地方についていえば、筑波山つくはの東麓にある柿岡町かきおかは、小さな柿岡盆地の眞中に生い立つた町であり、また埼玉縣や東京都の西部をなしている秩父盆地は、柿



岡盆地より大きいだけ、その真中には、柿岡町よりも大きい秩父町が生い立っている。秩父山地と武蔵野だの地との間には、飯能とか、青梅町とか、八王子市などの谷口町が、また霞ガ浦とか北浦の岸にも、それぞれまわりの田舎の中心となつてゐる町々が生い立っているのです。

都會とそのまわりの田舎とは、まつたく陸続きのところもあり、また船で往來するところもあります。霞ガ浦岸の江戸崎町、北浦岸の鉾田町などのまわりの田舎とかんげいは、陸と水とが半々になつていて、北浦から霞ガ浦に通ずる所の水路にまたがっている潮來町は、田舎から旅客や貨物が船の便によつて往來するために賑うた港町であり、武蔵野の真中の所澤などは、平野の中の十字路に生い立つた町の例ともいふべきでしょう。

しかし都會が大きくなるにつれて、そのまわりの田舎とかんげいが廣くなつて來ます。例えば八王子市が、秩父山地と武蔵野だの地と接ぎ合つた所に出來てゐると同じように、川越市は武蔵野北端、だの地と荒川だの低地との所にあります。そして川越の町の中から出る小川が、荒川に注ぐので舟運をたすけることになり、川越は河

運の便利がよいから、まわりの田舎から出る雑こくの集散が多く、秩父から出る竹木や薪炭は、川越の扇河岸あうぎがしから江戸に出るし、江戸からも雑貨その他の荷物がたくさん川越に運ばれたのです。川越の城が築かれたのも、このような肝要かんような所であつたからであり、それが機業地となつて更に發達したのです。

越後の國は、平野は廣く、その中に多くの都會が生い立つているだけ、都會とまわりの田舎とのかんけいかんけいがわかりやすいと思ひます。

頸城平野は、信州境の方から北に流れる荒川にそつて開けてゐる平野で、信州から越後にはいつてはじめてわたしたちの目にはゐる平野です。高田市は、この平野の中央の西端に生い立つてゐます。スキーで知られてゐる金谷山かみやの上に立つて、山の下に高田市を眺めながら更にその東方に開けてゐる頸城平野の村落の數々を見ると、西に山地を負いながら、東に廣い田舎を控えてゐる高田市と、そのまわりの田舎のかんけいかんけいを明かにすることが出來ます。

高田市の北から南に通つてゐる主要道路の兩側の商店の數々には、いかにも附近の田舎の人達の相手に賑うてゐるあり様がみられ、殊に夏の夜に、高田の町並の揃つた

主要道路の路傍に、西瓜とか瓜とか小さな燈の下で賣つてゐる農婦たちをみると、高田市とまわりの田舎のかんけいかんけいがはつきりとわかります。高田市の呉服店にしても、また雜貨店にしても、多くの仕拂いが、一年に正月と盆の二回に行われることによつても、この都會がまわりの田舎によつて立つてゐることが明かにされます。

また越後平野の東部をなし、北蒲原きたかみの平野の中心に立つてゐる新發田町しんぱつだの朝市をみても、そぼくな姿をした農夫や農婦たちが、僅ばかりの薪や炭を背負つて來て、それを必要な雜貨やその他の日用品と代えてゆくことで、都會とまわりの田舎のかんけいかんけいが明かにわかります。

新發田町の西方二里ばかりにある葛塚町くつつかは、汽車のまだ通じなかつた時には、新潟から運河うんがを通る河汽船の發着所であつただけに、まわりの田舎からの旅客や貨物の集散地として賑かな町でした。宿屋も河岸近くに多く、大きな呉服店もありましたが、しかし河汽船が頻繁ひんぱんに通わないようになつた今日では、宿屋はなくなり、大きな呉服屋は倒れ、町を通つてもなんとなくがらんとした感じだけが残つてゐます。今までのように、家に坐つておつただけでは、もとの商賣を保つてゆくことが出來ないので、

葛塚の商人は、まわりの田舎のうちで、日歸りの出来るような村々へ行商ぎやうしやうにゆくようになりました。

わたしは、新潟市にいがたから長岡市ながおかに赴く汽車の中で、番頭らしい若い人達が、呉服物らしい荷物をせおつていゝのを見て、長岡の商人も、また行商をすることの多い事を知つたのです。

都會とまわりの田舎のかんけいは、多くの場合、まわりの田舎から出る農作物の數々が、その中心である都會に住つていゝ人たちの食物となり、また工業の原料となつたりします。中心である都會でつかいきれない農作物は、更に他の都會へと賣り出されてゆき、また都會の人たちは、まわりの田舎の人達の必要な雜貨や呉服物などを商つたり、まわりの田舎の人たちを相手に醫者や宿屋などを開業したりします。つまりまわりの田舎が田場所であると、製米所が出来るし、養さんの盛んな所であると製絲場が出来るといつた譯です。

都會のまわりの田舎のはんが廣ければ廣いほど、都會の商業が盛んになります。

都會の産業の種類が多ければ多いほど、住つていゝ人の數も多く、まわりの田舎で出来る農作物は、中心である都會の食物として多く費され、また都會の工場などは多くの人手が必要なので、まわりの田舎からは、二三男の若者や娘たちがそこに雇われてゆくことになります。

こればかりでなく、田舎の人たちもまた都會の人たちも、自分たちの住んでいゝ手近の都會と田舎について具體的に考えて見ることが必要です。

前に郊村のところにも述べておきましたが、小さな都會とまわりの田舎はどういゝかんけいにあるか、また大きな都會と、そのまわりの田舎はどういゝつながりがあるかを比べてみると、一そうそれがはつきりするでしょう。

都會の型

わたしたちは、これまでの文章の中で、田舎のどのような處に都會が芽生えるか、また都會でも市場町とか港町とか城下町とかで、それがどういふふうな地理的位置に發達したかということを學んで來ました。奈良でも京都でも大阪でもまた鎌倉や江戸でも、更に新しい神戸や横濱でも、みなそれぞれの理由からその位置に生い立つていくことがおわかりになつたでしょう。

これらの都會の數々は、行政上からは町と市とに分れ、人口の上からは千人足らずの小さな町から百萬以上の大都會をも含んでいます。従つて大きな都會ほどそこに住んでいる人たちの職業の種類は複雑で、大きく分けると農業・水産業・鑛業・工業・商業・交通業・公務自由業・家事使用人ではありますが、工業などは十四にも分けられるほどに複雑です。これは私たちの身のまわりの都會の有様からもおよそわかりますが全國の都會の人たちのもつてゐる職業が都會によつてどんな割合になつてゐるかを研究し、その上に身近の都會を調べて見るとそれが一そう明かになります。

昭和十六年に、東京大學の工學部を出られた内田正司という若い學者は、昭和五年十月現在の國勢調査に現われた都會(人口二萬から三十萬まで)百の市につき、住民の職業分類即ち農・工・商・交通・公務自由などに従事してゐる人たちの割合の多少により、

一、農型 二、工型 三、商型 四、交通型 五、公務型 六、平均型

に分けてその特色を説明してゐます。この研究はわたしたちが都會を調べるのに非常によい目安になりますからここに皆さんと一緒に全國の都會がこれらの型に屬してゐる數々を調べて見ましよう。

一、農型 これに屬する都會は、北海道の釧路、青森縣の八戸、静岡縣の清水、長野縣の上田、岡山縣の津山と倉敷、宮崎縣の宮崎と都城、大分縣の中津などで、商工業を職業とする人たちの割合が公務自由業に比べると多く、商業と工業を比べて見ると商業の減つてゆく割合が工業よりも少ないのです。

二、工型 主なる所は、群馬縣の桐生、東京都の八王子、三重縣の四日市、富山縣の高岡、福島縣の郡山、大阪府の岸和田、兵庫縣の尼ヶ崎、山形縣の米澤、栃木縣の足利、愛媛縣の今治、岐阜縣の大垣など、一般に他の型の都會よりも公務自由業・

農業・家事使用人の割合が少なく、商業は左程減りません。

三、商型 奈良、水戸、佐賀、松江、鳥取、大津など何れも縣廳所在地で、そこには公務自由業の割合が六の平均型の都會より著しく高いばかりでなく、商業との密接なかんけいかんけいが認められます。また交通業を營む人達が工型の都會より高率であることに注目すべきです。家事使用人の割合が六つの型の都會の中で一番高いことは商店の多いこととかんけいかんけいをもつています。以上六市の外に群馬縣の高崎、静岡縣の沼津、大分縣の別府、大阪府の西宮、岡山縣の尾道などまたこの型に屬します。

四、交通型 福岡縣の若松と戸畑、北海道の室蘭むろらんの三市に過ぎません。この型の都會は工業の振否が職業の割合にえいさえいさようするばかりでなく人口の増加の率もそれと密接なかんけいかんけいをもつています。

五、公務型 山口、千葉、秋田、大分など何れも縣廳所在地で、外に青森縣の弘前ひろさき、新潟縣の高田、香川縣の丸龜があります。商業や農業を營む人達の割合が平均型よりも多く、公務型に屬する縣廳所在地が、商型のそれよりも商業に従事する人達の割合の少ないことは、それらが典型的な役所町てんけいであるためでしょう。

六、平均型 平均型というのは、百の市の住民の職業即ち農・工・商・交通・公務などに従事している人達の割合の平均を意味することで、それに近い都會は、福島縣の福島と若松、山形縣の米澤、新潟縣の長岡、埼玉縣の川越、三重縣の福山、鳥取縣の米子よこ、愛媛縣の宇和島などです。

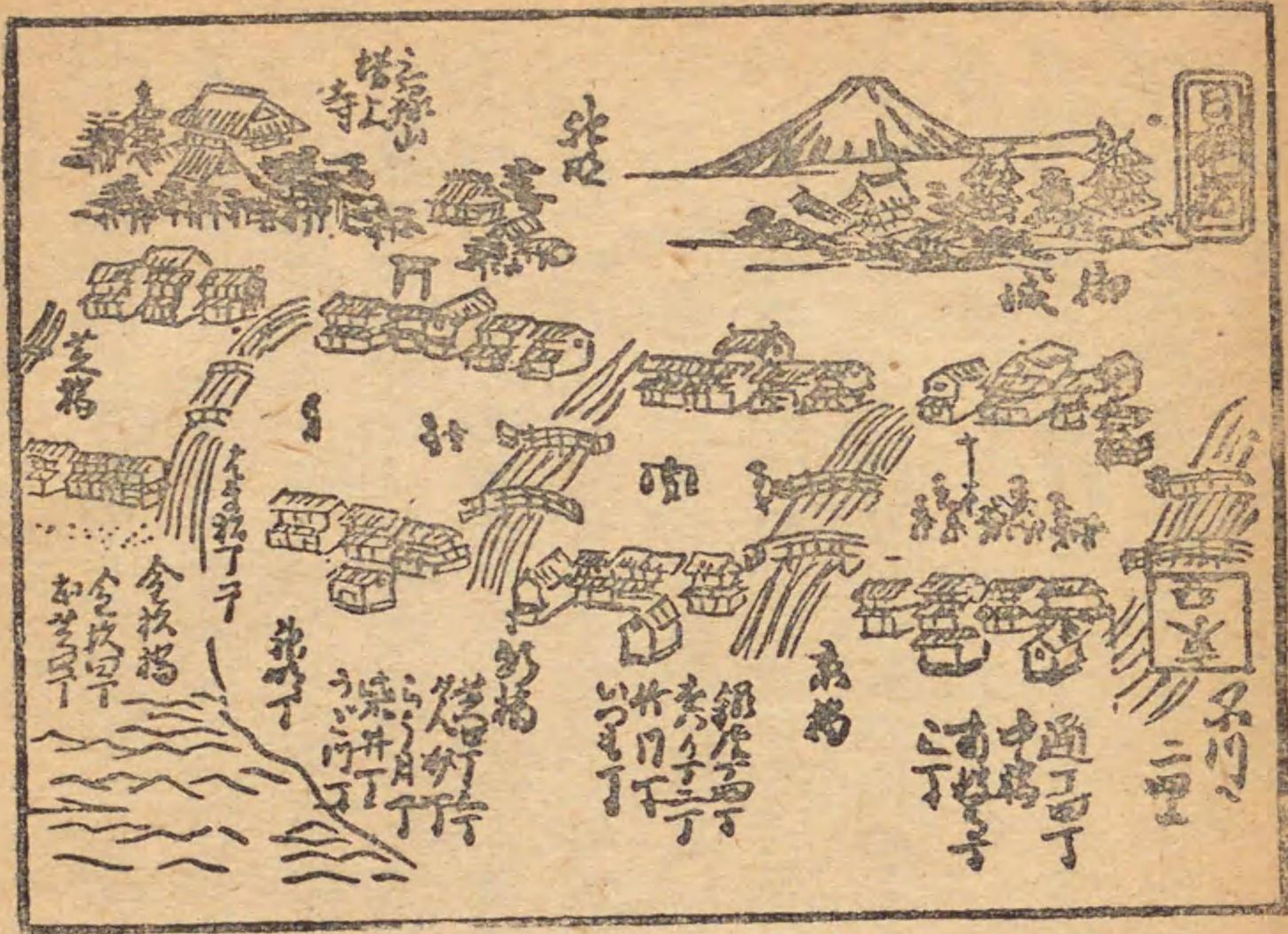
都會の位置

町にしても市にしても、大きな都會のある所は、どういふ所でしようか。

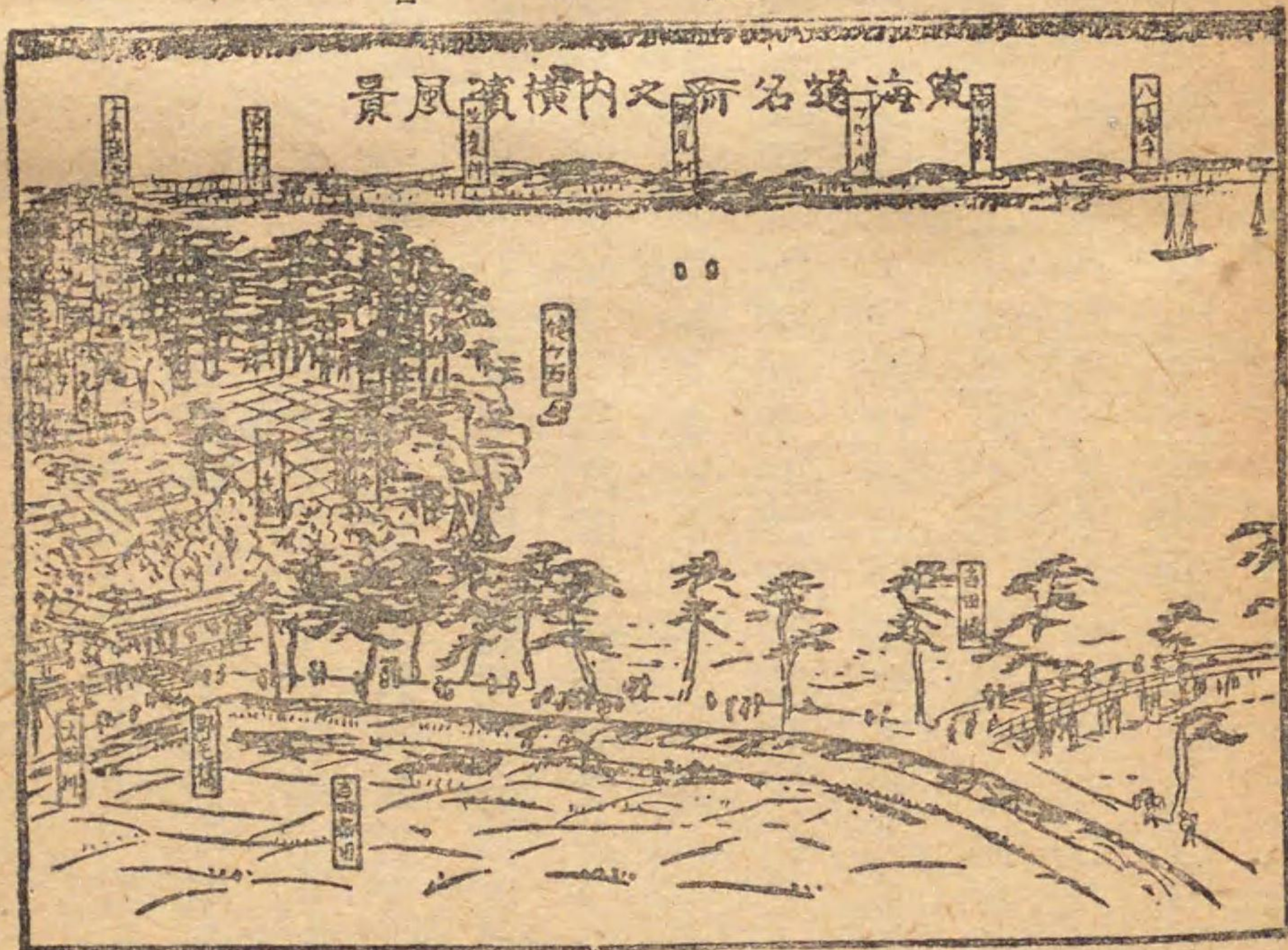
地圖によつて、大きな都會の位置をよく見くらべて見ると、大きな都會の位置はたいていは、廣い平野の中にあるとか、大きな川口にあるとかまた交通の中心點にあるとか、地理的に大きな都會の出來るにつごうのよい所にあるようです。

フランスのムーロームーローという博士は、ヨーロッパの都會の位置について、次のようなことをいつていますが、もつともな言葉であると思ひます。

『都會の位置は、事實、偶然な出來事や有名な建設者の勝手な計畫で決定されるものではない。その位置は土地の自然の狀態に支配される。私達は住民のまだおらない土



昔の江戸



昔の横浜

地の地圖を讀みながら研究していると、その土地の人口が一定の密度に達する時には、どこに都會が出来るか^{あらか}を豫^{あらか}じめ決定することが出来るであろう。人間を集めるのに一番有力な地理的位置は、交通を容易にする海とか、利用し得る河流とか、平野と山地との出會つてゐる所とか、その他種々な地質で鑛物などの出るような所である。』私達は、この地圖について都會の分布をみると、ムロー博士の説のように、第一に目につく所は、關東平野の西南部、ことに東京灣から相模わんにそうてゐる所に大きな都會が多く分布してゐることを見出すでしょう。

この關東平野は、本州、四國、九州を通じて一番廣い平野であつて、その大部はだ、い、地と低地から成り立つており、だ、い、地は畑に、低地は田に利用し得られるから、昔から農業上の適地になつてゐます。こゝは畿内^{きない}の奈良とか京都とか大阪とかの附近の平野よりは開け方が遅れて^{おそ}いますけれども、源頼朝^{みなもとのよりとも}がこの平野の相模わんにそうてゐる鎌倉に幕府を開くようになったから、その部下の武士達が、所々に居城をおくようになったので、だんだん開けて來ました。

ことに江戸は、太田道灌が江戸城を築いてから、江戸宿といつて都會になりまし
た。その後徳川家康が幕府を置き、三百年近くも政治の中心となつてからは、この平
野が、新に數多の城下町を中心として發達し、村々が多くなるにつれて、その中心地
となる都會も多くなり、ことに徳川時代になつて、江戸を中心とする五街道、すなわ
ち東海道、中山道、奥州道、甲州道、日光道が、幕府の直轄として開かれるようにな
つてから、この交通路にそつた數多の都會は、旅客の往來や貨物の運送のために、更
に宿驛としての發達を見るようになったばかりでなく、從來は田舎の農村であつた所
までも新に宿驛となつて都會に發達したところも少くありません。

ことに明治時代になつて、帝都が京都から江戸にうつり、江戸が東京となつて、こ
ゝが全國の政治、教育、學藝の中心となるようになり、それにつれて商工業もまた盛
んになり、從來あつた地方工業の他に、大規模の工場も出來たし、商業も全國を相手
とする大きな商業組織となつて、その商品を取り扱う問屋も多くなつて來ました。そ
れに横濱が新に開港場となつて、いつそ東京の外港の働きをも勤め、この二つの大
きな都會のまわりには、大きな町々と多くの郊村とが發達するようになりました。そ
してこの大きな二つの都會の成長は、そのまわりに多く町や郊村を新につくつたばか
りでなく、氣候のよい、また風景もよい相模わん岸に、新に保養地として、多くの小
さな都會が生れるようにしたのです。

私達は、地圖を開いた時には、いつでも、見るという考えよりも讀むという心にな
ることが大切です。すなわちわたしたちは、まずこゝに掲げた關東平野のちようかん
圖を開き、まず一番都會の多く分布している關東平野の東南部、すなわち東京都から
横濱市までの附近を讀んで見ましょう。そしてさらに關東平野の西北部をなしている
部分が、山地と出會つている所に、都會の多いことを讀みとることです。それにつけ
ても、わたしたちはこの地圖の中にも前に述べたムーロー博士の所説を裏書きする事
實を見出すのは、喜びに堪えないことです。

次にわたしたちは、都會の分布の多い所を、大阪わんを抱いている畿内平野に見
ることが出來ます。奈良の盆地と琵琶湖畔から淀川の流域にかけての大阪わん岸一帯
の畿内平野は、ともにわが國の歴史に最も由縁の深い土地で、神武天皇が都をさだめ

られたか、わ原を始め、奈良、京都、大阪など、明治になつて、東京に都をうつされるまで歴代の大宮處おのみやどころのあつた所なので、神社や寺院や史蹟しせき名勝が多く、村々のはやく開けているさまも、汽車の窓からでも理解されるほどで、全國を通じてわが國の歴史を思い起させる土地です。

従つて徳川幕府は、この由縁のある土地の都會を特別に重要視しました。すなわち京都には所司代しよしだいと町奉行まちぶぎやうを、奈良と伏見には奉行を置きました。大阪には城代じやうだいと町奉行を、堺さかいにも奉行を置き、なほ山田の奉行は、伊勢大廟いせたいびやうを初め、伊勢志摩いせしまの沿海をも取りしまるようにしてしました。

これらの都會の中で、今日でも、一番大きな都會に生い立つたのは大阪です。この大阪が日本の港として盛んになつたのは、豊臣秀吉が城を築いて、堺を初め諸方から商人を集めて町を作つてからで、續いて徳川時代に各藩の物産の交易こうぎの中心になつた當時に芽ばえをもつています。今日では綿絲、紡績ぼうせき、綿織り物などの工業が盛んに行われ、煙突が多いので『煙の都』と言われているほどですが、東京都に對して横濱港があるように神戸港こうべが開かれるようになって、いつそこの大阪の商工業が國內的から

更に國際的にまで進むようになりました。大阪のまわりには、たくさんたくさんの町々があり、その住民の保養地、遊覽地というものが、東京や横濱附近よりも遙かに發達しているのは、もちろん由緒ゆいじよある神社や寺院や史蹟の多いことに因るでしょうが、關東平野に比べると、一年を通じて、大部分氣候のよいことも、またその原因であらうと思われ

ます。都會の位置は、東京とか大阪とかのように大きな都會でなくとも、調べて見ると、それぞれそこに生い立つた理由があつて、そこに位置するようになっていきます。ですからわたしたちは、たとえその目的が現在の都會の様子を調べるのにあつても、その出來はじめの原因から、出來上るまでの生い立ち、またその位置を明かにするように努めなければなりません。現在目の前にあらわれている都會の複雑な様子だけに見とれて、その位置についてはつきりした知識を持つことを忘れては、その大小について、その生活について、その風景について、いろいろのことを知つてあつても、それは砂の上に立てられた樓閣ろうかくのようなもので、都會についてのしつかりした知識にはなりません。

城がもとになつて生い立つた都會、港がもとになつて出來た都會、神社とか寺院とかいもとなつて都會らしくなつた都會、このように分けて考えて、これらの都會がはじめて出來たところから、どんなふう^いに現在のよう^いに大きくなつて行つたかを、その位置の上からしよう^いこ立てようとするのが、都會の位置についての研究です。

都會の位置の研究は、常に地圖について行われなければならないもので、たとえ粗末な地圖でも、その都會の地圖を讀みながら、都會として、芽をふいた時の位置から、生い立つていつたあとを地圖の上で調べ、最後にその都會の現在の位置を明らかにすることが必要です。それによつて都會の大小や生活や風景のよつて來るところが明らかになり日本の生立もそれによつてはつきりするのです。

都會の生活と風景

田舎に比べると、都會はすべての事物が複雑です。この複雑な都會のあり様を、出來るだけのはつきり理解するには、どういふことをその目安とすべきでしょうか。

都會の大小を明かにし、その位置を確めたわたしたちは、更にそこに營まれている生活と風景のほんとうの姿をつかまなければなりません。この生活のほんとうの姿は、都會の古さと、その産業と交通の特色を調べることや、人の動きを突き止めることによつて、明かにされます。また都會の風景というのは、その大小や、その位置、その生活が、まとまつて、私達の目の前にあらわれている都會の姿そのまゝの總稱です。都會の背景をなしている山のりんかくも、都會の眞中を流れているうねうねした川筋も、社とか寺とかの建て物の形も、大通や停車場の群集も、工場の煙りも、みな都會の風景をつくつている一つの要素なのです。その生活の複雑さも、人の氣質のよなもの、都會の型によつて各自その趣を異にします。たとえば農型とか公務型に

屬する都會は、工型とか商型に屬する所よりは何處となく落付いておりまた活氣がないように感じられる所さえあります。それに比べると、商型や工型の都會は、商業とか工業とかの上に現われる活き活きた氣風とか生活とかがうかゞわれます。しかし、商業とか工業とかによつて、あらわれる氣風とか生活とかは、短かい時間で旅行しただけで分る所もありますし、また分りにくい所もあります。殊に奈良のように古い都會の商業と新しい横濱とか神戸とかの商業を營む人達の氣風と生活とは著しく違ひますから、同じく商型といつても生活の上から見るとそこに著しい差がみられます。また商型と公務型にあげられた縣廳所在地の商業の營み方や生活の様式には役所町らしい商人氣質が見られるということも商型の特色です。工型に屬する桐生とか八王子とか米澤とか足利とかの機業地で行われる商業の仕方と、新しい工業の起るにつれて工場などの多い都會の商業の遣り方にも自から差異が認められます。それに比べると、工業の振否や人口の増減が交通業の興起と密接な關係ある交通型の若松とか室蘭などに行われる商業上の動きは、他の都會に見られないほどの活況や變化があります。

このような生活の營みの複雑な都會の風景は、田舎の風景として前に述べた田、用水路、畑、裾野、橋、渡し場、水車場、並木、道しるべのように單純な記述によつてはここに書きつくすことは出来ません。けれども都會の位置や型や生活、それらがまとつてわたしたちの目の前にあらわれる都會の姿こそ、都會の風景なのです。このような都會の風景は、徳川時代の廣重ひろしげの繪の中にもあらわれて來ますが、敗戦後の今日ではそれが一層切實な情景としてわたしたちの生活につながりを持つています。それですから風景という意味を田舎の特有なものと狭く考えずに、寧ろ都會の中にもいろいろの風景の動きを見出すことによつて、それらの中から都會の人たちの努力や、生活の様式が、田舎の人たちの努力や生活と共に、國の再建を築きつつあることを深く知ることです。

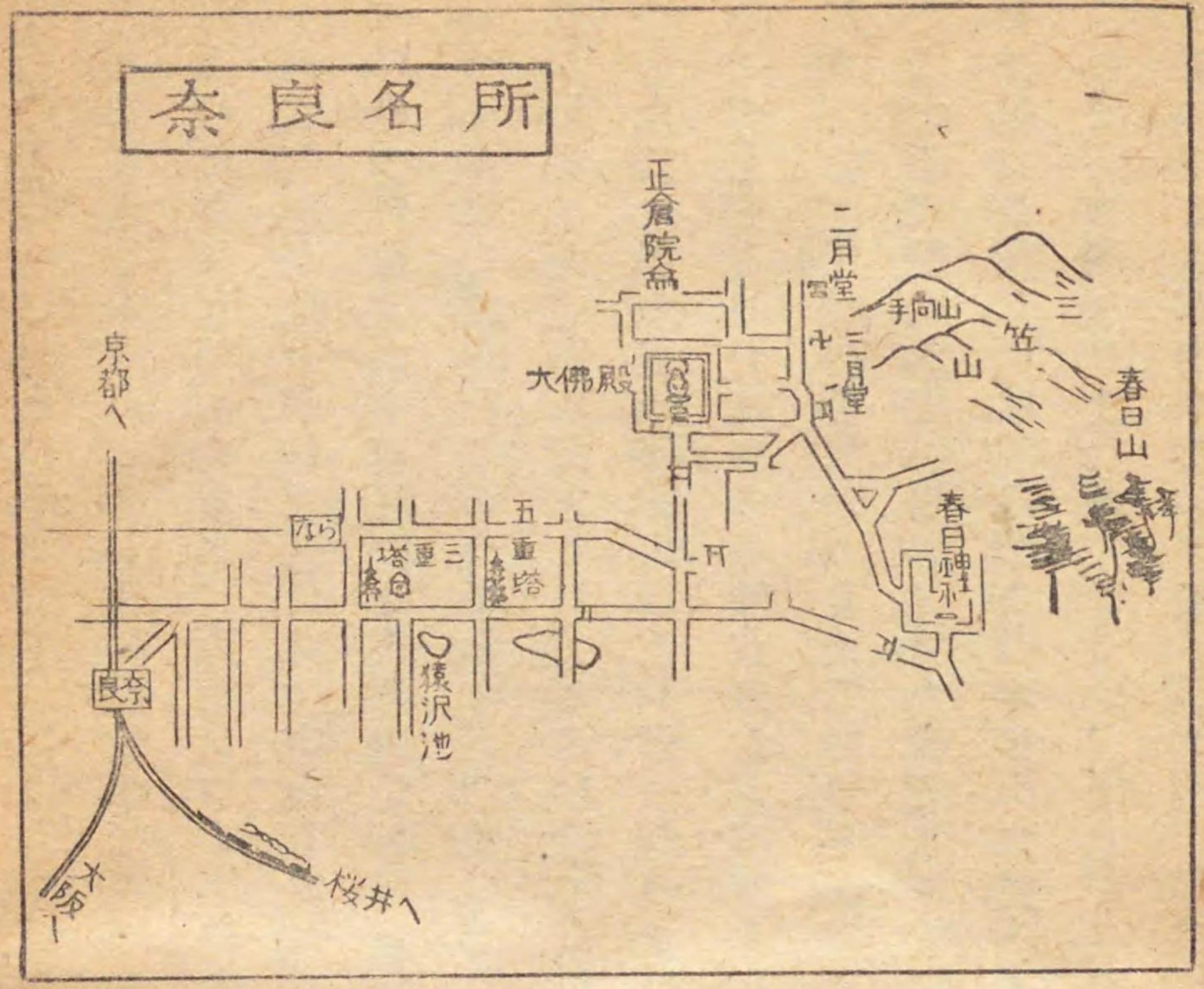
都會の古さ

どんな都會でも、今日都會として生い立つているものは、いずれも年月のたつうちに、どことなくその古さがその姿の上にあらわれていきます。——その山水の風景に

も、その樹木の姿にも、またその生い立ちに囚^なんだ神社とか寺院とかの建物や、その境内のいろいろの遺物や遺蹟^{いせき}にも、都會の古さが浮び出るようにならわれてきています。その一例として話せば、奈良とか京都とかいう古い都會になると、それが一層鮮かにあらわれています。わたしたちは、こゝに奈良と京都について、都會のふるさをしのんでみましょう。

大和の奈良は、古い歴史をもつていて、歴代の宮あとか御陵墓^{ごりょうぼ}とか神社とか寺院とかの多い奈良盆地の北西隅に位していて、七代七十餘年間平城京のあととして知られています。

この地圖で見ても分るように、今の奈良市は、昔の平城京の左京の東の方に位置しています。この奈良の東の方には一帯の山地が続いて、阿部仲磨^{あべのなかまろ}が、支那に留學していた時、明月を眺めては、この故郷のことを思い出して「三笠の山にいでし月かも」といつた三笠山は、藤原氏の氏神として名高い春日神社^{かすが}のある春日山などがあります。わたしたちが、この舊都を見ようとして、奈良市の西方にある奈良驛で下車し、



奈良名所小圖

真直に東の方に大通りをゆくと、その行く手に見える森は、木立ちの繁つているこの春日山であり、その左の方には芝生ばかりの三笠山が連なつています。この異つた二つの山の姿は、幾度も奈良を訪れるたびにいつもわたしの目標となるのですが、恐らくは奈良を訪れる誰でも同じことであろうと思われます。

わたしは、いつでもまず春日神社に参詣して、あのあかい兩側の廻廊^{かいろう}と、そこにつるされてある釣り燈籠^{どうろう}と、参詣道の兩側の苔むし

た石の燈籠とに見とれるのです。しばらく境内のこの静かな風景に見とれていると、どこからとなく清涼の氣が身に迫つて來るのを感じます。仰げば幾百年もたつたかと思われるような杉の大木が、天をもつくかのように聳えています。

わたしが奈良を訪れた時には、奈良を始め近畿の諸學校の先生たちと、半日この春日神社の背後にある春日山に上る機會を得たのですが、今は天然記念物として保存されているこの神山にはいつてみると、まったく太古の森林の中をあるいているような氣がしました。そしてところどころに立てられてある火の用心の杭を見て、わたしたちも永久にその森の保存されるを願つたのでした。頂き近くの廣場からは、奈良盆地の一部とそこにある昔の平城京のあとが廣く見下ろされます。私は、この光景に見とれながら、千餘年前にわたしたちの祖先が、この都をたてるために大きな計畫を行つた努力を、幾度か思い出し、また感謝する氣持になりました。わたしは、奈良の古都を訪れる人々には、必ずこの春日山に登ることをすすめます。奈良の町で、人臭くなつてゐる所を見まわるだけでは、ほんとうにこの古都の生い立ちなり、姿なりを見きわめることが出來ないと思ひます。

春日山を下りてから、その山麓の春日野公園をぶらぶらすると、春日山を背景としてゐるこの公園に、一面の芝生でところどころに高くそびえている大きな杉や一位檜の特別なおもむきのある姿によつて、他處で見られない風景があらわされています。この風景があればこそ、神鹿の群も畫中のもとなるのです。

歴史、美術、工藝の三部に分けて陳列してある奈良の舊博物館も、聖武天皇の御遺愛の貴重品を納めてある正倉院も、東大寺の本堂である大佛殿も、またありし昔には宏大であつた興福寺のおもかけをとめてゐる北圓堂や五重の塔も、三笠山や春日山とあわせ見ることによつて、古都としての奈良の姿が明かになるのであつて、それが奈良特有の風景であり、またゆるらんな地としての、奈良の生命でもあります。

このように古都は、その風景や歴史的の遺物や遺蹟に、いづれもその古さをあらわしています。その家構えとか什器などの生活の様子などにも、なんとなく古都の古さがしのばれるような氣がします。

奈良驛から公園までの通りは、奈良市でも一番にぎやかな所ですが、大きな旅館と、名物の奈良人形や鹿角細工などを賣る商店が、軒を並べて旅客を呼んでゐるのも、こ

の古都の一つの特色です。

しかし奈良の都の古さは、奈良市の西方にある平城京の内裏あとの森や大極殿あとの芝生や七大寺として数えられた西大寺やぼだい寺や薬師寺を観ることによつて、一層床しさがしのばれます。このようにして舊都の遺跡をさがしまわつてみると、東南方にあつて、奈良盆地の平野の向うに、よく『萬葉集』に出てくる、うねび山とか耳無山とか香久山とか、繪にかいたように眺められ、それが一ぞうこの奈良の古都を風景づけています。

奈良からはやゝ離れてはいますが、その西南にあたる法隆寺は聖徳太子の建立であつて、その建築が、わが國での指折りの古い建築の標本であるばかりでなく、その壁畫もまた有名なものです。またその夢殿には、聖徳太子の等身の像が置かれてあるので、奈良の舊都を訪れる人達の必ず參詣するれい場の一つとなつています。

奈良市とそのまわりに開かれてある風景と、その間に残されている遺物と、神社、寺院等の遺蹟に、また現在その間に生活している人達に、古都の舊さを探ることが出来るが、私達は、昔の祖先が、このように田舎をつくり、またその中心として都會

を築くために費した多くの骨折りを見るにつけても、新しく生い立つてゆくわが日本の將來のために、田舎をつくり、またその中心として都會をも育むことに努めなければならぬでしょう。奈良の都とそのまわりの古さをかえりみて、古い美しさばかりあてがれることは、この古さを残した私達の祖先の志にそつものではなと思ひます。

京都は、七十餘年間都であつた奈良が、手狭になつたといつので、桓武天皇が新都をうつされた所ですが、やはり盆地ですから、南の他は山地に圍まれています。ことに、比叡山のある東山の山地は、京都を見下すように京都に迫つています。「東山三十六峰」とか、

蒲團着て寝たる姿や東山

などというのは、京都に近いこの東山連山の姿を歌つたもので、京都驛の東方に當つて見えるこの東山は、瓦屋の重なり合つてある京都市の背景として、京都を特色づける一つの風景です。この山の根に近い京都市の東部を流れるかも川岸からは、この東山の殆んど全景が見られるので、かも川岸は昔から京都での一つの名所となつていま

した。夕納涼ゆふすまみはことに名高いもので、『日本外史にほんがし』を書いた頼山陽らんざんやうは、このかも川岸から東山を望むところに居をかまえ、『山紫水明樓さんしすいめいろう』と名づけていたといわれている。また、京都は山青く水の清らかな、そして空気の澄んだ風の弱い、萬事落ちついた別天地です。

また、京都の近郊は東山の他にも風景の美しいところが多く、ことに桂川かつらにそうている嵐山あらしやまの邊はかも川と違い、山はそばだち水はゆたかに、眺めは狭いけれども、實に山水明媚さんすいめいびという言葉を目のあたりにあらわしています。

私は、かつて嵐山の上の大飛閣たいひかくに、妙心寺みょうしんじにおられる親しい禪僧ぜんそうと、もに、茗茶めいちゃを啜りながら京都を見下し、また比叡山ひゑの上から琵琶湖と京都の盆地とを見比べたことがありましたが、京都の地勢は、いかにも昔桓武天皇が言われた「山河襟帶かたのせみづの地、自然の城廓じやうかくなり」という言葉の意味に、すつかり當てはまつていることが高い山地から展望てんぼうによつてよくうなずかれました。

東、北、西の三方を取り圍んでいる山々の麓には、東には泉涌寺せんゆうじ、知恩院ちおんいん、南禪寺なんぜんじ、清水寺しみずじ、銀閣寺、北から西にかけては、上賀茂、下賀茂、北野、建勳たけいさおの諸神社と、仁

和な、大覺だいがく、妙心、天龍、金閣の諸寺が、あちらこちらに散ばつておつて、これ等の社寺の建築や築庭は、その所藏の佛像や什器や圖書としよと、もに、日本の歴史、宗教、工藝などの特色を物語るよい材料ですから、わたしたちは、京都の近郊を散歩することによつて、奈良よりも、もつと大仕掛けな日本の古い都會の風景と祖先の残した仕事のあとをたどり得るような氣がします。

京都の町の中でも、北の方の上京かみきやうの中には、御所を始め、廣い境内と特別な構えをしている大きなお寺や神社が、ところどころにあつて、その他にも昔風の大きな邸宅が多いので、他の都會に見られないなんともいわれぬ静けさと落ちつきとを示しています。

なお京都の町の内、私達の見逃してならないものは、そこからつくり出された工藝品の數々です。西陣にしじんあり、友禪ゆうぜんぞめ、清水しみずやき、粟田あわたやき、まきえ、扇子、短冊たんざくなど、このように名稱をかきつらねるだけでは、京都特有の工藝品という感じは起りませんけれども、京都風に意匠いしやうをこらしている店々のかざり窓に、このような工藝品が、色においても形においても、おもむきのあるものがならべられてあるのを見ると、わ

たしたちはどことなくゆうがな京都の特色がそこに浮んでいるような気がします。

川の少ない奈良の盆地では、ゆたかな水の色を見ることが出来ませんが、京都に来ては、かも川でも、保津川でも、またこれらの川からひいた用水が町の中を通っている様子にでも、また近年琵琶湖からひかれた運河の水にでも、流れる清い水の姿とおもむきとを見られるのは、京都の風景が奈良にまさる一つでしょう。ことに、京都市の南の端に、琵琶湖から出て来る宇治川が流れ、またこの三つの川の流れが合う所に、河港淀が生い立っていることは、京都という都會の舟運を考えさせられるばかりでなく、昔の要害として宇治川に因んだ戦争—宇治川の先陣—とか、また水郷としての風景—舟遊びと螢狩り—とか、史蹟—平等院—とか、川に因んだ多くの風景が眼前に浮んできます。

すべて古い都會は、新しい都會ほど年々生長してゆく力はありません。しかし古い都會をよく見ることによつて、わたしたちは、祖先の都會を作り上げた骨折りと、都會の生い立ちを知ることが出来るばかりではなく、古い都會をよく知ることが、また新

しい都會の生い立ちをも理解するかぎを握ることになります。此度も古い都會としての京都、奈良が戦災を受けずに焼け残つたことは、その意味では大變幸なことでした。

大都會における人の動き

どんな小さな都會でも、今日その都會に住っている人たちの生れ故郷を尋ねて見ると、たいていは、その町に生れずに、他の村や町から來ている人たちがずいぶん多いものです。それが大きな都會になればなるほど、その数が大きくなるし、またその出入が激しくなります。

私は昭和五年に時の内閣で人口食糧を調査した時、五六縣の都會の人口を調べていますが、町々にはその町の人口の出入りを詳しく調べたものがないので困つたことがあります。五六縣の都會の中で、茨城縣の土浦町という所だけでは、昭和二年十月の一箇月間で、町に住っている現在人口について、その生れ故郷を調べたものがありましたから、その結果をこゝに擧げて見ますと、左のわりあいで、よその人たちがこの町にはいつて來ていることが明かになりました。

農業を職業としている者

百人のうち四十人

商業を職業としている者

百人のうち四十九人

工業を職業としている者

百人のうち五十二人

水産業を職業としている者

百人のうち五十人

その他を職業としている者

百人のうち六十三人

土浦町は、茨城縣では水戸市に次ぐ都會で、近年人口の増加するわりあいの多い都會ですから、わたしたちは、この都會にはいつている人たちのわりあいを見ることによつて、わが國での中位の大きな都會では、どれくらい他處から人がはいつて來ているかを見る目安とすることが出來ると思ひます。

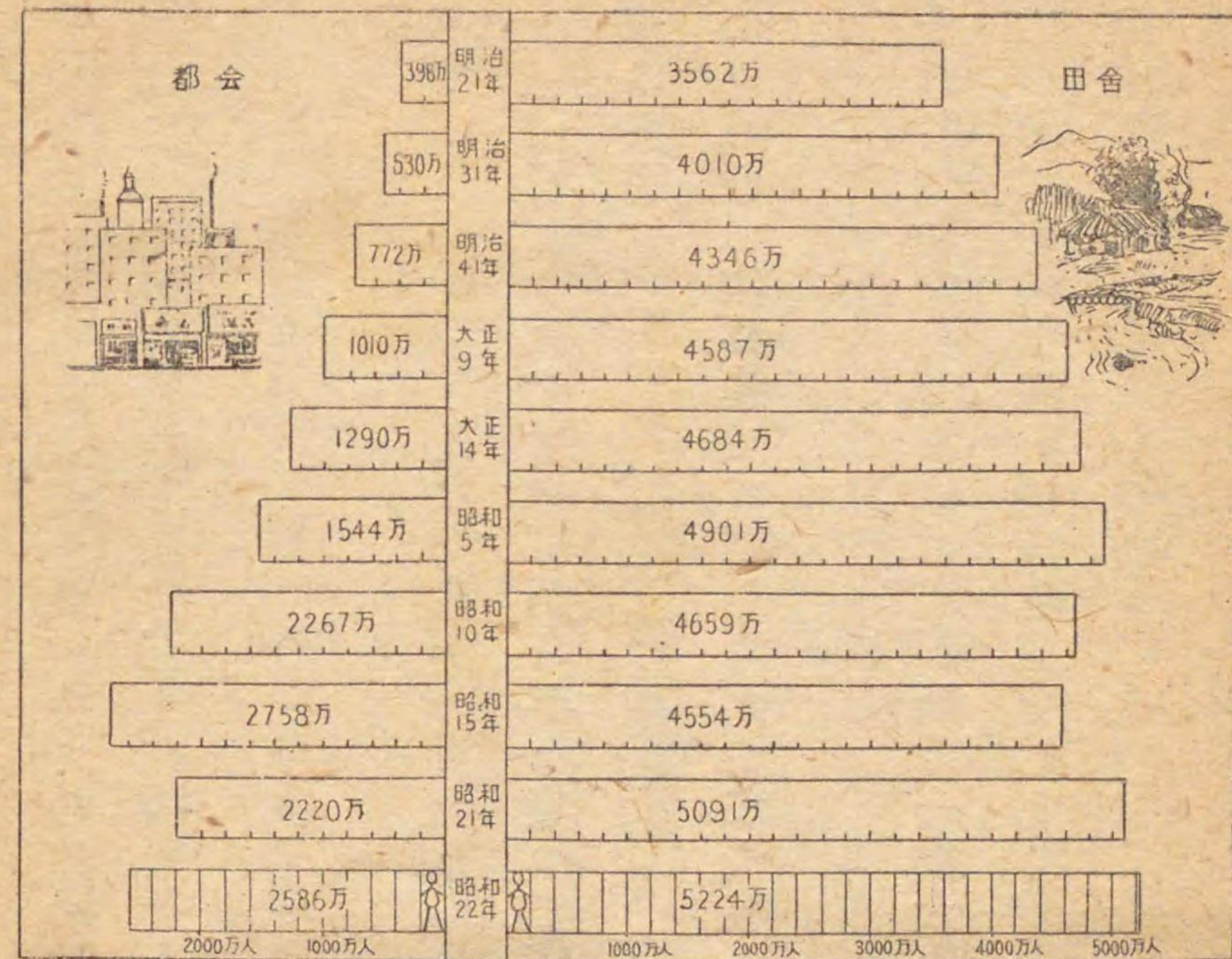
このように盛んになりつゝある都會に集つて來る人たちは、大體二つの種類に分けることが出來ますが、その一つは、何か一つの職業によつて、自分の身を立て、またそれによつて家族達を養ふという、いわゆる働き盛りの人たちであり、これに次いで、何か一つの職業を習つて身を立てる基を築こうとして、丁稚奉公ていぢほうこうに來る人たちで

す。これらの人たちの年齢の上からいへば、十五歳から五十九歳までの間が多いようです。この十五歳から五十九歳までの間の年齢の人達を生産年齢級人口とよびます。それはこの年齢の人たちは、どんな職業をもつておるにしても、一番働き盛りであるからです。

都會のうちで、どんな都會が一番大きくなつてゆくかといへば、土浦町におけるりゆうと同じように、村や町から年々集つて來る人たちが多い所です。しかもその集つて來る人達は、たいがいは生産年齢級の人たちであり、また生産年齢級の人達によつて養われている家族達です。したがつて大きい都會ほど、人口の増加してゆくわりあひも大きいのです。

それではわたしたちは、わが國で一番大きな都會である東京都と、これに次ぐ大阪市についてその人口の動きを見ましよう。

東京都がまだ市であつた頃の人口は、大正九年の國勢調査こくせいちょうさの當時は、二百十七萬餘に達しましたが、同十二年の大震災のために、十四年の國勢調査の際には百九十九萬



人間1人の幅(200万)

年次	全 國	市 部	郡 部	全國人口に對する市部人口の割合
大正 9	55,963,053	10,096,758	45,866,295	18.0%
14	59,736,822	12,896,850	46,839,972	21.6
昭和 5	64,450,005	15,444,300	49,005,705	24.0
10	69,254,148	22,666,307	46,587,841	32.7
15	73,114,308	27,577,539	45,536,769	37.7
22	78,101,473	25,857,739	52,243,734	33.1

餘、すなわち大正九年の九割二分に減じました。しかし復興に伴つて漸次増して、戦前の東京都になつたのです。

しかしわたしたちは、ほんとうに大都會としての東京都の發達を見ようと思えば、東京都をめぐっている近郊町村の人口増加をもあわせて見なければならぬのです。これらの近郊町村の人口は都の中心地のそれと近い數を示していますが、その増加してゆくわ、あ、いを見ると、東京都の時代でも都心の方は、まだ大震災當時の數に達していない頃に、近郊町村の方は、二回の國勢調査の期間に七割八分の増加を示しています。それですから、東京驛前を中心としての大東京圏、すなわち東京都とその近郊町村とを含めた圈内の人口は、以上の二期間に二割三分に近い増加のわ、あ、いを示していることとなります。

このような近郊町村の人口の激増は、直ちにそれが、住居の密集となつてあらわれて來ます。ことに東京都に接續している町において、それが著しく目に立ちます。わたしたちは、東京驛から發着するいわゆる省線電車に乗つて、沿道の接續町に於ける

住居の密集している様子を見ただけでも、それが明かにされるでしょう。ことに、朝の出勤時間の各驛の乗客、また夕方の退出時間の降客が、まるで、蜘蛛の子のように集散する状態からしても、これをしよう、こ、立てることが出来ます。

また接續町を始め、その他の近郊町村の人口の増加にうながされて、その需要をみたすために、新にあらわれて来るものは、日用品を賣る商業地の繁昌と、交通機關の發達です。すなわち商業地としての、省線の澁谷驛附近、新宿驛附近、池袋驛附近などは、東京都の中心地と同じ賑かさを商業の上に見るようになって來ました。また交通機關としても、それらの三驛はもちろん、その他の諸驛に於ても、私設の電車や自動車の開通がすべてのものの上にスピードを増して來ました。

このように、東京都に接續している町々は、その人口の増加につれて、商業地の繁昌と交通機關の發達を見、日々それによつて、幾千幾萬の人口の出入と集散の動きを示しています。また、隅田川にそうている工場の多い町々と、武藏野に續いている住宅地の多い町々とによつて、そこに住む人たちの職業に、また風習に著しい相違のあ

ることを考えてみなければなりません。

東京都に限らず、大きな都會の發達は、人口の増加によるその大きな群集が、産業の進歩と交通機關によつて、年一年と形造られてゆくのです。

大阪市は東京都に次いで大きな都市です。しかし東京都は徳川時代から政治が中心となつて發達した都會であるのに、大阪市は商港としての特色が主となつて發達した都會であり、それが今日でも、この大きな都會を發達させる基となつていますから、東京都について、大きな都會における人口の動きを見たわたしたちは、大阪市についてはことに商港としての人々の動きを見てみましょう。

大阪港は、畿内の平野を流れて大阪わんにはいる淀川の河口の洲に生い立つた町で、「津の國」とか、「なにわの津」とかいう古い名によつても、その生い立ちをしよう、こ、立て、います。大阪は河の港であるとも、また海の港でもあります。豊臣秀吉が堺の商人を大阪に移し、徳川時代になつてここに諸藩の藏屋敷くらやしきを置くようになってから

は、その河海運輸の地の利は、ますます各地の物産の集散を大きくして、この商港を發達させたのでした。

大阪港に集つたものは各地の物産ばかりではなく、商賣で一身を起そうという人たちも諸國から集つて來たことは、今日その屋號とか町名とか川の名とか橋の名とかによつて知ることが出來ます。商業が盛んになるにつれて、物貨の運輸を便利にするために、水路の堀り割り盛んに行われ、例えば豊臣時代には、淀川の本流の他には、僅に東横堀川、西横堀川、阿波座堀川、天満堀川の四つの水路しかなかつたものが、徳川時代になつてから盛んに水路が開かれ、四通八達の状態になりました。大阪市の河川の九分九厘は元祿時代に完成されたといわれています。この商港は、あまり人口が密集し過ぎて、今日の都市が、その周圍の土地を市區に擴張するように、そのまわりの新地が盛んに開發されたのでした。

徳川時代に商港として發達した大阪は、明治になつて、陸運としての鐵道、ことに海運として航海の發達と共に一そう發展するようになりました。

四十年前の大阪港と今日における大阪港との海運の相違を、わたしの印象によつて

いよいよ立ててみましょう。

わたしが四十年前に大阪にいつた當時は、船舶の出入口である安治川口は、今のようになつておらず、雨のふる日などは實に道路が悪く、當時わたしの書いたものに、

『大阪商船會社の横通りは、すぐ安治川岸だが、その川岸は何丁という間、屋根の懸つた荷揚げ場で、船の發着の時は、客の乗降やら荷物の揚げ卸しで雑沓する。雨の降りしきる路のどろどろした時でも、五人や十人の人夫が柄の長い幅のほそい荷車を曳いておらぬ時はない。この河岸には、いつも千とん内外の船が三艘も四艘も横づけになつていたので、それから立ちのぼる煤煙のため、空はなんとなくどんよりしている。こんなところでも、夜になると晝間の雑沓にひきかえてひっそりするが、船の舳につるしてある大きな提燈の光が、いかにも陽氣である。提燈の丈は三尺もあるが、目に立つように徳島行き、淡路行きなどと筆太にその夜の航海先を示している。町の片側には、船宿を始め、大阪名物の粟菓子や蜜柑や雜貨などを賣つている小店が、六七軒、夜遅くなるまで店を張つている。こゝらを歩いて見ると、わたしは今更ながら

大阪の港が、毎日々々たくさんの船で四國や中國の旅客や荷物を呑み吐きする力の偉いのに驚かざるを得ない。』と記されてありますが、最近、わたしが大阪港から四國の高松にゆこうとして、この安治川口の築港にいつてみると、以前とはまるで違つて、安治川口の左岸にそつて突き出た町並の整つた三條通りが出来て、掛け橋近くまで電車が通じるようになっていました。三條通りには、航海の出入に必要な運漕店うんそうてんとか旅館とかが出来ている上に、新に大阪府の測候所そくこうじょも設けられてあるのは、實に組織的となつたことをしようこ立てています。そこには歲月が大阪の海運の上に及ぼした大きなえいさよをみる事が出来ます。

このように、大阪市は港として大きな都會として生い立つたとともに、また種々の工業とくに綿絲、綿織り物の産地となり、その産額は全國第一となつています。その種類は綿絲の他、白木綿、綿織り物、タオル、シャツ、ズボン下などです。それですから大阪市内における人口の動きは、この港としての働きと工業と商業の盛んなことが、その主なる原因となつてゐることも記憶すべきです。

わたしは、大都會の動きとして、わずかに東京と大阪を示したに過ぎませんが、大小の違いはあるにしても、このような動きが、皆さんの郷土に近い都市にも、それぞれ現われていると思ひます。

都市計畫

都會は田舎に比べると、そこに住つてゐる人たちの住居が著しく密集しています。そして都會が大きくなればなるほど、その群集の活動力が大きくなり、またその密集の程度もはげしくなつて來ますから、これらの人たちのために、新に澤山の住宅が必要となつて、宅地に使用される土地も從來よりは遙かに廣い所が要求されることになります。そして更に電車とか自動車とか通ることになると、從來の狭い道幅では不自由ですからそれを取り擴げる必要が起つて來るし、また新に工場を設けたり市場を置くことになると、その敷地をも工夫しなければならぬことになります。今まで井戸水を飲料としていた都會の人たちも、衛生上から水道を設けることになると、現在の都會の人口が將來どのくらいの割合で増してゆくかということをも考へて水道を設計しなければなりません。

同じ都會といつても、このように人口の集り方や増し方の激しい都會に對しては、國家としても、また都會に住つてゐる人たちとしても、相當に都市としての計畫を立て、仕事を進めてゆかなければならないのです。それが大きな都市になればなるほどその計畫が重要な意味をもつて來るので、これを都市計畫といひます。歐米諸國ではこれに對して國家も都會それ自身もその都會の生い立や生活を考えながら、都會の現在と將來に對しての計畫を立てていますが、わが國でも、この都市計畫についての法律を實際に行うことになつたのは大正九年五月で、同十一年の五月に、内務省都市計畫局から公にされた『都市計畫要鑑』という本には、東京、京都、大阪、横濱、神戸、名古屋の六大都市の都市計畫について詳しく述べ、その中に

都市計畫の本領は、都市を一つの生きたもの（有機體）と見て、それに對してあてはまつた（合理的）設計を立てることにある。即ち都市の道路や港灣や水道等を別々に離れてゐる仕事と見ないで、これらを都市に築き上げる一つ一つの要素と見て、その連絡なり統一なりを計るのが都市計畫である。という言葉があります。その後六大都市の外、

札幌	函館	小樽	仙臺	新潟	長岡	富山
長野	松本	静岡	濱松	清水	高岡	金澤
豊橋	岡崎	一宮	岐阜	大垣	津	和歌山
岡山	広島	下關	高松	丸亀	高知	福岡
大牟田	戸畑	長崎	門司	小倉	八幡	若松
佐世保	熊本	大分	鹿児島			

の三十九市に都市計畫が行われましたが、昭和八年には法律が改正されて、人口一萬以上の町即ち市に準ずるほどの町にも、この計畫を施行することが出来るようになったことは、國民生活を組織的にしようとする大きな企の現われです。

田舎と都會とは、一國の生活の上からいへば車の兩輪のようなもので、都會の人たちは、都市計畫によつて都會の動きが順序立つて行われ、その生活が改善されるとともに、その古さも保存されるように努めなければなりませんし、また田舎の生活も今までよりも、順序立つて改善されなければなりません。田舎は田舎らしくまた都

會は都會らしく、そして兩方とも、いきいきとのびてゆかなければその國のほんとうの發達は望まれません。

近年、地方計畫ということが唱えられ、殊にそれが最近、都府縣での未開發地域の地方計畫として誕生して來たことは、都市中心であつた地方計畫よりも進歩した計畫であり、それが農業地域にも及んで來れば田舎と都市の生活計畫が各々の特色を發揮しながらおたがいに扶け合つてゆくことになるでしょう。

地方計畫

わが國の都市計畫が今より三十年前に行われたのに比べると、地方計畫は都市計畫専門家の間に唱えられながら長い間實際には行われずになりましたが、それが敗戦後になつて漸く實行化されるようになったのです。この地方計畫は都府縣においての各地域に行われればよいのですけれども、日本の現在としては、國家の財政からいつてもまた地方の財政からいつても實現が困難でしょうから、今日では資源のまだ開發されていない地域についての計畫を都府縣から出させて、それによつて國家が補助して實

行させようとしています。わたしが二年近く山村經營の立場から關係している福島縣の奥會津地域は、南會津郡から大沼郡に亘り、香川縣よりも廣い山岳地域で、地下資源を始め原始林の多い林産資源と只見川の發電を目標とする水力資源など全國で指折りの未開發地域として指定されています。その開發の目安は何處にあるかといへば、まず開發に先き立つて行われるべき資源地區に對する交通運輸の解決です。道路の開通と物資の輸送關係です。

- 一、資源地區と最寄の驛を結ぶ道路
- 二、資源地區と近い村や町を結ぶ道路
- 三、物資が道路の上をどう動くか
- 四、道路（自動車）と鐵道（汽車）の輸送擔任の分野はどうか

このようにして開發による物資と人力によつて開發地區を周圍の地區よりもはみ出すように繁榮させようとするのです。しかも開發の目的は資源地區の利益を單に利用するばかりではいけないので、それはあくまでも地元民のためにも役立つように計畫されなければなりません。これが未開發地區に對する根本になる考えです。しかし現

在都府縣でやつている地方計畫、殊に未開發地區に對する考え方は果してこのような方向にむいてゐるでしょうか。これはなかなかむずかしい問題で今のみなさんには少しわかりにくいかも知れませんが、決して今の大人のひとだけで終ることではなく、將來日本が世界の國の人たちと同じような考え方を持つた國民になるためにも、自分たちの住んでいる土地をどのようにすればよく開發出来るかということを幼い心にも刻みつけておいてなかく見守るべきことなのです。

新しい東京

建設の目標

都會の芽にはじまつて、そのまわりの田舎との關係や都會の古さ、また位置や型について、過去の都會がどのような成り立ちを持つてゐるかを、生活と風景に現われた姿を通してみなさんに語つて來たわたしは今ここで、現在から未來に建設されてゆく新しい都會についてお話することになりました。此度の戰災によつてわたしたちは活動的であつた大きな都會の大部分を失つてしまいました。これは大變殘念なことですが、けれども、また考えようによつてはわたしたちの時代にわたしたちの力で新しい都會を創る機會にめぐり合せたのだとも言えましょう。それだけに責任も重い譯ですが、この焼跡の中から今までに見られなかつた新鮮な美しさを持つた都會が、理想から現實に一つ一つの形となつてゆくことを見るのは矢張り大きなよろこびではないでしょ

うか。勿論わたしたちは古い都會の持つているよさは、充分に認めますけれども、な
んと言つてもそれは封建的な時代に作られた形の都會でした。

これからの日本はみなさんもよくわかつていられるように、憲法も新しくなり、そ
れにつれてわたしたちの生活の上にもいろいろ大きな變化がありました。また國際
人として世界の國々とながりを持つためにほんとうに恥しくない國民になることを
考えてゆかなければならないので、わたしたちの住む都會もそれにふさわしい形が必
要になつたのです。それではその新しい都會の復興計畫は一體どのようなにしてすゝめ
られているのでしょうか。日本の首都である東京の場合を一つの例として考えて見ま
しょう。すつかり焼野原になつてしまつた東京の土の上に、いまやがては美しく花開
き、梢高い樹木になる未來への夢をふくんだ都會東京の種がまかれようとしているの
です。その種をまく人たちは東京都の知事安井誠一郎さんや建設局長の石川榮耀さん
をはじめ數多くの技術者の人たちです。都會は出來上る前に先立つて計畫を立てると
勞が少く功が多く、後からこれを改造するとなると無駄な費用が多くかゝつてその効
果が少いと言われているので、これまで自然に發達して來た都會を新しく計畫的に建

設してゆくとなるとそれだけしつかりした構想が必要になります。石川榮耀さんは
「新首都建設の構想」の中で次のように述べています。

「原理としては此はどんな都市を造る場合でも同じ事であるが交通が一番すくなくて
濟む都市であることが必要である。又凡ゆる施設が十分に活用されるような都市であ
つて欲しい。又社會的におたがいに極めて親しみ易く、和かに結合してゆけるような
町であつて欲しい。それから市民がどんな家に住んでいても、どの部屋、どの疊にも
陽のあたるような、太陽と光線と新鮮な空氣に恵まれた都市であつて欲しい」これは
言いかえると、健康な都會、仲の好い都會、楽しい都會、歩いて用の足りる都會、と
いう意味です。そして大きな都會には、人口のへるような計畫や交通の増さないよう
な計畫が大切な問題として考えられています。それにはどうするかというと、東京の
中心になる三十五區に住む人口を今後は精々三百萬以下に限ることにして、それ以上
の人口はこの中心の都會である東京から約四十キロも離れている、横須賀、平塚、厚
木、町田、八王子、立川、川越、大宮、野田、千葉など、東京の南から西、西から北
北から東の方角に連つている衛星都市エイセイとよばれる都會に分擔してもらふようにするの

です。そして衛星都市にはいり切らなければ更に外側の都市にまわします。この形は
廣域都市と名づけられます。また首都の中の構造もこれと同じように都心だけに集ま
らないようにできるだけひろげて三十五區の區域を大きく使うようにするのです。

今までの東京は地盤のもろい下町を經濟や政治の中心として發展して來て、住居の
方は山手方面にひろがつていのですから、山手と下町の交通問題はますます厄介に
なるばかりです。これはみなさんが毎日の交通の混雜を見ていられたらよくおわかり
になることでしょう。それではそれをゆるやかにするためにはどうすればいいでしょ
うか。まず、お勤めや働きにゆく場所を住居から歩いて通えるちかい所に移すこと、
また學校や買物にゆく所は幾つかに分けてつくれるのですから、住居の方を歩いてゆ
ける位置にきめることが考えられます。そして工場なら工場を一ヶ所に集め、住宅と
工場がダラシなく入り亂れないようにして、その次が交通機關の整備です。電車、自
動車などの乗物が充分にあつて、これが思い切つてその能力を發揮出來るようになる
ことです。そしてわたしたちの住んでいる所から半キロ歩けば市場があり、一キロ歩
けば商店街があり、二キロ歩けば娛樂街があるというふうに、お役所のことでも町の

まん中に都廳があり、二キロ歩けば區役所があることになり、また病氣をした時入る
病院も手近な所にあつて、その病院もまわりが静かでゆつくり入院していただけるよう
にするのです。そうすれば今までのように病院と工場が隣り合せになつていて病人が
苦しんだり、圖書館のまわりがうるさくて落ちついて讀書が出來ないというようなこ
とはなくなりませす。

世界中の都會が目標にして來たことの中に、「特に太陽のよく當る都市」というのが
ありますが、日本のように肺を病む人が殊に多い國では大切なことなので、此度の計
畫でも是非「どの家の、どの部室にも太陽の當る町」を造ることがとり上げられてい
ます。そのためには住宅地は、少くとも五十坪以上の面積にし、家はその半分以下に
建てるようにしなければなりません。その他道路をひろくしたり、公園をこしらえたり、
なるべく太陽の光線がみなさんの身體に當るように工夫をするのですが、そればかり
でなく、首都の中にも農業地を設けて食糧を自分たちの手でつくり、土に親しむ
ことによつて健康な都會をつくり上げてゆくのです。

そうして首都東京に住む七百萬の人たちがもつと仲よく親しみ、あけひろげた明る

い精神をもつために、現在の三十五區を十四、五の新しい區に分け直して、各區をそれぞれ一つの市のような自治體としてその各中心に市役所を置き、東京都はそれらの市の聯合體という形にするのです。こうしてつくられた都會の住宅地には住宅地の廣場、町には町の廣場があつて働いた後のたのしさを充分味わうことが出来ます。こうなつて東京ははじめて民主的な美しい都會になる譯です。

地域と地區

このような新しい東京を創り出すための都市計畫を實際にやつてゆく上にまず必要なことは地域制ということです。地域制というのは、建物の建て方をさめることによつて今までに述べた構想を實地に現わしてゆこうとするのです。地域制を分けて用途と空地の二つになります。用途地域は工場地域と住居地域に大別されて、此の他に農業地域というのが新しく出来ましたが、これは食糧の事情や人口の制限をするために東京の郊外を農業地とさめることになっています。この方法は世界の都市計畫の歴史の上でも五十年も前から言われていたことなのですが、なかなか實行されずにいたの

を此度はじめてやることになつたのです。住居地域はいくつかの種類に分けることが出来ますが、特に珍らしいことは勤勞者地區とでも言うのでしょうか、勤勞地に近いところに勤勞者だけが住むようにといふさめ方です。それはこうすることで交通問題が非常に樂になるからです。また工業地域は國民の保健や工場の能率も考えて、重要道路にそうとか驛のちかくにするとか交通機關に恵まれた所を充分に使うように考えられています。そして大工業地域のうちには中小工業地域を設けて、これまでのようにいろいろな工場が勝手に建つということになるべくやめて、整理する方向に變つて来ました。商業地域もやはりこれを指定して秩序のある首都を創り上げるように工夫されています。

空地地域は首都の郊外は一割しか土地を使わずに一階建の建物だけを建て、中心地區は七割の土地が使えて七階まで建てる事が出来るといふ風にしてから、中間の地帯はそれに比例して或は二階、三階、四階、或は二割、三割四割と土地が使えるように定められています。これは主として太陽の光線と新鮮な空氣を與えることを目的としています。

これらの地域制の他に特別地区というのがありますが、これは地域制のようにぼんやりと広い面積を、工場、住居、商業とさめるばかりでなく、その中に更に或る地区は特別な用途にしか使えないようにきめてゆくのです。これは此度はじめて出来た制度で、政治地区、文教地区、消費地区、医療地区、交通地区などが考えられています。政治地区は政治機關が集まるところで、これは二つの種類に分けることが出来ません。一つは日本全體の首都であるから全國の行政機關が集るよう到来なければならぬし、一つは首都東京の行政機關の集るところが出来て来る譯です。そこでそれには赤坂溜池から四谷見附、市ヶ谷、後樂園邊までの外堀に沿つて百米ぐらいの公園道路をつくりこれに配置するのがよいという説もあります。

文教地区は東大、早稲田、慶應の所在地を中心に組み立てるといふ案があります。消費地区は銀座、新宿、浅草を特別地区にしたらよいという考えです。銀座が今までの銀座とちがう點は國際消費の中心になるということです。銀座の大通りは全部電車を通さないことにして、尾張町の交叉點には大きな廣場を設けることになるし、新宿もまた新しい驛前廣場を中心に發展させてゆくことが考えられています。医療地区は

今のところ駿河臺邊と築地の聖路加附近が案に上つています。

なお交通地区には海陸連絡の中心とか或は重要な貨物驛の所在地、また下町の運河のある地区などは今までよりもつと計画的に利用されなければならないと言われているので、これは河川や港わんなどと共にとり上げられています。その他に照明では交通の要所、驛のまわりなどを明るくすることに注意がはらわれていると同時に、緑地帯であるとか、高速度道路、幹線街路網、地下鐵道などの施設計畫もすゝめられています。

以上でわたしはみなさん共に、首都東京の建設に直接に携つていられる石川榮耀さんの發表された構想によつて新らしく生まれ出する東京の姿を描いてみました。敗戦という悪條件の中でこの建設の目標をほんとうに實現するためには、現在その計畫に當つていられる人たちの努力も勿論大切なことにちがひありませんが、その立てられた計畫を自分たちのものとして考えて、首都東京を世界の都會のどれにくらべても劣らない立派な美しい都會に、誰でもが自由にたのしめる都會にすることにみなさんも責任と誇りがある譯です。西洋の諺にも「ローマは一日にして成らず」と言われている

ます。一本の街路樹、一筋の道路、一軒の家にもその時代の、その國の人の精神が現われるものです。わたしたちが後世の人たちから笑われないために、忍耐と努力で都民のためのほんとうに美しい都會を創り上げましょう。

主要都會と戦災

戦後の首都東京の復興と建設について大體を知ることが出来たわたしたちは、同じように復興と建設が全國の戦災都市(閣議決定)においてもまたすゝめられていることを信じたいと思います。今主要都會の人口を見ますと十萬以上の都會五十二のうちで、戦災と閣議で決定されたものが東京を入れると三十五あります。これらの増加率を比較してみますと、前年より著しく増加したものに東京、大阪、名古屋、横濱、神戸、仙台、川崎、熊本、尼ヶ崎、広島、鹿児島、大牟田、岡山、富山、徳島、高松の十六があります。これらの高率を示すための経済的な原因も充分考えられますけれども、それに伴う復興と建設の速度とがそれに深いつながりをもっているのです。生活の形とかものの考え方などにずい分大きな変化があつたと思います。そこでみなさんが過去の田舎と都會について學ばれたことを、これらの現在の戦災都市や、また戦災にあわなかつた都會と比べてみて、現實に動いている風景の中からも田舎と都會の姿を考えて

主要戦災都市竣工住宅数

(昭和21年中)		(昭和22年中)	
都	戸	都	戸
宇都宮	2,784	銚子	1,433
前橋	1,655	東京	24,020
熊谷	1,040	静岡	3,298
東横川	26,273	濱松	1,920
京濱	6,955	名古屋	4,753
野崎	2,077	豊橋	1,985
野阜	1,241	富山	3,679
岡	2,304	大阪	10,518
静	4,201	神戸	4,226
濱	4,855	石	1,104
清	1,290	島	2,248
沼	1,408	山	1,189
名	4,174	高知	2,119
古	1,124	長崎	1,243
豊	2,484	宮崎	1,036
富	3,748	都城	1,006
福	6,069	鹿兒島	2,087
大	1,096		
堺	1,372		
神	1,089		
歌	2,981		
和	1,502		
岡	2,011		
廣	1,238		
福	1,211		
宇	1,169		
德	1,466		
松	1,844		
福	1,460		
大	2,968		
熊	2,079		
鹿			
兒			
島			

頂きたいのです。(主要都會人口数並增加率表参照)

最近、専門の『建築雑誌』(昭和二十三年七三(八號・七四二號))を見ると終戦から昭和二十一年末までの竣工建物の統計(七三(八號))と同二十二年中竣工建物の統計の中に、第五表として主要戦災都市竣工建物の統計をあげています。これによると戦災したものが共にいずれも八十九

主要都會(人口10萬以上)人口数並增加率表

都會	人口 (昭和22年)	昭和21-22年增加率 %	都會	人口 (昭和22年)	昭和21-22年增加率 %
× 東京都の區	4,177,548	21.4	小樽	164,934	9.5
× 大阪府	1,559,310	20.5	× 松山	147,967	16.2
× 京都府	999,660	9.3	× 高山	147,120	16.8
× 名古屋	853,085	18.6	× 岡山	140,631	30.0
× 横濱	814,379	15.3	× 富山	137,818	20.9
× 神戶	607,079	20.9	× 布高	133,934	8.8
× 福仙	328,548	13.8	× 高濱	133,858	8.1
× 横札	293,816	15.2	× 千	129,355	12.3
× 須賀	261,805	4.8	× 葉	125,767	23.5
× 幌	259,602	14.2	× 千	122,006	14.6
× 川崎	252,923	20.3	秋川	116,300	9.6
× 熊本	245,841	19.3	× 日	116,007	9.5
× 尼崎	233,183	21.5	× 四門	112,433	13.8
× 金澤	231,441	11.6	× 司	109,567	7.9
× 廣島	224,100	30.4	× 宮	108,893	11.8
× 函館	211,441	12.5	宇部	108,728	19.8
× 靜岡	205,737	13.0	旭	107,508	15.1
× 新長	204,477	11.0	盛	107,096	8.1
× 長崎	198,642	14.1	× 浦	106,176	7.9
× 姫路	197,299	12.3	× 甲	104,993	20.4
× 堺	194,048	11.7	× 德	103,320	16.5
× 吳	185,740	9.1	× 高	101,403	27.3
× 下	176,666	8.4			
× 佐	175,233	7.2			
× 和	171,800	12.0			
× 鹿兒	170,416	38.0			
× 小	168,119	12.8			
× 八	167,829	8.5			
× 岐	166,995	12.4			
× 大	166,438	15.4			

で、北は北海道から南は鹿児島に及んでいます。建物の種別は住宅と併用住宅とその他の建物に分れています。住宅で千戸以上竣工した所は、終戦から二十一年末までに三十一市、二十二年中のものは十七となつています。その中、兩年度にまたがつている所は東京、静岡、濱松、名古屋、豊橋、富山、大阪、神戸、廣島、鹿児島の中で、これらの戦災を受けた都會の生活の實際については、わたしたち都會に關心をもつているものは、前に都會のところで述べたように事實がどのように變化しているか、またそれが今後どう動いてゆくか、將來研究しなければならぬ大きな問題がふくまれていると考えています。これまでわが國の都會の改善があまりすまなかつた原因はいろいろあつたでしょうけれども、國民が都會に關する知識のないことが最も大きいと言われています。わたしは前に田舎と都會は車の兩輪のようなものだと思いましたが、一つの車輪でもまん中から放射線状にひろがる力の關係がくずれたらこわれてしまいます。このつながりをよく考えて、現在のすべてを新しく建設してゆく時代に、誤つていたことを反省して、日本の田舎と都會が素直な姿で成長してゆくことを望んでいます。

昭和二十四年十一月七日 初版印刷
昭和二十四年十一月十日 初版發行

田 舎 と 都 會
定價百三十拾圓

著 者 小 田 内 通 敏

發 行 者 守 屋 紀 美 雄

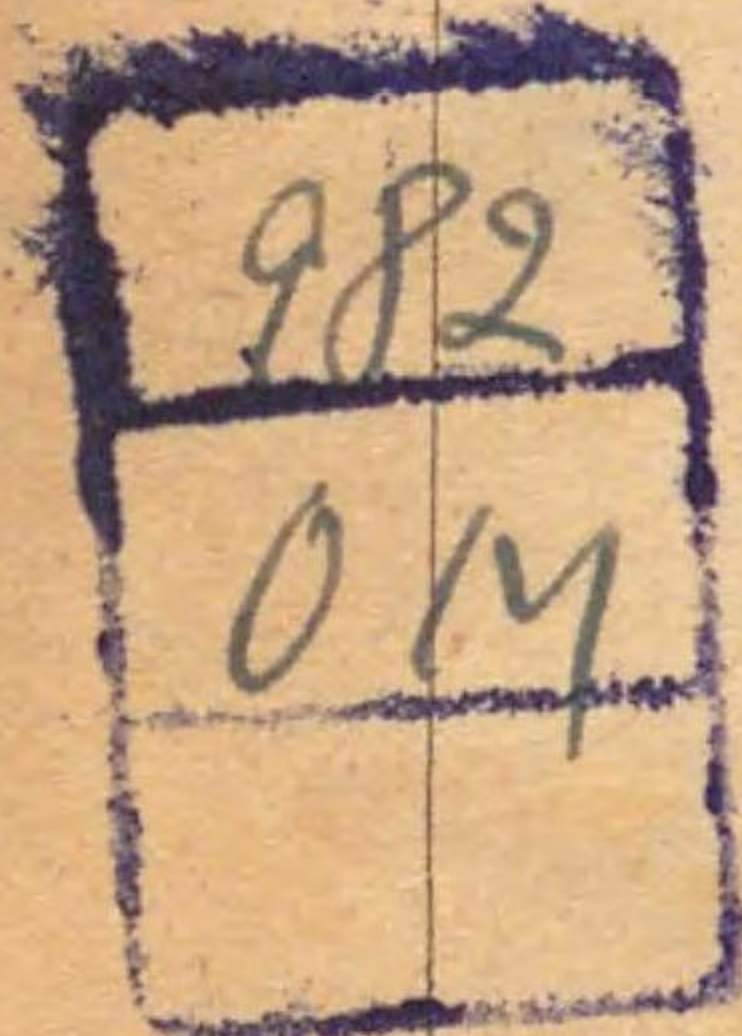
印 刷 所 日 之 出 印 刷 株 式 會 社

東京都豊島區日之出町一ノ一二九

發 行 所 株 式 帝 國 書 院

東京都中央區日本橋吳服橋二ノ五大和ビル

電話 日本橋(24)五七四五番
振替口座 東京 六七〇一四番



著者略歴

○明治三十二年 東京高等師範学校地理歴史科を卒業

○早稻田中学校地理歴史教授を擔當

○早稻田大學文學部「人文地理學」擔當

○慶應義塾大學文學部の「人文地理學」擔當

○文部省郷土研究並びに郷土教育調査

○パリー國際地理學會議列席

○ワルソー國際地理學會議列席

○福島縣山村經營（奥會津開發）に従い現在に至る

主なる著作

大正二年 「我が國」

大正三年 「都市と村落」

大正七年 「帝都と近郊」

昭和二年 「聚落と地理」

昭和四年 「都市地理研究」

昭和五年 「郷土地理研究」

昭和七年 「郷土教育運動」

昭和六年 「日本風土と生活形態」

「航空寫眞の地理的研究」

昭和十三年 「風土日本の研究基準」

昭和十四年 「日本郷土學」

